読み切り二次創作　短編集

茶虎亜樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
読み切り二次創作　短編集

【Ｎコード】
Ｎ４０６８Ｏ

【作者名】
茶虎亜樹

【あらすじ】
これまで書き溜めてきた読み切り短編文章を公開していきます。
初期の頃に書いた物、最近になって書き直した物、公開しても大丈夫だろうと判断した文章だけ公開します。
黒歴史かな……と悩んだ場合は、公開する可能性があるので注意してください。

なお、書き溜めた文章以外にも、新しく短編を完成させた場合はここで公開することになります。

第一話　とある日の情景　化物語（前書き）

初めて化物語（アニメ）を見た後、戦場ヶ原さんに思い切り毒されて書いてしまった文章。

暦くんとひたぎさんがラブラブしてます。

第一話　とある日の情景　化物語

休日の昼下がり、僕は突如として拉致された。

相手は言うまでもないだろう、目前で堂々と着替えを進める戦場ヶ原ひたぎに他ならない。

ちなみに彼女が着替えているという点から此処が戦場ヶ原の家である事は明白。

こんな事を考えつつ、僕の両目はその最小限の下着だけで包まれた白い素肌を収めている。

決して下心があるわけではなく、突然服を脱ぎ始めた行動に驚愕のあまり……うん、その筈だ。

そうだと信じないと、何か大切なものが砕け散りそうな気がする。

そこに、

「阿良々木くん？いくら私の身体が魅力的だからといって、そこまで食い入るように見られては……さすがの戦場ヶ原ひたぎと言えど羞恥を感じざるを得ないわ」

なんて声が響いた。

発声元は未だに衣服を纏うことなく、さらに半裸を強調するように胸を張りながら近付いてくる。

「それは戦場ヶ原が……」

「『ひたぎ』」

「失礼。それは、ひたぎさんが下着姿になったから驚いてしまったから。まぁ……天下のひたぎさんが僕ごときの視線で動じるとは思えないけどね」

温度を増していく顔を伏せ、必死に冷静さを取り繕いながら反撃を試みる。

しかし……窮鼠が猫に噛みついたところで、鼠は鼠でしかない。

後に待つのは獲物として狩られる運命だけだ。

「ねぇ……阿良々木くん。いえ、こ・よ・み？私の外見から何の変化も読み取る事ができなかったのは致し方ない事だけれど。本当の気持ちを言わせてもらえば、私は暦に裸体を見せる事に喜びを感じている節があるわ。ちなみに決して露出狂的な喜びではなく、特定の人物……そう、特別な想いを抱いた相手に見せる。見てもらえるという事実による喜びと言った方が正確ね。えっと……つまり、私は何を言いたかったのかしら？」

指摘されてから視線をずらしているのでその姿を確認することは出来ないし、するつもりは一切無い。

しかし、全く衣擦れの音がしなかったので進行形で半裸を保っているのだろう。

「僕が知るわけないだろうッ！！！！」

「ふふっ……相変わらず可愛らしい反応をしてくれるわね。そういう所、私はとても好きよ。暦の可愛らしさを二時間半ほど語りたいのだけれど、さっきの件について思い出したから教えてあげる」

「つまり先程の話で私が何を言いたかったかというと……私が裸体を見せたいのは阿良々木暦ただ一人であり、私の裸体を見て良いのは阿良々木暦を除いて絶無ということ。だからね……」

ふわり、と僕の両頬に温かい指先が触れ、誘われるように、導かれるように顔を上げさせられる。

眼前に広がるのは純白の肌。

惜し気もなく滑らかな肌を見せている。

僕の視線を感じたのか、その表面は僅かに粟立ち、淡く血色を纏い桜色へと変化する。

「暦は堂々と私の裸体を視姦して楽しめばいいの。胸を張りなさい。貴方はこの私、戦場ヶ原ひたぎが選んだ初めてにして最後の想い人なのだから」

「……っ！！」

めちゃくちゃな言葉なのに、そこに込められている情愛の響きに嘘偽りは欠片もない。

「ねぇ、暦……口づけをしましょう」

獲物を弄ぶ肉食獣のように、妖艶すぎる淫魔のように、清純な乙女のように、僕の恋人である戦場ヶ原ひたぎは頬を染めて微笑む。

その表情、底の見えない深さを湛えた瞳に囚われ、僕は思考も言葉も全て失う。

真っ白に染まっていく脳内と対照的に際限なく温度を上げ続ける身体。

彼女と僕の運命が交錯し、歯車が動き始めた夕焼けに染まる放課後。

あの時と同じように彼女は両手を広げる。

しかし、その指先に無数の文房具が握られることはなかった。

両手は愛しい者を腕の中に収める時特有の柔らかさと温かさをもって僕を抱き寄せる。

耳元で囁かれたのは、恐ろしくなるほど甘い響きを含んだ誘惑。

「――――――――――」

何も言えない。

言葉を紡いだ瞬間に致命的な『何か』が壊れてしまうような予感がする。

沈黙を続ける僕の様子を見て、戦場ヶ原ひたぎは慈愛と嗜虐、相反する微笑みを浮かべ、何の躊躇いもなく僕の唇を奪った。

「んっ……はぁ、んむ……」

喰らい合うように唇を交わし、慈しむようにそっと重ね合わせる。

絡みつくような快感が走り、何もかも忘れて堕ちていく。

残されるのは唇と舌の感触と味、鼻腔に満ちる彼女の扇情的な甘い薫り。

「は……ぁぅ、ん……」

どこまでも、永遠に続くように思えた口づけの輪舞が静かに終わる。

互いの名残惜しさを表すように唾液が銀色の糸を紡ぎ出し、目を開くとぼやけた視界に彼女の姿が映る。

頬はより赤く染まり、陶然とした表情で息を荒げる彼女の姿。

流水のように滑らかな髪が、処女雪のような白さを薄紅に染めた美しい肌が、震える長い睫毛に彩られた宝玉の瞳が、艶やかに濡れ光る唇が、目を覚ました狂おしい情欲を煽り立てていく。

「はぁ、ふぅ……そんなに、瞳をギラつかせて。まるで、いえ……本当に野獣のようね。そんなに『私』が欲しいの？喰い尽すように『私』の全てを奪い、壊してみたいの？ねぇ……答えなさい、阿良々木暦」

問いかけのカタチでありながら、それは懇願の叫び。

そうして欲しいと乞い願う欲望の言葉。

もう、迷う理性も押し止める倫理も要らない。
必要な言葉はたった一言でいい。
「……『ひたぎ』……」
僕の口から、僕の意思で紡いだ己の名を聞いた瞬間、眼前の少女は身を震わせ熱い吐息を漏らす。
「そう、それでいいの……貴方が私だけのモノであるように、私は貴方だけのモノなのだから。迷わず、貴方の望むままに蹂躙しなさい」
欲望と歓喜に潤みきった瞳が揺れ、自らが紡いだ言霊が情欲の炎に薪をくべる。
歯止めをかける無粋な者はおらず、狂乱にも似た空気は加速を続けていく。
戦場ヶ原ひたぎと阿良々木暦は人格と理性を捨て去り、ヒトとして、生物として定められた本能に身を任せようと……。
「ほほぅ……閨における男性の行動とはこのようなモノなのだな。やはり、知識で学んでも現実の生々しさの前では塵芥のようだ！男も女も本能の前では獣と化すのか！！」
「あぅ……あわ……はぁぁ～」
「支配するような物言いの中に隠しようのない女の媚を含ませ、男

の情欲を誘う……これが生まれながらに持った女の魔性、妖艶さという物なのですね、ありゃりゃぎさん！！」

隙間だらけの戦場ヶ原宅に響く囁き声。

水どころか液体窒素を直接流し込まれたように冷え切っていく身体と気分。

それなのに妙に加熱され、炸裂の瞬間を待ち焦がれる部分もある。

ぎしぎしと軋む首を回し、音の発せられた方向に視線を向けると、隙間に並んだ三対の瞳。

それほど回転が速いとは言えない僕の脳みそが該当人物を導き出す。

興味津津と輝きを放ち、瞬きをする暇すら惜しむように見つめるのは神原駿河。

罪悪感と後悔、抑え切れない興味の狭間で揺れ動き、結果的に目を離せなかったと見える千石撫子。

無駄に、本当に無駄に気合いの入った目で見つめ、熱の入った解説を繰り広げ僕の名前を間違えている八九寺真宵。

僕と目が合うと焦るでもなく「失礼、かみまみた」なんて言い放ちやがった。

うん、こればっかりは限界だろう。

ちなみに僕の身体に腕を回し、横たわっていた戦場ヶ原ひたぎの場

合、筆舌に尽くしがたい鬼面と化している。

僕の恋人である彼女の名誉を守るべく、詳細な描写は避けておこう。

通常の人間より回復が早く、丈夫な僕だって不死ではないし、痛覚は正常だ。

正直言って痛いのは御免で命は惜しい。

「お前ら……」

「貴女たち……」

「「生きて帰れると思うなよ……」」

その日から町でいくつかの噂が飛び交うようになった。

いわく、この世のモノとは思えない女の嬌声……ではなく、絶叫が響き渡った。

いわく、姿は見えないのに「許してください、許してください、許して許して許して……あう、かみまみた」と繰り返す少女の声が聞こえた。

いわく、争い事と無縁の大人しい女生徒がしばらく外に出れないほど怯えていた。

いわく、男女が揃って入った日のボロ家には何があっても近付いてはいけない。

「こんな噂が流れているらしいぞ。一体、何が元ネタなんだろうな……戦場ヶ原は知ってるか？」

「『ひたぎ』と呼んで……まったく、何度言えば分かるのかしら？噂を聞いたことはあるけど、元ネタについては知らないわ」

「まぁ、いいじゃない。それより阿良々木くん、あなたのリサイクルすら不可能なポンコツ頭に『今日は私の家で勉強をする』という約束は残ってるかしら？」

「お前だって名字で呼んでる……って約束の確認と一緒に罵るのは止めてくれ……。朝から繰り返し、問われ続けてれば嫌でも忘れない……」

「それは僥倖。あなたの貧弱な記憶力にかけた僅かな期待が無駄にならなくて良かったわ。じゃあ行くわよ」

「あぁ、それと『なぜ私が名字で呼ぶのか？』という疑問に答えておくとね……他人にあなたの名前を聞かれたくないのよ」

「……奇遇だな。僕も同じ気持ちだ」

「えっ……？」

「さぁ、行くぞ。勉強教えてくれるんだろ？」

二人揃って真っ赤になったまま歩き出す。

そんなこんなで今日も戦場ヶ原ひたぎと阿良々木暦は仲良く、世間

一般で言うバカップルをやっている。

第一話　とある日の情景　化物語（後書き）

これを書いた後で、虎の分際で西尾維新様の作品を二次創作しようなど思い上がりも甚だしい！！と思い知らされたっけな…。

第二話　艶物語　偽物語（前書き）

西尾維新様の作品続きで、今回は暦くん×火憐ちゃんの二次創作です。

少し前に書いた文章で、偽物語を見て、火憐ちゃんのお兄ちゃんラブっぷりに蕩れて書いた物。

第二話　艶物語　偽物語

水底から水面へ向けてゆっくりと浮き上がっていく。そんな感覚と共に意識が覚醒へと向かう。カーテンの隙間から射し込む陽光に僅かな恐怖心が起こり、淡雪のように溶け消えた。

「――――――ん、ふあぁ、あ」

いつもなら妹達によって騒がしく起こされるところだが、どうやらその前に目が覚めたようだ。欠伸をしながら身体を起こし――

「うん？」

右手が何か柔らかい物を鷲掴みにしてしまう。何と言えばいいのか、現実逃避したくなる光景が右手の先に広がっている、そんな気がして仕方がない。それでも、今、この瞬間が阿良々木暦にとっての現実であるのは疑いようもなく、逃避していては一向に話が進まないどころか放置すればさらに被害が広がってしまうのは自明なので、自らの置かれている状況を確認する。

「はぁ……まさか、これまで様々な漫画やアニメなんかで使われ続けて王道どころか古典的と呼べる状況に置かれる日が来るとは思わなかった」

一人用のためそれほど広いとは言えないベッドの上、身体を起こした僕の右側ですやすやと寝息を立てる人間の姿がある。そして、身体を起こすためについた僕の右手はそいつの身体の一部分を掴んでしまっている。

「しかも……初めての相手がコイツとはな…」

だらだらと描写してきたが要するに、目覚めたら僕の隣で大きい方の妹…阿良々木火憐が寝ており、不可抗力で僕はその胸をがっしりと鷲掴みしてしまっている。こういう状況だ。というか、我が妹である火憐ちゃんは寝る時に胸部補正下着を着用しない畑の人間らしい。そして、超戦闘力を有してるくせに割と豊かだ。しかし、当然のことながら羽川には遠く及ばない。触ってないけどね！！あの時の決断を良しと思いたいけど、どうしても一抹の後悔を拭いきれないのは男子ゆえである。

「唇と唇でアレするイベントは戦場ヶ原が初めてだったけど……他のイベントに関しては別のヤツとの方が先なんだよな…デートとか、上下セットの下着とか、今回とか」

血を分けた妹の胸なんかに欲情するほど僕は落ちぶれているわけではないが、物思いに耽るあまり手を離すのを忘れていたのはご愛敬だ。

「それにしても起きないな……おーい、火憐ちゃーん？そろそろ起きないと蹴落とすぞー？」

「――――ん、んー」

呼びかけに多少の反応を見せたが、寝惚けているのか何なのか、胸を握ったままの僕の手を自分の両手で握り締めて固定する。こうなっては手を離すこともままならない。そこで僕が取る行動はひとつ。

「そりゃ」

何となく掛け声を出しつつ揉んでみた。沈み込んだ指を跳ね返すような弾力を持った柔らかさが伝わってくる。ものすごく間違った方向に事が進んでいるのに、それを『まあいいや』なんて思ってしまう自分が居て、妹の胸なんかに欲望とか湧き上がるはず無いのに手の動きが止められない。

「ぁう、ん……はっ…あ」

そうこうしてるうちに眠っている火憐ちゃんの口からはやたらと艶っぽい吐息が漏れてきてるし、薄暗い部屋の中でもはっきり分かるほどに頬が紅潮してるし、どうしたらいいのか分からなくなってきた。

「あ、んん！？ふぁ、あ、ああ」

指と指の間に何かが挟まった瞬間に火憐ちゃんの声が高くなる。手首の辺りを握った手はじっとりと汗ばみ、耐えるように丸くなった身体がふるふると小刻みに震える。綺麗に整った眉はハの字になり、『眠っている』という状態を必死で保とうとするようにぎゅっと目蓋を閉じている。その姿があまりにも可愛らしくて、吸い寄せられるようにそっと顔を近づけていく。

「はっ、はぁ、あっ！あぅう！」

「――――火憐ちゃん」

「にいちゃ――――あっ、んっ、んん――――！！」

うっすらと目蓋が開かれ、それに隠されていた潤んだ瞳と視線が絡まった瞬間、耳元で火憐ちゃんの名前を囁く。同時に全身の震えと

握り締めた指の篭もる力が最大に達し、荒く息を吐きながら脱力する

「はぁ、はぁ、ん……はぁ……にい、ちゃん…」

「あ、えーと……おはよう、火憐ちゃん」

ぼんやりと熱っぽく僕の顔を見つめる視線と、破裂しそうに高ぶる鼓動から意識を逸らすためにひとまず朝の挨拶をしてみた。

「かれんちゃ……うわっ！？」

流れるように鮮やかな手並みで体勢を崩され、上半身だけ起こした格好から身体の右側面を下にして、火憐ちゃんと向き合うような状態にされる。すぐに起き上がろうとして、その意志を完全に折られてしまった。

「起きんな、兄ちゃん」

なんて言葉を、抱き付きながら小さな声で言われたら折れる他ないと思う。

「———あんな風に、触るなんて…反則だぞ……。びっくりしたじゃんか…」

表情を見られるのが恥ずかしいのか、顔を僕の胸元に押しつけながら火憐ちゃんが呟く。

「えっと……ごめん。でも、起きてたならさっさと振り払うなり、何かしら行動すれば良かったのに」

「それは……あれだよ、異性の胸と無縁な兄ちゃんのために、従順な妹が一肌脱いでやろうと思ったから……かな？」

まさか答えが半疑問形で返ってくるとは思わなかった。反応が無いのを良いことに妹の胸を好き勝手にした僕に色々と大きな問題があるけど……火憐ちゃんの対応にも問題があるような気がする。

「まぁ、細かいことは気にすんなよ兄ちゃん。その……あたしは嫌じゃなかったから、行動しなかったんだし…。あれだ、同意の上での行為ってやつだから」

「自分でやっといて何だけど……兄妹でっていうのはかなり大きな問題だ」

「いいじゃんか、固いことは言いっこ無し。あたしさぁ……兄ちゃんなら初めてをあげても良いって思ってるけど？」

どうにも先日の歯磨きの一件以来、火憐ちゃんの中で何かが弾け飛んでるような気がしてならない。もちろん僕の中の物も。こんなめちゃくちゃな言葉を言ってる火憐ちゃんを心底『可愛い』なんて思ってるし、ごく自然に抱き付いてる火憐ちゃんの背中に腕を回してしまってるし。

「実現してしまいそうだから余計なことは言わないでくれ」

「ちぇー。兄ちゃんのかいしょーなし。」

「これ以上の甲斐性があったら色々と大変だから。それで話は変わるが、なんでお前は僕のベッドに居たんだ？」

「変えなくていいのに……。あー、それは……その、一緒に寝たいなーとか思い立って…さ。そんで、月火ちゃんに気付かれないよう夜中にこっそり抜け出して、上手い具合に兄ちゃんの右側が空いてたから滑り込んでみた」

「なるほどね……その結果、『目覚めたら隣に女の子』なんてシチュエーションを実体験することになったわけだ」

「そゆこと。ちゅーに胸たっち、添い寝、揉まれる、なんかスゲー感じまで……ことごとく初めてを兄ちゃんに奪われてんなー」

「うぐ……話を戻すんじゃない…」

妙な内容ではあるが調子良く続いてきた会話の流れが不意に途切れた。そう言えば今日は休日で、両親共に早い時間から出掛けると言っていたのを思い出す。月火ちゃんも寝ているのだろうか、静寂だけが広がる。しばしの間、抱き合ったまま互いの体温だけを意識する。

「――兄ちゃんの心臓の音、なんか落ち着く」

「聞こえるのか？」

「うん。こんだけ近いからな……ちゃんと聞こえる」

あの文字通り地獄だった春休み、死にながら生き続ける化物、吸血鬼と化していた時の僕からは心臓の鼓動が消えていた。誰もが傷しか受けなかった結末を経て、今の状況に落ち着いたことで再び鼓動が戻ってはいるが。火憐ちゃんはその事を知らないけど、今の言葉で、二週間ぶりにそれを感じて涙が出そうなほど嬉しかった事を思

い出した。

「そっか……ちゃんと、動いてるんだ」

「ん？当たり前じゃんか。ちゃんと、兄ちゃんはここで生きてるよ」

「――――うん」

少しだけ力を込めて火憐ちゃんの身体を抱き締める。僕よりも僅かに高い体温、沁み込むように柔らかな温もりが幸せだった。

「兄ちゃん……あの、さ…この前、あたしが熱出した時に兄ちゃんからちゅーしてきただろ？」

「ん、まぁ……そうだな」

「そんで、その後はすんげー殴っちゃったし」

「ぐ……」

何か言い返したかったが、見事にぼっこぼこにされたのは事実だし、口を開いたら余計にみじめになりそうだったので我慢。

「お詫びっつーか、対等の立場に戻すっつーか……今度は、あの…あたしからちゅーしてやんよ」

「……へ？火憐ちゃ……んむ！？」

二度目に交わす口づけは、一度目よりも長くて、その感触はずっとずっと熱くて柔らかかった。常識とか、倫理観とか、何もかも溶け

消えていくような時間。

「――――んふふ、また、ちゅーしちゃったな兄ちゃん。二度目に感じる妹の唇の感触はどうよ？」

まるで悪戯が見つかってしまった子供のようにはにかんだ笑みを浮かべ、興味津津といった様子で火憐ちゃんが問いかけてくる。

「うぐ……お前はどうなんだよ？」

「質問に質問を返すのは卑怯だぜ兄ちゃん。まぁ、恥ずかしがり屋の兄ちゃんのために、先に答えてやるけどさ。――――他のヤツのは知らないけど、きっと、一番だよ」

素直に返すのが妙に悔しくて質問を投げ返す手段を取ると……普段は絶対に浮かべないような優しい微笑みと共に、とんでもない破壊力の答えを言ってきた。

「……わっ、悪くなかった…」

「真っ赤になっちゃって、かーわいいーなー兄ちゃんは！」

「うるせぇ！！」

「あはははは！！さーて、そろそろ起きる？あっ、そう言えば月火ちゃんは朝からどっかに出掛けるって言ってたっけ。んー、兄ちゃん」

「何だよ？」

「ちゅーのお返しにさ、また……『歯磨き』してくんないかな…？」

「――――攻守交替は？」

「もち」

危うく妖しい雰囲気を纏うどころか発散しながら、まだまだ兄と妹が二人きりで過ごす阿良々木家の休日は続いていく。

第二話　艶物語　偽物語（後書き）

こうして見直してみると、本当にカッとなって書いたんだなーとよく分かりますね。

続きを書いて、長編連載にしたいような気のする文章です。

第三話　無題―バゼランサー―　Ｆａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔ（前書き）

どうにもこうにもバゼットラヴな気持ちが高まり、ホロウを再プレイした後にカッとなって書いた。

あまり後悔はしていない。

やっぱり……バゼットさんは普通に働かないで、基本ダメット時々、戦闘でめがっさスタイリッシュ。

そんな風でいてほしい。

第三話　無題―バゼランサー―　Ｆａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔ

古来より月が満ちる夜はその幽玄の美しさに隠れ『良くないモノ』が跋扈するとされる。それに倣うならば今宵はまさしく『魔』の夜にふさわしいと言える。

「――そろそろ、行きますか」

感覚の鋭い者ならば夜気に混じる禍々しい気配に怖気を感じ、『魔』と同じ領域に身を浸す者――例えば『魔術師』なら、おぞましく響く声なき声を聞くだろう。家人が寝静まり、闇に包まれた一軒の武家屋敷から人影が歩み出る。型に嵌めたようにきっちりと男物のスーツを着こなし、一目で年代物と分かる水晶のイヤリングを揺らす男装の麗人。

「今夜も随分と集まっているようですね。『――――――』」

魔力回路を起動させ、強化魔術の発動と同時に闇夜の中を疾駆する彼女の名はバゼット・フラガ・マクレミッツ。その身をもって古の宝具を現代に伝える“フラガ”の血族。

彼女――バゼットが夜な夜な街へ繰り出し、深い闇の中へと向かうのには理由がある。

この冬木市の『裏側』で密かに行われた『聖杯』を巡る魔術師と英霊の熾烈な戦争。死に瀕したある魔術師の願いを叶えるため、『聖杯』に潜んだ悪魔が起こしたあらゆる可能性を再現する四日間だけの無限回廊。

この二つが残した『歪み』に引き寄せられる魔物を殲滅し、何も知らない一般人への被害を防ぐためというのが大きな理由である。本来ならば『聖堂教会』の誇る異端殲滅の専門家や神秘を秘匿するために『魔術協会』から執行者が送られる。しかし、冬木で起こった二つの事象はあまりにも特異すぎる。下手をすれば『冬木そのもの』が消されかねないほどの事態だった。

そのためこの地の管理者たる遠坂凛、マキリを継ぐ間桐桜、教会から送られてきた司祭カレン・オルテンシアは取引を行い、双方の『キョウカイ』への詳細な報告をごまかした。結果として大きな争乱を起こさずに済んだのだが、後を絶たぬ歪みに引き寄せられる魔物の対処に追われることになる。

そこで二つ目の事件の時に核心部分を担い、魔術協会を離れフリーランスとなった凄腕の封印指定執行者――バゼットと取引を行った。その内容については後ほど触れるが、その取引の対価として彼女が行っているのが魔物どもの撃滅ということである。

「この辺りですね……さて、始めましょうか」

月明かりさえ届かぬ深い闇を孕んだビル街の路地裏。佇むバゼットを取り囲むようにいくつもの人影が現れる。

「今回は死体に取り憑きましたか……どこから調達したかは知りませんが…悪趣味な」

スーツの懐から漆黒の皮手袋を取り出して両手に嵌め、四肢に強化の効果を持つルーンを刻む。さらに人払いの結界を張り、目撃される可能性を潰す。

「今日は色々あってあまり機嫌が良くないのに……こんなモノを見せられては私も本気にならざるを得ない」

ぎちり、と拳を固めて構えを取り――――

「宣言しましょう。元のカタチが無くなるまで殴り抜くとッ！！」

アスファルトを踏み砕くような勢いで疾駆、強化魔術とルーンの重ねがけされた右拳に加速の力を存分に乗せ、最初の一体の顔面に向け文字通り閃光のようなストレートを叩き込んだ。戦車砲弾にも等しい一撃を受け、頭部そのものが爆散する。

丈夫さだけが取り柄の無骨なブーツから摩擦熱による煙を上げながら旋回、その長い足から放つ回し蹴りで数体を纏めて薙ぎ払う。

彼女からすれば固まった魔物を散らすために放った蹴りであろうが……成人した人間の身体が腕や胴体をひしゃげながら吹き飛ぶ姿から、尋常ではない威力が秘められていると分かるだろう。

「ハ――ッ！！」

数メートルの距離を僅か一歩で詰め、豪雨のような拳の乱打を叩き込み肉塊へと変える。あらゆる角度から変幻自在に放たれる蹴りが突き刺さり、容赦なくその身体を砕き潰す。

『戦闘』のためだけに鍛錬を積み上げてきた身体能力、恐ろしい練度で完成された体術から繰り出される連撃に蹂躙され、死体に取り憑いた魔物どもが次々と崩れ落ちていく。空気が張り裂けてしまいそうなほどに重く響き渡る打撃音。それが絶えることなく重なり轟音へと変わっていく。

「ふむ、左腕の調子も悪くない。では……終幕にしましょう」

流れるように身体を翻し、気配を消し背後に回っていた最後の一体の胴体へ右フックをぶち込む。主要な内臓器官を守る肋骨を砕かれ、くの字に折れ曲がったその胸部へさらに膝蹴りを叩き入れる。

「『悪魔』の左腕が一撃――受けなさい」

身体全体を『弓』に、左腕を『矢』に見立て、全身の筋肉を限界まで引き絞る。

「――――ッ！！！！」

鋭く吐かれた息とともに人間の肉体強度、膂力を遙かに上回る『左腕』だからこそ放てる『最終の一撃』が突き刺さり、空中へ浮かび上がった魔物を四散させ完膚なきまでに殺し尽くした。大気を突き破ることで巻き起こった暴風が徐々に収まっていき、闘争の空気も月光に溶け消えていく。

「――――ふぅ。あとは焼却しておしまいですね」

肉塊と呼ぶにふさわしい状態になった死体へ火のルーンを刻み、跡形も残さずに燃やして証拠を消す。

「それにしても雑魚に本気で当たってしまうなんて……２０通目の不採用通知が届いたくらいで情けない……」

つい数分前まで鬼神のような戦姿を見せていたとは思えないほどにしょんぼりと肩を落とすバゼット。

血塗れになった右と、大気との摩擦でほとんど原形を残していない左の皮手袋を外し、こちらもルーンで焼却する。言うまでもないだろうがスーツの左腕部分もボロボロになっている。

「あぁ……予備のスーツこれで最後だったのに…。そうだ…士郎くんなら…。頼んでみますか…」

「はぁ……少しだけ、海を眺めてから帰りましょう…」

来た時とは打って変わってとぼとぼと歩き出し、埠頭へ足を向けた。埠頭にたどり着くと夜闇はさらに濃さを増し、満月は未だに虚空高く輝いている。穏やかに響く潮騒に耳を傾け、ぼんやりと夜に閉ざされた水平線を眺め続ける。

「アンリ……私はまだ海を渡る勇気を持てずにいます。何処に向かえばいいのか分からない。だけど、貴方のおかげで――変わっていけそうです」

そっと左腕を撫でながら、『絶対悪』と呼ばれ黄金の日々を求め続けた名もなき青年へ想いを馳せる。

「バゼット――か？」

幾ばくかの寂寥感と共に沈んでいた回想の海から意識を引き揚げるのは男の声。

「え？あっ――ラン、サー？」

慌てた様子で振り返るバゼットの目に映るのはバツの悪そうな顔で頬を掻くランサーの顔。

「どっ、どうしてランサーが！？あっ……あああああ、しっ、失礼します！！」

「落ち着けっつーの。人の顔見ていきなり逃げんな」

狼狽と混乱のあまり全力で走りだそうとしたバゼットを苦笑しながらランサーは止める。普段着のアロハシャツではなく、白いシャツに黒のベストを合わせたシックな装い。

「ったく……夜風に当たってこうと思ったら、随分と珍しい奴に行き会っちまった」

「――！――――！！――――――」

「何か言おうと必死になられた後、急に黙り込まれても困るんだが……」

口を開閉して声にならない声を出し、真っ赤になって沈黙してしまう。僅かに溜息をつき、独り言のように男は言葉を紡ぐ。

「あの黒シスターと嬢ちゃん達がよ、人外どもの処理をお前に一任したって聞いてな」

「えっ、ええ。今の私の立場では魔術協会に戻るのは得策とは言えませんし……もう、あそこに戻るつもりはないので」

「それに……海を渡る勇気が出るまで、『彼』が愛したここでの日々を過ごしたいと今は思っているんです」

そう言いながら微笑みを浮かべる彼女にランサーは目を奪われた。
契約の呼び声に応えて現界し、初めて顔を合わせた時とは比較にならないほど彼女の在り方が強く美しくなっていたから。

「――――そうか。いいんじゃねえか？ここは面白えヤツばかりだし、坊主と嬢ちゃん達にも色々と教えてもらえばいい」

「――はっ、やっぱり俺はイイ女とは縁がない。守れず、変わるきっかけにもなれないとくりゃ、笑い話にもならねぇ傑作っぷりだ」

自分の姿を見て、まるで童女のように瞳を輝かせていた彼女の顔。僅かな間ではあったが背中を預け合って戦場を駆けた時間。彼女が変わっていく過程に関わるどころか、守ることさえ出来なかった後悔。クー・フーリンとして珍しく、本当に珍しく羨望とも嫉妬ともつかない複雑な思いに自嘲の笑みが浮かんだ。

「えっ？」

「いーや、こっちの話だから気にすんな。さて……帰って寝るわ。お前も寄り道してねーでさっさと帰れよ？」

何かを振り切るように立ち上がり、ランサーは歩き出す。

「ランサー」

その背中に向かってバゼットは穏やかに声をかける。

「なんだ？」

「例え偶然の産物だとしても、こうして私とまた話をしてくれて感

謝します。その……貴方とはもう一度話がしたかった」

その視線は夜を照らし出す月に据えられたまま。二人の立ち位置は奇しくも、『彼』と背中合わせで別れを告げた時と似ている。

「偶然なんかじゃねえさ。お前が戦ってる時はいつも居たからな」

「じゃーな。俺はここらに居ることが多い。気が向いたらまた来い」

静けさが戻り、後に残されたのは……身体中の血液が集まったんじゃないかというほど真っ赤に頬を染めたバゼットが一人。

「かっ、かかかかか帰りましょうか！！」

どだだだー、とアスファルトに足形を刻みつけながら衛宮邸へ向けて疾駆する。

余談ではあるが、このあと……アロハシャツを着た蒼髪の青年とスーツに身を包んだ男装の麗人が連れ添い、埠頭で釣りをするシュールな光景が目撃されるようになる。

さらにもう少し経つと、恥ずかしそうな顔で『女性らしい格好、仕草をしたいのですが……どうしたらいいでしょう…？』なんて言い始め、各方面を大混乱に陥れるようになったりもするのだが、それはまた別の話。

第三話　無題―バゼランサー―　Ｆａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔ（後書き）

うん……何というか、バゼットさん可愛いよねッ！！

スーツの下に隠された素敵に豊かな武器を拝める機会が無いのは残念だけど！！

ものすごく残念だけど！！

第四話　二人のそれから　とらドラ！（前書き）

アニメ版とらドラ！を見て、あぁぁぁぁぁ！！って気分になり、原作を買って読んでさらに悶絶し、感動と甘酸っぱさと切なさと現状の閉塞感が混ざり合って混沌となった結果に書かれた文章。

願わくば、彼と彼女の進む道が幸せに満ちたものでありますよう…。

第四話　二人のそれから　とらドラ！

「――――ん？むっ……」

薄いカーテン越しの柔らかな陽光が優しく部屋を染め、僅かに虚空を漂う塵が光を受け、光の粒となって舞い踊る。

整理が行き届いた部屋に置かれたベッドには大小のふくらみが一つずつ。

「朝……みたいだな……。うー、さむっ……」

拭いきれない眠気に細められ、本人の意思とは関係なく凶眼と化している青年。

「んー……りゅうじ？さむい……こっちぃ……」

「ぬぁっ！？」

ごそごそと起き出そうとした青年の背中にしがみつき、その華奢な細さとは見合わぬ力で布団の中に連れ戻す少女。

「おっ、おい大河！！」

「むー……可愛い恋人を冷たいベッドに残そうとした罰よ。大人しく……その……ちっちちち、ちゅーされなさい」

バランスを崩し、少女に覆い被さるような形で青年はベッドに手をつく。

吐息の温もりが失われずに感じられる距離で見つめ合い、揃って頬を赤く染める。

「……たぶん唇ささくれになってるぞ？」

先に言葉を紡いだのは青年。

「うん」

僅かに目を伏せ、消え入るような声で短く少女は答える。

「鼻息も荒くなってるだろうし」

「うん」

「その……あまり褒められたもんじゃない目になってる」

「全部、その通り」

「悪かったな……」

悪戯っぽく少女は笑い、青年はそれに苦笑を返す。

「でもね……全部大好き。おはよ、竜児」

『可憐』の言葉に相応しい笑みと共に、二人の間に残された距離はゼロになる。

「「――んっ」」

静かに唇が重ねられ、漏れた息が部屋に響く。

「――はっ、あ……」

唇が離れ、息を整えながらも少女の瞳は閉じられたまま。

「ん？どうした？」

青年の問いかけにも答えず、少女はふるふると首を振る。

「……『もう一度』か？」

逡巡した後に放たれた言葉に小さな体躯がひくり、と震える。

「……だめなら、いいわよ」

「いや、構わない……というか、これで俺が『ダメだ』なんて言えると思うか？」

「じゃあ早くしなさいよ……唇冷えちゃったじゃない。竜児ので……あっためて」

決して広いとは言えない安アパートの一室。

慎ましくも幸福な生活を共にする男女の名はそれぞれ『高須竜児』と『逢坂大河』

これは……高校卒業から数年後、のんびりバカップルを続ける彼らの日常を綴った物語。

［ＳＩＤＥ大河］

「じゃあ、いってくる。戸締まりと火の元だけは気を付けろよ。あっ！！それと昼飯は冷蔵庫だからな」

「もう……そのくらい私だって分かってるわよ。ほら、講義に遅れちゃうよ？」

「やばっ！？行ってきます！！」

バタバタと走っていく竜児の足音を聞きながら、住み慣れた部屋を眺めると……私は未だに不思議な気分になる。

誰にも頼らず、一人で生きていくって思ってた私が……こんな風に竜児と暮らして、家族を作ろうねって話して。

あまりにも幸せすぎて実感湧かないのよね……。

たくさんの……本当にたくさんの出来事があって、竜児と恋人になった高校。

あれから家族と仲直りして『一緒に暮らさないか』って言われたけど、竜児と暮らすんだーって宣言したんだっけ。

あの時のみんなの顔ったらキョトンとしちゃって……。

ふふっ、思い出したら笑えてきちゃった。

他にも色んな事があったけど……『楽しかった』って思える。
一人のままだったら……こんな風に思えなかっただろうな……。
竜児と一緒だから……大好きな竜児が居てくれるから……私の世界はこんなにも鮮やかに輝いてる。
いざ言葉にして伝えようとすると上手くいかないし……可愛くない態度になっちゃうけど……
「本当は……心の底から愛してるんだからね」
さて、愛しい『未来の旦那様』が帰ってくるまでにお仕事済ませちゃいましょうか！！

［ＳＩＤＥ竜児］

拗ねてぷくーっと膨らんだ顔の大河がドアの向こうに消え、迫る時間に慌てて走り出す。
「はっ、はっ、はぁっ！！」
朝はあんなに甘えてたのに……少し細かく言い過ぎたか……まぁ、その、どんな大河でも魅力的なんだが。
むぅ……帰りにシュークリームの材料買って、作ってやるか。
高校を卒業し、俺は大河や泰子の薦めもあり、大学に通いながらバイトの日々。

大河は意外にも絵や物語作りの才能があったらしく、幼い子供向けの絵本や小説を書いている。

これが結構な人気で、さり気に有名人だったりする。

「はぁ――っと！！」

大学へ続く道の途中にある宝石店の前で立ち止まる。

ディスプレイに飾られた一組のリング。

毎朝これを見て、あいつの指に嵌める未来を描くのが日課になっている。

まぁ……気恥ずかしいし、絶対に笑われるだろうから大河には秘密なのだが。

「さて、今日もひとつ頑張ってみるか！！」

［ＳＩＤＥ大河］

竜児が作っておいてくれた昼食を食べ、締め切りの近い本も完成させ、中途半端に暇を持て余した午後。

「あーもーヒマだわ。竜児のヤツにメールしまくってやろうかしら？」

大体こういう時には『講義が早く終わってー』とか『大河が恋しく

てー』とか言いながら帰ってきなさいよ……。

「そっ、そしたら……ちょっとは喜んであげるのに……」

何かどうしようもない気分になって、洗濯物が入ったカゴから竜児のパジャマとか持ってきちゃったし……。

「べっ、別に寂しくなんかない……けど、ちょっとだけ……」

パジャマを丸めて顔を埋めると、慣れ親しんだ……ドキドキするけど、ホッとする竜児のにおい。

「ふあっ……あぅ……」

アイツの帰ってくる時間はまだ先。

少しだけ寝ちゃおうかな……。

［ＳＩＤＥ竜児］

講義はいつも通りの時間に終わったが、今日はバイトが休みなので大河に話した時間より早く帰れる。

「シュークリームの材料も買ったし、驚くだろうな」

茜色に染まった商店街を歩き、行き交う人達を見ていると不思議なほど幸福な気分になる。

みな帰る場所があり、そこでは『お帰りなさい』と言ってくれる大

切な人がいる。

『ただいま』と声をかけたい大切な人が。

それが……ただ、それだけの事が無性に嬉しい。

あまりにも幸せすぎて……少しだけ夕焼けが滲んで見えた。

「ただいまー。びっくりしたか？実は今日バイトやす……み？」

『なんで帰ってきてるの！？』なんて反応を期待してたのに、部屋は静まり返っている。

「ん？出掛けては……いないな」

玄関に揃えられたままの小さな靴から外出は無いと推理。

「ということは……」

音を立てないようにベッドが置いてある部屋へ向かうと、そこには小さく丸まって眠る大河。

「わざわざ俺のパジャマまで着て、寝るとは……」

ぶかぶかのパジャマを纏い、竜があしらわれた俺の枕を抱えて眠るその表情は本当に幸せそうで。

「あーあ、よだれまで垂らして……ただいま、大河」

起こさないようにそっと口元を拭い、髪を撫でてから部屋を抜け出

す。

さて……腹ペコで起きてくるだろう恋人のために、いっちょ気合い入れて晩飯を作ってこよう。

［ＳＩＤＥ大河］

「――ん、む……りゅーじとごはん……のにおい？」

部屋に広がる香りと温かな気配に誘われ、ごそごそとベッドから抜け出す。

パジャマの裾を引きずりながら台所に向かうと……

「よう、目が覚めたか？今、完成するから少し待っててくれ」

なんて嬉しそうに笑う竜児の姿がそこにあった。

「わかった……って今日も遅くなるって言ってたじゃない！！なんで居るの！？」

「『何で』とはひどいな……今日はバイトが休みでさ。お前を驚かせようと思って黙ってたんだよ」

困ったように笑う竜児の顔。

すっかり見慣れたはずなのに……こうして向き合うと未だに顔が熱くなって、頭がぼうっとする。

「ん？どうし――おふっ！？」

『びっくりした』とか『寂しかった』とか『嬉しい』とか……言いたいことが巡りに巡って、どうにもならなくなったから思い切り抱き付いた。

そんな私をそっと抱き寄せて、竜児は柔らかく髪を撫でてくれる。

「ただいま、大河」

その感触と温もり、穏やかな声に安心してふにゃりと力が抜けてしまった。

「りゅうじ……」

「ん？」

「おなかすいた」

「――おう！！今日は時間もあったし、ちょっと豪華だぞ？食後のデザートも期待していい」

『大好き』も『キスしてほしい』も恥ずかしくて言えなかったから……ご飯の催促でごまかす。

「デザートの出来が良かったら……あとで言ってあげなくも……ない、かも……」

「何か言ったか？」

「別に何も言ってないわよ！！ほら、手伝うからさっさと用意する！！」

思わず口に出てしまった内心が聞かれなかった事に安心しつつ、竜児の隣に立つ。

一人で生きようと、誰にも頼らず生きようとしていた私が見つけた温かい居場所。

この先もずっと立ち続けたい、ただ一つの場所。

第四話　二人のそれから　とらドラ！（後書き）

んー、これも中編くらいに書き直したい文章っすね。

リメイクばかりやりたくなって、新規の文章が全く書けないでいる虎です。

第五話　約束された剣たちの再会　Ｆａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔ（前書き）

某動画サイトにてレアルタ・ヌアのラストエピソードを見て、感動と感涙とどうしようもない衝動の果てに書いた文章。

やっぱり、セイバーは士郎くんと幸せになって欲しい虎の思い全開です。

第五話　約束された剣たちの再会　Ｆａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔ

剣を取り、ヒトとしての全てを捨て、人々の為に戦い続けた少女がいた。

幾度となく勝利を重ね、「正しき王」として在り続けた先に彼女は騎士王と称される。

しかし、一人の人間である事を捨てた「正しき王」に従者と国民は反旗を翻す。

その結果、彼女は自らの国に攻め入り、かつての従者を斬り捨て、立ちはだかった息子を殺める。

誰よりも国を愛し、従者を敬い、民を思った少女の想いは……報われる事なく失意と後悔に塗れて地に堕ちた。

そして少女は己が選択の果てに紡がれた歴史を零に戻すべく、聖杯を求め久遠の時を彷徨う。

業火の中で何もかも失い、伽藍洞になった身の内に愚かしくも尊い理想を宿した少年がいた。

自ら重い咎を背負い、己が身の全てを犠牲に人々を救おうと足掻き続ける歪んだヒトガタ。

心に無限の剣を内包し、その身を以て錬鉄する英雄たり得る資質を持った少年。

彼と彼女は誰よりも似ていた。

その生き様も、在り方も、何もかもが通じ合っていた。

だからこそ、永遠にも似た時間と空間を越えてその運命を交錯させる。

月光に濡れる夜、剣を模した刻印に導かれて。

激烈な闘争を戦い抜き、ぶつかり合った果てに心と身体を重ねた少年と少女は、黄金色に染まる丘で別離する。

互いの事を理解していたが故に、その別れは誰にも止められない。

少女はただ一言「愛している」と言い残し、草原を吹き渡る風のように少年の前から消えていった。

一人残された少年は歩き続ける。

愛した少女との誓いを胸に、ただ真っ直ぐ。

流れ落ちる涙に気付かず、塞がらぬ傷を抱えた心を鋼で覆い、少年は歩き続ける。

紅い黎明に染まった空と無数の剣が突き刺さった荒野を越え、その先に広がるのは果てなく続く美しい草原。

その丘に佇むのは蒼色のドレスを身に纏い、黄金色の髪を風に揺ら

す少女。

その瞳は遥か遠い場所に向けていて、まるで誰かを待っているように――――

「――また、あの夢か…。だが、今回は随分と……懐かしい時代も出てきた……」

深い森の奥にあった死徒の館を強襲し、殺し尽くしたのが半刻前。

どうやら急激な魔力消費、重傷と疲労で少し気を失っていたらしい。

「ぐっ、う……投影、開始」

体内に埋め込んである投影宝具『全て遠き理想郷』に流す魔力量を増やす。

彼女とパスを通していたお陰か、本来の十分の一程度にすぎないが加護を得られる。

少しずつ塞がっていく傷口と共に、ふと空を見上げる。

「げほっ…そう、いえば…こうして星を眺めるのはいつぶりだろうな……」

まだ衛宮の家に居た時、彼女の面影が消えていない場所に居た時は、よく星空を眺めていたように思う。

有史以来、様々な出来事を見つめてきた星の輝きに彼女の姿を求めていたんだ。

「もう会えないのに……こんなにも鮮やかに焼き付いてるんだな……セイバー」

あれから幾度となく夢を見てきた。

剣の荒野を越えて辿り着いた草原に佇む少女の夢。

なぜか自分が呼ばれているような、衛宮士郎が行かねばならない感覚が常にあった。

そして、今までの中で最も鮮明な夢を見た。

『時が来た』そう心の何処かが訴えている。

「さて――――先程から覗き見してくれているようだが、何処の誰かな？」

微細な気配に向け、問い掛けながら戦闘態勢を整える。

未だに負傷は完治しておらず、残存魔力も乏しい。

「ふむ、誰かとな？そうさなぁ……物好きな年寄り魔術師とでも言っておこうか。おっと性悪を加えるのを忘れておった」

愉快そうに笑いながら現れたのは灰色のローブを纏い、古めかしい杖を持った老人。

「それは興味深い。ゆっくり語らい所ではあるが……怪しげな人物、まして魔術師と名乗るような輩に対して年配の礼を尽くすつもりは

無い」

最も消費の少ない黒白の双剣を生み出し、残りの魔力から強化を発動する。

「やれやれ……やはり冗談が通じん奴じゃったか。落ち着け衛宮士郎。儂はお主と敵対するつもりはない」

「何者だ？なぜ私の名を知っている？」

「儂はお主が良く知っている者の知り合いじゃよ。ふむ、マーリンと名乗れば分かるか？」

その名を聞いた瞬間に頭が白くなる。

「まさか……アーサー王の下で手腕を振るった古の魔術師だと！？」

「いかにも。今日はお主に話がある。アルトリア……お主にはセイバーと言った方が馴染み深いか？あやつの事についてだ」

「時間も無い。端的に伝えさせてもらうが……アーサー王の墓所へ行け。お主が真に望んだのなら、必ずや辿り着けるだろう」

「まったく……儂がこんな真面目くさった導き手の真似事をする日が来るとはな。どうにも寒気がする。さて、儂はもう行く。質問は受け付けんからな」

「おっ、おい！待てっ！！」

溜め息を吐きながら老魔術師は暗がりへ溶けるように消えていった。

「はぁっ……何が年寄りの魔術師だ……。千年単位で生き続け、空間転移すらこなす魔法使いじゃないか」

あまりに唐突な出来事が起こり過ぎて混乱状態となり、どさりと座り込む。

「だけど、そうか……。やっと分かった――あいつが、セイバーが待ってるんだ……」

予感は確信へと変わり、疲弊しきった身体と心に再び熱を注ぐ。

行こう、もう一度、あいつの手を掴みに。

どこか覚えがある空気が漂う墓所へと辿り着く。

「――――あの夢で感じた空気と同じなのか……セイバー？そこに、居るのか？」

導かれるように内部へと足を踏み入れる。

どれだけ歩いてきたのか……黒一色で染まっていた視界が突然白く染まり、反射的に閉じた瞳を開くと、何度となく夢に見てきた美しい草原に立ち尽くしていた。

澄み渡る蒼穹はどこまでも広がり、潮騒にも似た響きを奏でる草原は果てなく続く。

あの時、あの黄金に染まった丘で永遠に失ったはずの温もりを感じ

る。

ここに……セイバーがいる。

一歩ずつ確かめるように進み、その度に硬く固まっていた何かが融けていく。

吹き抜けていく風が深紅の外套を、白銀の髪を、赤銅色の肌を撫でる。

ただ一人、止まる事なく戦い続けた俺を癒すように。

視界がぼやけていく。

乾ききって久しい瞳と頬を温かい雫が濡らす。

夢の通りに小高い丘の上で佇む人影が見える。

風に混じる薫りは、苦しくなるほどに鼓動を高鳴らせた。

色褪せ、摩耗した記憶が次々と鮮やかさを取り戻していく。

凛と響く声、金色に輝く髪、滑らかな肌、交わした温もり、紡いだ言葉。

『彼女』が消える刹那、陽光に眩んだ目が映した……悲しくなるほどに柔らかい微笑みと幾筋も流れ落ちていた涙。

「思い、出した……全部、思い出した……！！」

心が叫ぶ。

『彼女』の下へ行けと。

『彼女』をこの手に抱けと。

一度失った半身を取り戻し、二度と離すなと叫んでいる。

「セイバー……セイバー！！はっ、はぁ、アルト……アルトリア！！！！」

衝動に突き動かされるまま『彼女』の名を叫び、もつれる両脚で必死に駆ける。

息切れと嗚咽に曇った声で何度も、何度も『彼女』の名を叫び走り続けた。

そこはまさしく『無』そのものだった。

視界を埋め尽くすのは極限の暗黒。

何一つ存在を許されない『場所』に私は在った。

唐突に私以外の存在が現れ、遠い昔の思い出に刻まれる声で問いかける。

「問おう――久遠の時を漂い、永遠を待つことになろうと、お前は生きたいと願うか？」

「何もかもが変わり果て、真のお前を知る者が誰一人存在しなくなった世界で生きていきたいと望めるか？」

「己を突き動かしてきた後悔も望みも捨て去り、お前のために散っていった者たちを捨て置いて再び生を謳歌したいと願えるか？」

「さぁ、答えよ――『騎士王』アルトリア・ペンドラゴン」

その声はかつて、私に何かと世話を焼いた放蕩魔術師の老人の声だった。

厳しく険しい表情と眼差しを正面から受け止め、私は脳裏に、心に深く刻まれた過去に思いを巡らせる。

『騎士王アーサー』として生きた時代、民も騎士も国も、全て失った深い後悔。

重い罪を償い、過去を抹消するために選択した聖杯を得るための戦い。

生きた時代とその在り方は違えど、確かに『王』として君臨した者たちとの邂逅。

深すぎる傷と痛み、絶望だけが残った『戦争』の結末。

再び訪れた永い時の果て、私の生きた時代が伝説となった世界で出逢った一人の少年。

ヒトの身で願うにはあまりにも遠く尊い理想を求め続ける少年。

『彼』は私が抱いた愚かな願いを間違いだと断じ、幾重にも絡みつきこの心と身体を縛り付けていた鎖を斬り裂いた。

激烈な戦いの中でその在り方に惹かれ、『ただ一人の少女アルトリア』として愛した男性。

そして――誰よりも互いを理解していたからこそ、黄金色の朝焼けに染まった丘で永遠に別離した想い人。

「――――――そうか、私は――こんなにも――」

『彼』を強く求めている。

罪を背負い、後悔に囚われ、それでも――『彼』を求めている。

「私は……浅ましくも生きたいと願っている。私が王になったが故に滅びていった全てを元に戻す願いを捨ててでも生きたいと！！」

「私を笑うか魔術師？それとも、さらなる罪を重ねるのかと断罪するか？」

「そうしたければ好きにしろ。だが、私はもう一度逢いたい……私の生き様は間違いではなかったと、どれほど苦痛を感じる結末に至ったとしても――その道を選んだ事を間違いだと思ってはいけないと教えてくれた『彼』に逢いたいのだ！！」

「あの腕に抱かれ、吐息を感じ、温もりに包まれ『アルトリア』として生きたい！シロウに……衛宮士郎と共に、もう一度生きていきたい！！」

紡ぐだけの言葉は叫びへと変わり、いつしか涙を流していた。

「愛している……今でもずっと、ずっとシロウを愛しているのだ……」

膝から力が抜け、跪くように崩れ落ちる。

「くっ……ははっ、ははははは！！！！やっと素直になりおったかバカ娘め。最初からそう言えば良かった。お前は我慢などせず、もっとヒトらしく求めるモノを声高らかに叫べば良かった」

「バカ者……誰よりも優しく、誰よりも他人を思いやったが故に辛い道を選びおって」

愉快そうな笑い声が止み、優しい言葉と共にそっと頭を撫でられる。

老いた魔術師の顔に厳しさはなく、穏やかな笑みと温かな光を宿した瞳を私に向けていた。

「シロウ……と言ったか。お前の想い人がかつてと同じ姿であるとは限らんぞ。どれほどの時がかかるかも分からん。お前の待つ場所まで至れず、永遠に待ち続けることになるかもしれん。それでも……構わんのだな？」

「はい。迷う必要も、恐れる必要もない。私には分かる……きっと、士郎とまた逢える」

涙を拭い、自分の足で立ち上がる。

彼と再会する予感が強く身体に満ちていた。
幾度も私の命を救ってきた直感が教えてくれている……それに、何よりもシロウを信じているから。
「くっくっく……彼の騎士王からこれほどの惚気を聞かせられる時が来るとは。長生きしてみるものだな」
にやにやと楽しそうに笑う老魔術師に気付き、顔に血が集まる。
咄嗟に言い返すことができず、その笑顔を睨みつけてみた。
「そう怖い目で睨むな。老い先短い性悪魔術師から、可愛いバカ娘に最後の贈り物じゃ」
「ではな――健やかに、幸福に生きよアルトリア――」
「――――！――――――！！」
白く染まっていく視界と意識の中で何とか言葉にできた礼は彼に伝わっただろうか。
ただ、本当に満足そうな顔で笑っていたような気がする。
気が付くと草原の真ん中で横たわっていた。
身体を起こすと……どこか懐かしく、心を洗い流してくれるような美しい青空と草原が目前に広がる。

熱い鼓動を刻む心臓が温かく満たされ、風に溶ける気配は『彼』のもの。

「来て――くれたんですね――」

周囲を見回すと、紅い長衣を纏った人影がこちらへと近付いてくる。

その姿は聖杯戦争で邂逅した弓兵そのもの。

しかし、その姿を見た瞬間心が震え、ざわめく。

あれは――

「シロウ……なのですね？」

赤い夕焼けのような髪は白銀へ変わり、肌の色も変わってしまった。

身長も大きく伸び、全身は『戦闘』に最適な筋肉で覆われ屈強そのもの。

あの姿は……己の理想を貫き、追い続けた果てに至った『衛宮士郎』の究極の到達点。

どれほどの悲嘆を心に刻み、どれほどの絶望に身を浸してきたのか。

されど――どれだけ変わろうとも、その本質は私の愛したあの時の少年のままなのだと悟った。

「あ、あぁ……また……また、逢えた――シ、ロウ……シロウ！

！」

堪え切れなかった。

流れ出す涙は止め処なく、親を求めて泣きじゃくる赤子のように彼の名を叫ぶ。

滲んだ視界の中でも彼が泣いているのが分かる。

きっと涙を流す間もなく、ひたすらに走り続けてきたのだろう。

泣き崩れたくなる心を押し殺し、ただ鋼のように、一振りの剣のように戦い続けてきたのだろう。

もう迷うことはなかった。

走り寄る彼に向って、歩みを向ける。

定められた事象のように、ただ真っ直ぐ彼の胸へと飛び込んだ。

彼女が俺の名を叫ぶ。

俺も精一杯の声で彼女の名を叫ぶ。

聖杯戦争の中で与えられたクラス名でもなく、『騎士王』として伝説に刻まれた名でもない。

一人の少女として彼女に与えられた唯一の名前。

「アルトリア――！！」

もどかしいほどに進まない両脚の代わりに手を伸ばす。

走り寄ってくる彼女に触れる瞬間――これは永い夢で、触れた途端に消えてしまうのではないかと、あの時のように風に溶けて消えてしまうのではないかと恐怖を抱いた。

だが――

「ずっと……ずっと、待ってたんです……。逢いたかった……シロウ……！！」

腕の中で泣きじゃくる少女の温かい涙と温もりが、そのちっぽけな恐怖を跡形もなく溶かしていった。

「俺も……ずっと、逢いたかった――！！」

――約束された運命は再び結び合わされ、ひとつの物語が幕を閉じる――

第五話　約束された剣たちの再会　Ｆａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔ（後書き）

これもまたリメイクしたい文章ですな。

今なら、もっと良い物に生まれ変わらせてやれるような気がするんだ。

いっそ文章量を大幅に増やして連載にしてしまおうか…。

第六話　英雄交錯　Ｆａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔ（前書き）

アーチャーを超え、正義の味方として歪むことなく強くなった士郎と、後悔と絶望に染まったアーチャーが再び邂逅したら？

というネタで戦闘シーンを書きたくなった虎が、何も考えず衝動に駆られるまま書いた文章。

これも割と古めな蔵出し品。

第六話　英雄交錯　Ｆａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔ

その女が禁忌の延命魔術に手を出したのは、最愛の伴侶を不治の病から救う為。己の命を削り、無辜の人々を殺戮し、より深く闇に堕ちながら研究を重ねる。屍山血河の上に嘆きと絶望を積み重ね、彼女は災厄を撒き散らす『魔物』に成り果てた。

そして……『彼女』の影響下に堕ちた山間の町は『死都』と化す。

秩序の天秤が崩壊し、滅びをもたらす矛盾が生じる。その是正をすべく世界が動き始めた。

爛熟した腐敗寸前の魔力が淀み、荒れ狂う。

異形と化した姿で『彼女』は慟哭を上げる。

「あの人を救いたかった……！もう一度笑って欲しかった……！ただ、それだけを望んでいたのに……この願いすら……世界は認めないというのかッ！！！！」

血涙を流し、魂を軋ませながら紡がれる叫び。

「――それが、どうした」

唐突に響き、その叫びを斬り捨てるのは鋼鉄の声。

「……ッ、抑止の……守護者……ッ！！」

魔力を帯びた深紅の聖骸布を纏い、白銀の髪を揺らす男の姿。輝き

を放つ業物の双剣を持ち、規格外の力を放つ『ソレ』を人は『抑止の守護者』と呼ぶ。矛盾の原因を完全抹殺する事によって、霊長の滅びを防ぐ掃除屋。

「貴様の望み、嘆きなど……どうでもいい。貴様を、欠片も残さず殺し尽くす……その為、私が此処に呼ばれた。ただ、それだけの話だ……」

極限まで煮詰まった憎悪の視線を、壊れ切った残骸の瞳で受け流し……『彼』は剣を振り上げる。

「あ――あ、あああぁぁぁぁぁぁあああああ！！！！！！！」

絶叫と共に襲いかかる『彼女』の首を二条の剣閃が斬り飛ばした。一瞬の後……双剣が消え、黒弓と極大の神秘を持った螺旋剣が『ヤツ』の手に現れる。

吹き飛ぶその身体に向け放たれる螺旋剣。

直撃を受け、四散する『彼女』の肢体。剣を放った黒弓を構えたまま、言霊を紡ぐ。

「――“我が骨子は捻れ狂う”――」

びし、と罅を生み出し炸裂、巨大な爆発を生み出す螺旋剣。その中に飲み込まれ、『彼』の言葉通り、願いの果てに『魔物』へと堕ちた女は完全に消滅した。

静寂が戻りつつある中、小さく言葉を放つ。

「『貴様がなぜ此処に居るか』など問わん。世界の補助、束縛の不在……願ってもない幸運だ。衛宮士郎……雑作も無く殺してやる」

そう呟いて『ヤツ』は振り向き、佇む俺の姿を視界に収めた。漆黒の憎悪を滾らせ、静かに立つその姿は今の俺と限りなく似通っている。

深紅の聖骸布で織られた長衣を纏い、灼けた褐色の肌と白銀の短髪。違いといえば……俺には僅かに赤髪が混じり、首に大粒のルビーをあしらったペンダントを着けている事くらいだろう。

かつて……己が進んだ道が間違いではなかったと、理想を取り戻し消えていった男。それが、再び堕ちた姿を晒している。

「十年ぶりだなアーチャー。やはり……お前は『あの時』のお前じゃなかった。遠坂の言った通りだ……この大馬鹿野郎」

怒りを滲ませながら言い放つ。

「貴様……何を、言っている」

訝しげに表情を曇らせる『ヤツ』……抑止の守護者『アーチャー』その真名はエミヤシロウ。

『正義の味方』を追い求めて戦い続け、現代の英雄にまで登り詰めた男の名である。

「忘れたっていうなら何度だって思い出させてやる……さぁ、構えろアーチャー。俺たちの戦いに言葉は必要ない、勝負は剣製でつけ

る。そうだろう？」

「……」

無言で弓兵は凍りつくような殺気を放つ。

「「――投影、開始」」

重なる声、虚空より具現化する黒白の双剣、その構えまでも相似。

選んだ道が違う平行存在。本来……あり得る筈がなかった邂逅、激突が再び幕を開ける。

地面を踏み砕きながら急加速。一瞬で最高速度に到達し激突、二対の刃が閃き幾つもの火花を散らせる。

右の袈裟斬りを左斬り上げが受け止め、左の刺突を右刺突が迎撃する。鏡面の輪舞が繰り広げられていく。同一存在ゆえ、理論上この戦いは永遠に続くはずだった。

「――ちっ」

表情を歪めるのは弓兵。その身は名の知れた高位の英霊ではないが、それでも人外の力を持つ脅威に違いはない。ならば……人の身で対等に渡り合う眼前の男は何者だというのか。

「おおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」

その斬撃はさらに速く、より重く。

「貴ッ……様……！！」

振り返りざまの遠心力を加えた右薙ぎ払いを受け止めた瞬間、アーチャーの剣に亀裂が走る。続けて打ち込む左の一撃でその刀身が砕け散った。

「ふっ！！」

その衝撃を利用して間合いから離脱するアーチャー。黒弓を生み出し銀閃を六連射。

二本を回避し、四本を打ち落とす。俺の動きを縫い止めるようにヤツは矢雨を射続ける。

「――工程完了――全投影待機――」

僅かな唇の動きで奴の一手を推測。がきん、と撃鉄を上げ二十七の魔術回路を総動員させ、ひとつ目の切り札を発動させる。

『自己投影　剣装強化』

通常の強化魔術に加え……己の身体に『剣』のイメージを投影、それを強化する事でさらに限界を超えた能力を付与する。ヒトの身で、超越存在を屠るべく編み出したオリジナルスペル。

――同調開始――強化成功――――自己投影――剣装開始――成功

「剣装強化――第二解放」

魔術回路を総動員し、潤沢な魔力を疾走させ弓兵が必殺の一手を打

つ。

「停止解凍――全投影連続層写」

魔力により生み出された投影宝具の群れが現れ、一斉に襲いかかる。全て高ランクに属する宝具。本来ならば同じ宝具で相殺する以外、無力化する方法はない。しかし……ただの矢とは比較にならない威力、神秘を解放する宝具を斬り砕く。

「なんだと！？」

軋む骨、裂ける筋肉、悲鳴を上げる身体を無視して疾走する。縦横無尽に剣閃が奔らせ、宝具の群れを突破していく。

「エミヤァァァアアア！！！！」

驚愕の隙を衝いてその眼前まで跳躍。渾身の力を込め剣撃を叩き込んだ咄嗟に投影、護りに回した剣ごと弓兵の胸部を斬り裂く。

「ぐっ、があっ！！」

血飛沫と共に吹き飛ぶが、一瞬で体勢を立て直すアーチャー。十字に刻まれた傷も、瞬時に塞がっていく。

「惜し……かったな……衛宮、士郎」

苦しげに行っていた呼吸も落ち着き、弓兵は狂笑を浮かべる。

「私の剣製を超え、ヒトの身で英霊と張り合うか……まさか、そこまで到達するとはな。だが……貴様の足掻き、その存在は……無価

値で愚昧だ」

額を伝う血筋を拭い、指先を流れ落ちる血ごと拳を固め、身体を苛む反動の痛みを無視する。

「ふん……無価値？愚昧？『それが、どうした』俺は生きている限り、足掻き続ける！！さぁ、アーチャー……宝具を出せ。苦痛から逃れる為に、歪んだ鉄で覆ったお前の心……俺が斬り裂く……！！」

世界の補助による無尽蔵の魔力供給を受け、無制限に力を振るうのが抑止の守護者。このまま戦い続ければ、いずれ俺が倒れるのは明白。あの大馬鹿野郎の目を覚まさせる事も出来ず、俺は死ぬ事になる。

ならば……ヤツの最大戦力、『心』そのものを具現化する宝具を破るのみ。

「良かろう……愚か者への手向けだ」

あらゆる感情を限界まで煮詰めた果て、アーチャーの表情が完全に消える。聞く者に怖気を与える声音で朗々と詠唱が流れていく。

「――体は剣で出来ている――」

そう……俺たちの理想は、脆弱な生身の身体じゃ叶える事が出来なかった。

「――血潮は鉄で――心は硝子――」

歩む道が険しすぎて、ヒトである事を捨てないと歩けなかった。

「――幾たびの戦場を越えて不敗――」
全てを救い、護る為には敗けてはいけなかった。
「――ただ一度の敗走はなく――」
勝利はできずとも、引き下がる事は許されなかった。
「――ただ一度の理解もされない――」
一人でも多く救えれば、理解されなくても構わなかった。
「――彼の者は常に独り――剣の丘で勝利に酔う――」
憎まれ、恐れられながら、一人きりで戦い抜き、救い続ける
「――故に、生涯に意味はなく――」
戦って、戦って……その生涯を全て費やして戦い続けた。
「――その体は、きっと剣で出来ていた――」
炎線が境界を創り、周囲を赤く、紅く染めていく。軋みながら回る歯車。残骸のように、大地に連なる無数の剣。
「どうした？最期の足掻きくらい許してやる。さっさと用意しろ」
その果てに、傷を負い過ぎて摩耗しきった。
「でもな、アーチャー。いつだって……俺たちの側には、何があっ

ても付き添ってくれる人達が居た。俺たちが戦う事で救われ、笑顔を取り戻した人達が確かに居たんだ。今、思い出させてやる」

飲み込み、魔力供給に回していた宝石の残量を測定する。魔力量は充分。

――投影、装填――

担い手の経験に共感し、技術を模倣する。しかし……それだけでは足りない。必要なのは『担い手の模倣』ではなく、『担い手に成る』こと。それは、通常であれば不可能な事だろう。

だが、『衛宮士郎』が宿す異能は、それを実現可能な域へ存在させる。

――装填、昇華――

「ぐっ……っぎ……」

破壊的な量の情報が脳内に氾濫し、身に過ぎた魔術行使に神経と回路が絶叫する。

「剣……装、強化……最大、解放」

身体を致命的に傷付けず、強化できるのは第二解放まで。ヤツを凌駕する為の切り札を使うには、最大解放が必要となる。『英霊』である事により、能力の底上げがなされているが……本来、俺とヤツは同格。『英霊』と『ヒト』の差を瞬間でも埋め、凌駕すれば勝負が付く。

――必要条件、確保――技術経験、完全再現――

「待たせたな、アーチャー」

無手のまま、正眼の構えを取る。

「自己投影――幻想憑依」

極限まで練り上げられた魔力が火花を上げ、ただ一人の人間が……星が鍛え上げ、創造した究極の神造兵器を生み出す。

「“約束された勝利の剣”か。だが……貴様に使いこなせる筈なかろう！！……死ね」

「お前が無限の剣を伴い、歪み切った心をぶつけるなら……俺は無限を賭け究極を創り、幻想を具現し、この身に纏う。いくぞ……！！」

弓兵の一言と共に、数え切れない剣群が殺到する。

「はあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

豪風の如く疾走し、凄烈な剣閃で群れを蹴散らす。途切れず撃ち込まれる、あらゆる剣もこの身を止める事は叶わない。

「その動き……剣筋……なぜ、セイバー……」

振るわれる剣閃、舞い散る輝き。

幾重にも放たれた囲みを突破して……俺は、ヤツに斬りかかる。

「ぐっ！？」

受け止めに入った魔剣を、一閃で斬り払う。剣を持ち替える度に、一撃でそれらを砕いていく。次も、次も、その次も。この世界に存在する『剣』は、それぞれがエミヤシロウの心の欠片。

「思い出せッ！！お前が歩んだ道は、お前が求めた理想は、間違いじゃなかったんだ――！！」

「止めろ……止めろ……止めろッ……やめろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！！」

絶叫と共に数百、数千に届く剣が浮かび上がる。

「真名、解放――！！“約束された勝利の剣”――――――！！！！！」

黄金色の極光が、深紅を染め尽くし……弓兵の心象世界を消し飛ばした。光と粉塵の向こう側に呆然と立ち尽くすアーチャーに向け駆け出す。

極限の行使によって、一歩ごとに身体が傷付く。

ヤツを間合いに捉えるまで、残り四歩。

至る所で筋肉が破断し、血が流れ出す。

三歩。

神経と回路が焼け付き、激痛を生み出す。

二歩。

涙を流す、エミヤシロウの顔が迫る。

一歩。

「これが、セイバー！！！！」

黄金の剣が弓兵の身体を貫く。

「これが、遠坂！！！！」

腰の鞘から抜き出したアゾット剣を解放、心臓に突き刺す。

「ごッ……ふッ」

吹き飛ぶアーチャーの身体を掴み戻し……。

「俺の……分だッ！！！！」

その左頬を思い切り殴り飛ばした。

静寂が戻り……狂ったように荒い、自分の呼吸音だけが響く。砂の流れる様な音を立て、騎士王が愛用した剣が消えていく。倒れ伏すアーチャーに近付く。

「ごほっ……くっ、はは……随分な、仕打ちを……してくれる」

「あいつらに、言わせれば……俺達には、この位が丁度良いらしいからな」

憑き物が落ちた様に笑いながら、ヤツは話す。

「あぁ、その……通りだ。お陰で……思い、出したよ」

ざらり、と末端からアーチャーの身体が崩れていく。

「これだけ、苦労させたんだ……。次に忘れてたら……『座』の本体を、三人揃って殴りに行ってやる」

「……ふっ、はは……それは、怖い。肝に…銘じて、おこう」

瞳を閉じ、その情景を思い浮かべたのか笑みを深くする。

「じゃあな。その気に食わない顔を見る……三度目が無い事を願ってやる」

「では……鏡を、見ないように……すると良い」

最期に穏やかな笑みを浮かべ、皮肉を言い残して錬鉄の弓兵は現世から消えていった。

第六話　英雄交錯　Ｆａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔ（後書き）

んー、本当に書きたい部分を書き散らしてますね。

これは恥ずかしい。

でも、あえて公開する虎は決してマゾではありません。

サディスティックです。

いや、本当に。

第七話　無題　パンプキン・シザーズ（前書き）

パンプキンシザーズの二次創作ってあまり無いよなーと思い、なんか適当に書いてみようとザックリ書き散らした文章。

二次創作とも言えない短文。

第七話　無題　パンプキン・シザーズ

ある国家間で長く、凄惨な戦争が続いていた。その当事者は『帝国』と『フロスト共和国』の二国。より大規模に、そして長期化していく戦況を打開するために、帝国は密かにある禁忌を犯す。帝国内では不吉な数字として忌み嫌われる『９』が付く９００番台の部隊番号。その詳細は徹底的に秘匿され、戦線で恐怖と共に様々な噂が囁かれる謎の部隊群。その存在を知るごく僅かな者は、許されざる行いに果てに生み出された部隊群をこう呼ぶ――『不可視の９番』インヴィジブル・ナインと――。

―国境付近の戦場―

「なあ、お前さ、こんな話を聞いたことないか？」

静寂に覆われた夜更け、野営の明かりすら飲み込んでしまうような深い闇を見つめながら共和国兵の装いをした男が呟く。

「何だよ？帝国の犬共が攻めてくるのかもしれねぇのに無駄話か？」

狭苦しい戦車内で警戒を続けながら、僅かに苛立たしさの含まれた口調で相棒の男が言葉を返す。

「いいから聞けって。この前、別の戦場に派遣されてたこっちの戦車部隊が壊滅したって話を聞いただろう…。あれな、ただの歩兵部隊にやられたらしいんだ」

「歩兵にだぁ？バカな、戦車相手に戦おうとする歩兵なんざ居るわ

けないだろうが。くだらん噂話を真に受けるんじゃねえよ」

「俺だって一人だけが話してるなら信じやしないさ。だけどな……どの戦車部隊でも話されてるんだよ。『戦場で深青色の明かりを見たらとにかく逃げろ』『焼硬鉄のランタンを下げた歩兵は肉片になるまで撃て』ってさ」

「本当にくだらん。ほら、さっさと見張りに……？」

真顔で話し続ける相棒にしびれを切らした男が声を荒げようとした時、暗黒ばかりが広がっていた風景に小さな変化が起きていることに気付いた。

「青い……光？」

それは唐突に現れた深青色の仄かな光。ゆらり、ゆらりと妖しく揺れる光はまるで、幼い頃おとぎ話で聞かされた鬼火。人間を惑わせ、魂を奪い取る『死沼へ誘う鬼火（ウィル・オー・ウィスプ）』のようだった。

「あれは一体……おい、寝てる奴を起こして戦闘態勢を整えさせてこい。それと、警戒に当たってる他の戦車にも通達してくれ。戻り次第、照明弾を上げてあれの正体を見るぞ」

「分かった」

戦車を出て、野営テントへ向かった相棒を尻目に再び光へと目を向ける。心なしか先ほどより近付いているように見える。ひどく、ひどく嫌な予感が身体を貫く。実戦を経験した兵士ならば否が応にも身に付けてしまう感覚が『逃げろ』と告げている。

揺らめく光がひとつ、ふたつと増え、ゆっくりと確実に距離を詰めてきている。

「全員が配置についたぞ。照明弾の準備も完了だ」

「了解した。よし、撃つぞ」

連絡を済ませ、再び戦車に乗り込んだ相棒の言葉を聞くと同時に照明弾を放つ。軽い破裂音と共に、深い夜闇を人工の光が照らし出した。

「なんだ、あれは……？」

長い外套にひどく簡易的なヘルメットを付けただけの軽装備、武装は両手にそれぞれ握る恐らくはかなりの大口径だと思われる拳銃、手榴弾のみ。そして、腰元に下げた深青色の明かりを灯すランタン。たった、それだけの装備でこちらへと歩み寄ってくる。

「どっ、どうするよ！？」

「どうするも何もないだろ。あいつらは敵兵で、こっちに武器を持って近付いてくるんだ……やることは一つだけだ。照準を合わせろ」

「――――了解」

全ての戦車が集合し、砲門が幽鬼のごとく歩を進める一団へと向けられる。

「撃てぇ！！」

号令と同時に幾つもの砲弾が襲う。轟音が響き渡り、発射と着弾による爆発で生み出された閃光が夜を切り裂く。

「ははっ、全弾命中したな！たぶん跡形も残っていないぜ！！」

ただでさえも狭い戦車内の視界が舞い上がった土煙で塞がれる。はしゃいだ様子の相棒の傍らにある覗き穴から、ちらりと青い光が見えた瞬間、くぐもった銃声と鈍い金属音と共に相棒の頭が弾け飛んだ。

「えっ……あ？」

驚愕と混乱で真っ白になった頭の中で、話半分に聞き流していた戦場の噂話を思い出す。

――例えその瞳を灼かれても、例えその腕をもがれても、死沼に誘う鬼火（ウィル・オー・ウィスプ）に導かれるまま、保身無き零距離射撃を敢行する――

「あれが、９０１ＡＴＴ……『命を無視された兵隊（ゲシュペンスト・イェーガー）』……」

戦車内に飛び散った鮮血が眼に入ったのか、赤く曇った視界に、虚ろな表情でこちらを見つめ拳銃を向ける人間の――いや、化物の姿が――――。

次々と主砲を発射し、近距離用の散弾発射装置やライフルを撃ちまくる戦車に向け、ただ肉薄せんと歩を進め続ける深青色の焔を灯したランタンを下げた兵士。

明らかに折れている片脚を引きずり、身体中に空いた銃創から血を流しながら、それでもなお戦車の突起部分に手を掛け、右手に握った１３ｍｍ対戦車拳銃『ドア・ノッカー』でその装甲ごと内部の敵兵を撃ち抜く兵士。

戦車へとよじ登り、装甲を剥ぎ取って突破するために作られた特殊な鋏、巨大なペンチに似た外見の『三式装甲剥離鋏』で上部ハッチをこじ開けようとする兵士。

両脚を失って倒れ伏しても、キャタピラの間まで這いずってそこで手榴弾を炸裂させる兵士。

逃げ出そうとした敵兵を押し倒し、至近距離で撃たれながらその胸を装甲剥離鋏で突き刺す兵士。

その光景を見る者が居たならば、我が目を疑い、それが現実であることを拒否するだろう。戦場において最も歩兵が恐れ、相対したならば命懸けで逃走を図るだろう兵器。彼らはそれに向けて身を隠すことなく、一切の怯えも躊躇もせず、ひたすら肉薄する。

戦場に響くのは共和国側の兵士の叫び声だけ。ランタンを灯す部隊の男たちはどれほど負傷しようと呻き声ひとつ上げない。文字通り『完全に命尽きる』まで、無言で戦闘行為を続ける。

ヒトの形でありながら、到底ヒトであると認めることが出来ないその有り様。生物ならば何をしてでも避けようとする『死』を物ともしない姿は、存在自体が異端であり、まさに『化物』と呼ぶにふさわしい。

戦闘が始まってから一時間も経たずして、共和国側の戦車部隊は壊滅。生き残りも、捕虜も誰一人として居ない、『殲滅』という表現が最も合う結果。

しかし、相対した９０１ＡＴＴの状態は悲惨というべきものだった。生き残った兵士の数は戦闘開始時の約半分、その兵士もほとんどが重傷に該当する怪我を負っている。例え治療を施したところで再び戦線に復帰できるのは生存兵のさらに半分、それに届けば良い方だろう。

倒すべき敵が居なくなったことが確認できたのだろう。兵士が次々とランタンの灯を消していく。同時に傷の痛みも戻ってきたのか、うずくまり、倒れ伏し、苦痛の叫びや呻きを上げる。

この戦争が続く限り、彼らは何度でも戦うことになる。受けた傷が癒え切らぬまま青白く燃える鬼火の焔に魂を喰わせ、痛みも恐怖も、そして命すら忘れたヒトガタの化物となって戦い続ける。

第七話　無題　パンプキン・シザーズ（後書き）

もはや何も言うまい。

なんという残念クオリティ。

第八話　蒼眼の死神と月姫の鎮魂歌（リメイク版）　月姫（前書き）

月姫をプレイし、漫画版を読むうちにどうしても泣ける物語を書きたくなり、試行錯誤とリメイクを経てこの現在に落ち着いた。

リメイク前の元の文章は折を見て公開予定。

第八話　蒼眼の死神と月姫の鎮魂歌（リメイク版）　月姫

「はぁっ、はぁっ――くそっ！！アレは一体何だ！なぜ私に傷を負わせられる！？なぜ復元できないっ！？」

月明かりも届かぬ森の中を男は凄まじい速度で走り続ける。暗闇を物ともせず、自らの肉体のみでその疾駆を為し得てしまう男を『人外』と呼ばず何と呼べばいいのか。しかし、彼はひどく憔悴している。右肩から先にあるべき腕は無く、あてがった左手もさほど意味をなさないほど、大量に流血している。

かつて人間であった頃、男は魔術師だった。脈々と受け継がれてきた研究を続け、その成果を次代へと引き継いで死んでいく。それが彼の人生であり、定められた道だった。しかし、老化が顕著になり始めた時、彼は『死』と呼ばれる結末に恐怖する。蓄えてきた知識、重ねてきた研究が自分の物でなくなること、『自分』という意識の終末に恐怖を抱いた。そして、彼はその恐れから解放されるためにヒトであることを止め、『死徒』『吸血鬼』と呼ばれるモノに成り果てる。それから『研究』の名の下に幾人もの人間を殺し、『食糧』として幾人もの血を吸い尽くした。しかし、強大な力と永遠の時間を手にしたはずの男の下に、絶対的な死が訪れようとしていた。

「おのれッ！必ず殺してやる！原形を留めないほど八つ裂きに――っ、がぁぁぁぁぁ！？」

痛みと憎しみのあまり鬼面と化していた表情が驚愕と恐怖に塗り潰され、迸る叫びと同時に闇を走った銀閃がその両脚を斬り飛ばす。

「ぐっ……あ、あぁ…。や、止めてくれ……頼む、私はまだ死にた

―――」

倒れ伏し、命乞いの言葉を零しながら視線を上げた男の両目に映る黒い影。血も凍るような蒼い二つの輝きが人間の目だと気付いた瞬間、意識は完全な暗黒に閉ざされた。

日常を生きる人々の間、『都市伝説』と呼ぶにはひどく現実味を持った噂が密やかに語られている。ある者曰く、不気味な叫び声が響く新月の夜、蒼い眼をした『何か』が銀閃を引いて闇を走り抜けていった。また、ある者曰く、満月の夜に出歩く人間を斬殺して回る黒衣の化物がいる。どの噂も奇妙な殺人事件が起こった場所で囁かれ、纏わり付くような恐れをもたらしている。

また魔術や神秘が横行し、普通の人間ならば知るよしもない秘匿された裏の世界では、さらに具体的な話が恐れと共に語られる。ヒトでありながら幾人もの死徒を狩り、二十七祖の一角すら完全に殺し尽くした男。その動向は常に監視され、決して近付いてはならぬと言われた存在がいると。

陽の当たる表の世界では『死神』と恐れられ、闇に蠢く裏の世界では『殺人貴』と唾棄される。どちらにおいても恐怖と異端の対象であり、常に迫害され続けた一人の男。吸血種の最上位である『真祖』の中においてすら『姫君』と称された美しい吸血鬼。彼女に認められ、伴侶にして守護者となった唯一無二の人間。

どれもが男を表す情報の数々だが、共通するのは『化物』と恐れられていることだけ。だが、彼に近しい極めて一部の者は知っている。愛する者が命を削って戦場に立たないよう自らが戦いへ赴いている

こと。殺戮衝動に飲まれることを良しとせず、本来ならば戦いを好まない優しさを持っていることを。

だから、彼らだけは恐怖の象徴である呼び名を決して使わず、一人の人間として『彼』を呼ぶ。

『遠野志貴』と。

雑音ひとつ無い静謐な夜と、静かに揺れる純白の花々に彩られた『千年城』と称される場所がある。かつては、真祖アルクエィド・ブリュンスタッドが殲滅すべき対象が現れるまで眠り続けるだけだった場所。今は、遠野志貴と二人で穏やかに時を過ごすための居城となっている。

「ただいま、アルク」

扉を開け、声をかけながら温かく甘い香りが満ちた部屋の中へと踏み入る。床一面には柔らかな絨毯が敷き詰められ、豪奢な装飾が施された天蓋付きのベッドが鎮座する。この大きすぎる冷たい古城の中で、唯一と言っていいほどの温もりが満ちる部屋。俺とアルクェイドが多くの時間を共有する自室。

「おかえり、志貴。ごめんね……怪我はなかった？」

聞き慣れた、でも聞くたびに心がざわめく美しい声が響き、木が弾ける軽い音と共に暖炉の火が揺れる。外を染める純白と同じ色の寝間着を身に纏い、ベッドに横たわったまま俺に声をかけるアルク。胸を貫く辛さを押し殺して、彼女に笑みを返す。

「アルクが謝る必要なんてどこにも無いだろ？大丈夫。大した相手じゃなかったから、怪我もしてないよ。『眼』を使うまでも無かったから、ほとんど消耗もしなかったし」

今、俺の両目は漆黒の包帯によって包まれている。ただの布ではなく、『封印』することに特化した極めて強力な聖骸布で拵えたものである。かつては先生から貰った魔眼殺しの眼鏡で完全に『眼』を封印できていた。しかし、アルクと共に生きるため異形を狩り続けた結果、『死』を視るたびに『直死の魔眼』はその強さを増し続けた。今となっては、シエル先輩が手に入れてくれたこの包帯を使わないと、日常生活を送ることもできなくなっている。視力も奪われるので最初は随分と難儀したが、今となってはほとんど不自由を感じることはない

「志貴にばかり戦わせて……私も一緒に戦えば負担も軽くできるのに…」

「アルク、それは言わない約束だろう？戦いに力を割くよりも吸血衝動を抑える方に使わないと。二人で、ずっと一緒に生きていくためなんだから。心配するなって、愛するアルクを置いて死にはしないよ」

ベッドの傍らに歩み寄り、白く柔らかい頬にそっと触れる。以前に比べ、また少し冷たくなった体温。ロアを倒して失った力を取り戻し、戦うことを一切止めたことで多少の余裕ができた。以前ほど吸血衝動に襲われることは無くなったが、それでも、時の流れと共にゆっくりと吸血衝動が彼女の身体を蝕んでいる。数週間に一度あった自分で動くことが出来なくなる発作は徐々に間隔を狭めていき、今は数日に一度動けなくなる。アルクェイドに残された時間は刻一

刻と削られていく。

こういう事については俺よりも聡い彼女のことだ。とっくに気付かれているんだろうが、幾度となく越えてきた死線の傷や酷使の損傷は身体を蝕み、『死』を視せる魔眼は遠野志貴の『命』そのものを侵している。彼女と同じように、俺に残された時間もそう多くない。

「ふふっ、それもそうね。ありがとう、志貴。んふふー、『愛する』だって。なんか照れちゃうね。私も、愛してるよ志貴」

頬を染めて幸福そうに微笑みながら『愛してる』と言われ、深い愛しさで胸が苦しくなる。この笑顔を見たくて、ありふれた普通の幸福をもっと知って欲しくて。だからこそ、遠野志貴はアルクェイド・ブリュンスタッドを愛したのだ。

「ちゃんと言葉にしておいた方が良いような気がしてさ。喜んでもらえたみたいで嬉しいよ。さぁ、起きていると身体に障る。少し眠ろう」

言葉にできない想いが少しでも伝わるように、優しくアルクェイドの柔らかく滑らかな髪を撫でる。心地良さそうに目を閉じ、俺の言葉に僅かに首肯する。

「眠るのは構わないけど、条件がひとつ」

「何かな？」

「あの、ね……志貴も一緒に、寝て欲しいなと思って」

照れているのだろう。紅潮した顔で、伏し目がちに言葉を紡いでく

る。その願いに応えてやりたいと思う。だが、どうしても答えを返してやることができなかった。

打撃の威力を底上げするために腕や足部分に装甲板が打ち付けられ、防御力よりも動きやすさを最大限に追求した上下の衣装。主武装である仕掛け短刀『七夜』やその他の装備を身に付けるためのベルト、それらを覆い隠すために上から羽織る外套。どれもが闇に溶け込むために漆黒に染め上げられている。最大限に能力を発揮するための戦闘衣にして、魔術耐性を持たない俺のために作成された防具。俺が『殺人貴』『死神』である象徴。

何度となく返り血を浴びて汚れ切った今の姿で、これ以上彼女の近くに歩み寄ることに躊躇いを覚えてしまった。

「……おれ、は……」

立ち去ろうとした俺の手を動けないはずのアルクェイドが柔らかく握る。いつの間にか、その手に温もりが戻っていた。くすり、と小さく笑って聞きわけの無い子供にゆっくりと語りかけるように話し始める。

「本当に、いつまでたっても鈍感なバカ志貴なのは変わらないんだから。恥ずかしいから一度しか言わないわよ？」

「遠野志貴はね、アルクェイド・ブリュンスタッドが初めて愛した唯一の男なの。血に汚れようが、誰かに恐れられようが、それは決して変わることはない。どんなに時が過ぎても、どんなに姿形が変わっていっても、志貴を愛し続ける。私が志貴のものであるように、志貴は私だけのものなんだから。それが分かったら、余計な気遣いしてないで早くこっちに来なさい。ベッドの中って一人じゃ意外と

寒いんだから」

我ながら現金なものだと思う。あんなに躊躇していた心が、この言葉で簡単に定まってしまったのだから。俺が心底愛して止まない女は、こんな風にいつだって遠野志貴を捉えて離さない。時を経るごとに惚れた弱みは増え続けているらしい。

こんなにも愛しているのに、別れの時は容赦なく近付いてくる。覚悟の上で一緒になったのに、それでも叫び出したくなる悲しみが心を苛む。堪え切れずに溢れだした涙が、包帯に吸い込まれて消えていく。

「そうだな…。まったく……俺は、本当にいつまでたってもバカなままだ。色んな経験をして、アルクはどんどん魅力的に変わっていくのにな。それじゃ、お言葉に甘えさせてもらおうか」

「私が変われたのは、志貴が居たからだよ。それにー、志貴もちゃんと魅力的に変わってるよ。毎日、見るたびに惚れ直してるんだから」

「それはまた、光栄な話だ」

そんなやり取りを交わしながら金具を外して外套を取り去り、装備も全て取り払って衣装の上を脱ぎ素肌を晒す。足の装甲板も外し、寝台を汚さないように埃などをはたき落してから横たわるアルクェイドの隣に寄り添った。

「いいタイミングで身体が動くようになっちゃった」

にこにこと笑い、子猫のように身体を擦り寄せてくる。その仕草が

たまらなく愛おしくて、負担をかけないように静かに抱き寄せた。

「んー、もうちょっと強く抱き締めてくれたら嬉しいんだけどなー？」

「仰せのままに」

回した腕に少しだけ力を込め、抱き締める。甘くて優しい、アルクェイドだけの匂いが鼻腔を満たしていく。これまで何度もそうしてきた様に互いの体温を感じる穏やかな時間。

幸せだった。遠くない未来、否が応にも失われる瞬きのような幸福であっても……ただ、幸せだった。

「あったかいね、志貴」

「そうだな…すごく、あったかい」

「私ね……すごく幸せ。堕ちた真祖や死徒を狩るためだけに生み出された私が……こんな幸福を手にできたんだから。本当、ユメみたいに幸せ……ありがとね、志貴」

耳元で囁かれるその優しい声に返事をすることはどうしても出来なかった。嗚咽が漏れてしまわないように必死で唇を噛み締めていたから。返事の代わりに、細い身体を抱き締めた両腕にもう少しだけ力を込めるのが精一杯だった。

残酷な運命を背負った二人を包み込んで、少しずつ確実に時は過ぎていく。

身を斬るような冷たさを湛えた回廊に紅い滴が零れる。流血と共に立っているだけの体力が失われ、体温が奪われていくのを承知で壁に寄り掛かった。

「げほっ……はっ、はぁっ……アルク……どうやら、今日が……最期みたいだ……」

斬り裂かれ、焼け焦げ、ぼろきれの様になった外套を脱ぎ捨て、砕けて折れ曲がった装甲板を外して壁伝いにゆっくりと歩き出す。一歩踏み出すごとに零れ落ちる血が点々と石床を染めていく。

アルクェイドの意志が成し得た奇跡なのか、すぐに吸血衝動の限界が訪れると言われた日から三年を彼女は生き抜いた。しかし、二週間前ついに限界が訪れ、呆然とする俺に彼女は『志貴を愛せて幸せだったよ。ばいばい』と言い残して、衝動に飲まれる前に永遠の眠りについた。

アルクェイドは自分が限界を迎えた後、俺の好きな人生を送って欲しいなんて言っていたけど、俺は彼女を守り続けた。二度と目覚めることがない眠りに落ちた真祖の身体、それは格好の研究材料や大きな利用価値を有しているのだろう。アルクェイドが眠ってから、侵入者が後を絶たなかった。千年城の堅牢さや入り組んだ構造を利用して何度となく退け、容赦なく殺し続けてきたが……遠野志貴の全ても限界を迎えていた。

「あがっ！？ぐっ……う、はぁ、はぁ…アルクの所までで良い、頼むから、保ってくれ…」

度重なる戦闘でさらに蓄積された損傷が自由に身体を動かすことを許さず、使いすぎた直死の負荷は耐えがたい激痛となって頭蓋の中をかき回す。重傷と引き換えに何とか侵入者は殲滅できたが、その深さから治癒はもう望めない。

「はっ、ははっ……痛みも、感じない…完全に致命傷だよ、な」

凍えるような冷たさと一緒に何もかもが黒く飲まれていく感覚、慣れ親しんでしまった濃厚な死の気配に原初の記憶を呼び起こされる。ありとあらゆる概念に包含される『死』を見抜く『直死』という名の魔眼を手に入れた全ての始まり、遠野志貴が死んだ、あの夏の記憶を。

一歩進む度に悪寒が全身へと広がり、鼓動が弱まっていくのを感じる。それと反比例するように、封印を施したままの両目と身体がより深く『何か』に繋がっていく。

「あぁ……この、感じは……これが……『根源に繋がる』っていうやつか…」

ようやく、千年城の最奥に辿り着いた。冷たく分厚い扉に触れ、アルクェイドに教えてもらっていた言葉を口にすると、重厚な音を響かせながら彼女が眠る玉座の扉が開く。

「アルクェイド・ブリュンスタッド――――あの時の約束、果たしに来た」

純白の布地に金糸で鮮やかな装飾を縫い込んだドレスに身を包み、まるで磔にされているように鈍く光る鎖で全身を縛める姿。覚めない眠りに沈む、遠野志貴が生涯で唯一愛した女。

その強大な力と不死性ゆえ消滅する事も許されず、真祖の寿命とも言える吸血衝動の限界を迎えた今、世界が終わる瞬間まで眠り続けるしかない彼女を解き放つ。それは、いつかの月下の夜に交わした、遠野志貴だけが果たせる約束。

アルクェイドの目前まで歩いていき、腰の後ろに差しておいた『七夜』を抜き出す。彼女の目前に立ち、ゆっくりと両目を覆う漆黒の封印に指をかけた。さらり、と流れるように封印が解けていき……月光より鮮烈な蒼を宿す一対の魔眼が露わになる。

「――――――――」

人形のように白くなり、冷たくなってしまった頬にそっと触れ、麗しさと瑞々しさを欠片も失わない唇を撫でる。別れと、再び巡り合えるよう願いを込めた最期の口づけを施す。

アルクェイドと過ごした時間を思い出すために一度だけ目を閉じ、一切の慈悲も感傷も捨てるように鋭く開いた。滅びを知らない命の綻びを視るため、さらに深い蒼へ瞳が染まる。

有機物の死ではなく、無機物の死でもない。概念や現象の死すら超越したその先、僅かに残った命が燃え尽きようとする瞬間、最も深い場所にある『終わり』に繋がって理解した。

「これが……真祖の、死…」

伝説にある物以上の力を発揮した直死の魔眼によって、ほぼ完全な不死である真祖の『死』は暴き出された。アルクェイドの胸の中心に『死』の収束点が現れ、七夜と銘打たれた愛用の短刀を握り締め

る。数え切れない命を斬り裂いてきた刃が冷たく輝いている。

この短刀と俺の魔眼、そしてアルクェイドが交錯したことで始まった物語を終わらせよう。

「――さよなら――」

初めてアルクェイドの命を奪った時とは違う、今度は明確な己の意志をもって彼女を殺す。頬を伝う涙をそのままに、真っ直ぐ放った一閃が彼女の『死』を確実に貫いた。刃が突き刺さった胸の中心から、アルクェイドが光の粒となって崩れていく。

役目を終えた身体から力が抜け、仰向けに倒れる。視界は完全に暗闇となり、朦朧とした意識で、主を失った千年城が崩壊を始めたことを知る。数秒後には事切れるだろう。だが、崩れ落ちた瓦礫に粉砕され、魔眼を通して『根源』に繋がった遠野志貴の身体を利用することは出来ないはずだ。

何も感じなくなった闇の中で、愛しい彼女の声を聞いた気がした。

こうして蒼月の物語は、全て無へと還る。

誰も知らない、蒼眼の死神と月姫の鎮魂歌は静かに幕を閉じた。

第八話　蒼眼の死神と月姫の鎮魂歌（リメイク版）　月姫（後書き）

やっぱり……アルクェイドと志貴がお似合いカップリングだと思う。

漫画版のアルクェイドは……あんなとこやこんなとこが凄く……えっちぃです。

第九話　リメイク版彼岸雨　ｖｅｒ．ＳＳ　月姫×空の境界（前書き）

某動画サイトで神ＭＡＤと崇められている月姫と空の境界をクロスさせた彼岸雨。それを見た虎がどうしても文章化したいと勝手な思いを抱き、暴走する思いのまま書き散らした文章。

これもリメイク後の物であり、原文の方は行方不明。

第九話　リメイク版彼岸雨　ｖｅｒ．ＳＳ　月姫×空の境界

――蒼い蒼い月の光、醒めるような夜の下で……僕たちは出会った――。

夢幻のように、何もかもが曖昧に揺らめいている。

嗅ぎ慣れた、だけどひどく吐き気を催す鉄錆の匂い――濃い血の匂いがする風も、夜風に吹かれてざわざわと耳障りな音を立てる草原も、五感に届く全てが……今にも粉々に砕け散ってしまいそうな不安定感。

ただ――刃のように冷たい輝きを放つ蒼月。濃く深い紅が黒色に色彩を変えた、そんな生々しい暗闇が満ちる大気だけが……怖気を感じるほどに現実感を持っている。

そんな異質な空気、夜の中をひたすら歩く。

言葉に表すことができない――強いて言うならば『本能』に誘われるように、導かれるように迷うことなく歩き、進み続ける。

恋焦がれる相手の下へ向かう時のように、いつか――『月の姫』を十七に切り刻んだ時のように、ひどく心臓が高鳴る。焼けるように熱い血液が身体と脳髄を焼き尽くし、極度に高まった衝動と欲望を呼び起こす。

確かに感じる……この先に『奴』が居る。

この世界で唯一『遠野志貴』と感覚と感情の一部を共有し得る、その点においては誰よりも似ている相手。そして、だからこそ誰よりも異なる矛盾存在。近くて遠い、絶対の隔絶を孕んだ平行線の向こう側。

出逢った瞬間……どちらかが『死』ぬまで殺し合う宿命を背負った『真性の殺人者』

「――あぁ、オマエだな」

ぼんやりと微眠みに漂うような口調で呟くのは、限りなく透明な空気を纏う少女。何も持たず、何も求めず、ヒトであるための『何か』を完全に壊してしまったモノが纏う……纏ってしまう、狂気にも似た清澄な気配を放っている。

虚空を照らし出す月光を糸に織り上げたような蒼い着物を身に纏い、鮮血で染め上げたように鮮やかな紅色を放つ革のジャケットを羽織る。

乱雑に切り揃えてあるにも関わらず絹糸のように滑らかな黒髪の隙間から、存在し得るあらゆる『死』を凝縮し、内包した怜悧に輝く蒼眼が俺を射抜く。

「なるほど……トウコが知れば驚くだろうな。実際……オレ自身も驚いてる」

品定めをするように瞳を細め、少女は得心がいったように頷いた。

「君は……」

「もう分かってるんだろ？とぼけるなよ。オマエの身体が、心が……何よりこの『眼』が叫んでるハズだからな。此処にやって来たのが――今、この夜に、こうやってオマエとオレが対峙しているのが何よりの証拠だ」

恋に狂った者の情熱、焼け爛れる熱が籠った声で言葉がぶつけられる。さらに熱感を増した俺の身体のように、きっと彼女も狂おしい衝動を身の内で滾らせているんだろう。

おもむろに右手を後ろに回し…きん、と澄んだ音を響かせ少女は着物の腰から無骨なナイフを抜き放った。

月光を反射して艶やかに煌めく刀身を見た瞬間、凍りつくように頭のどこかが冷える。それはまるでスイッチのように『遠野志貴』の意識を冷徹な殺人者へと切り替えていく。

「なぁ、アンタ……この『眼』を持って、どうやって生きてこられたんだ？」

何気なく、雑談をするように少女は問いかける。

「助けられたんだよ。俺は……魔法使いに助けられた。一人じゃ、耐えられやしなかった」

最初から決められていたように答えを返す。思い浮かぶのは草原で出会った風のような女性、まるで異形の『眼』に引き寄せられたような邂逅の果てに『遠野志貴』の命を救った大切な人。

「魔法使いか……羨ましいね」

どこか親しげにも聞こえるやり取りをしながらベルトに挟んでいた『七夜』を抜き、仕掛けを作動させ、刀身を露わにすると同時に逆手に握る。

「なら、君はどうやって生きてきたんだ？」

俺と同じ『眼』を持つ彼女が歩んできた道を知るために、投げかけられた問いをそのまま返す。

「オレを救ったのは……お節介焼きの『誰か』と、しがない異常者だよ」

少女はそう言って遠くを見つめるように瞳の焦点をずらし…悲しみ、寂しさ、怒り、憎しみ、好意、愛情……相反する様々な感情が行き着いた果てのように淡く、幻のような微笑みを浮かべた。

目前に佇み、言葉を交わす少年を見つめる。

何の変哲もない学生服を身に着け、地味な眼鏡をかけた何処にでも居るような少年の姿。されど、薄皮一枚の下に潜むのは異常を押し固め、かろうじてヒトガタを保っているだけの異形。

『殺すモノ』に共通する、身体から感じる濃密な血の匂いに酔ってしまいそうになる。後天的なものだけじゃない……脈々と受け継がれ、遺伝子レベルで刻み込まれ先鋭化した『殺人者』の匂い。それはこの身体に流れる『両儀』と同じ、全能力を一定方向に収束させることで逸脱させた『人でなし』の系譜の証。

「君は――どうしようもなく、ガランドウの世界を知ってるかい？」

どれだけの命を刈り取ってきたのか、月明かりに濡れて妖しく光る古い仕掛け短刀を自然な仕草で構え、少年は穏やかに問いかけた。

「あの時から――ずっと、その世界で生きてきた」

まるで砂に落ちた雫のように、嵌るべき場所に嵌っていくピースのように……少年の言葉が心に吸い込まれていく。思い出すのは『アイツ』を殺そうとして『織』が死んでしまったあの夜。己の異常を自覚し、止めようもなく自壊していく『私』を守り、自分の願いを託して消えた……『織』と共に大切な『何か』を永遠に失った夜。

「なら、アンタは――今にも崩れそうな世界を知ってるのか？」

モノに内包された『死』を見抜く、ヒトが宿すには最悪に過ぎるこの『魔眼』を通して思い知らされた。この身体を取り巻く世界は――

「知ってるさ……。世界は『死』に溢れ……脆く、ツギハギだらけだ」

やはり目前の男は知っているのだ。『普通』に生きている人間の方を異常に感じてしまうほど、死んでしまいたくなるほどに――

「「世界は――こんなにも孤独に満ちている――」」

まるで示し合わせたように逡巡もなく、同時に零れ落ちた言葉が重なる。そして風が吹き止み、痛いほどの静寂が訪れた。

「まるで……何もかも死んでしまったみたいだ」

どこか遠く、久遠の彼方を見るように瞳を細め、悲しそうな笑みを浮かべた少年に心がささくれ立った。

「お前はアイツに似ているようで――根本から違うイキモノだ」

肌が粟立つほどの強烈な殺気を叩き付け、憎悪に歪んだ表情で少女は言い放つ。俺は『アイツ』が誰かは知らない。だけど、きっと彼女にとって『聖域』のような存在なんだろう。遠野志貴にとっての『彼女』のように。

共通項など何一つ存在しないというのに……その姿に自分の想いを幼く、純粋な殺意でしか表現できなかった『彼女』が重なった。

「――君の危うさによく似たヤツを俺は知ってるよ……」

「全て終わったハズなのに……全て終わらせたハズなのに……」

鼓動はさらに強く激しさを増して破裂寸前、灼熱と化した血潮が麻薬すら凌駕する快楽をもたらした。『どうしてこうなった』と後悔が理性を苛むのに……本能は歓喜に打ち震える。

「こんなにも簡単に――世界は狂う」

『殺せ――瞬きの間に解体しろ――あの存在を犯し尽くせ――！！』

気が緩んだ瞬間、疾駆に移ってしまいそうな四肢を抑えつけ、虚空

に浮かぶ月を見つめた。狂気を沸き立たせる光はさらに冴え渡る。

「あぁ――何だか、ひどいユメを見ているみたいだ……」

儚く溶け消える淡雪に似た表情の少女に向き直り、より意識的に殺戮衝動を果たすための心と身体に切り換える。

「俺は……生かしたいから殺す。ならば君は――何のためにモノを殺す？」

口をついて零れた問いは、まるで予定調和のように闇夜へ溶けていく。鮮やかな指使いでナイフを逆手に持ち替え、少女は全速の疾走に最適な構えを取った。その姿の美しさに背筋がざわめき立つ。

「オレの理由……か。『殺したいから殺す』セカイに存在する前から――そう定められてた気がするよ」

そう言って彼女は笑う。穏やかで優しい、何よりも美麗な伽藍洞の微笑み。魔眼殺しを外し、最速を以て迎撃するべく前傾姿勢になり、腕を引き『七夜』を構える。

「本当に無様だ――どっちも、マトモじゃない」

凍えきった視界が『線』と『点』に埋め尽くされ、殺し合いの空気に脳髄が際限なく沸騰していく。

すう、と息を吸い『意識』と『身体』を戦闘用に作り替える。最高の性能を引き出すには日本刀が必要なのだが、これでいい。触れ合

えるほどの距離で、互いの呼吸の熱さが冷え切らない近さで斬り合うナイフで殺し合いたいから。

同時に『直死の魔眼』を呼び起こし、月光に浮き上がる男の『線』を視た。くっきりと、ある種の純粋さすら窺わせる少年の『死』が映る。これまで見てきたどの『死』よりも幻想的であり、散りゆく桜と通じる美しさを感じてしまった。

何にもならず、誰のためにもならない。ただ平凡に、普通に、どうしようもない孤独を抱えて生きる『アイツ』の線を見たことはなかった。だが、少年の『死』を見て思う。『アイツ』の内包する『死』もきっとこんな風に――

「あぁ……アンタの『線』は綺麗だな。こんなにも綺麗だと思える『死』は初めてだよ」

オレも、ヤツも、共に『死を視るモノ』を宿す異端。そして、生まれる前から異形として生きることを定められた存在。

「オレたちは誰よりも似ている。互いを理解しているが故に――だからこそ、何よりも互いの存在が赦せない」

大気は凍りつき、際限なく高まる殺気に軋みを上げる。月光に濡らされ、殺気に研ぎ澄まされた二振りの短刀がさらに煌めきを増し、伝説にのみ語り継がれてきたニ対の魔眼は蒼銀へと色彩を変えていく。

此処は月下の舞台。極限の殺意が収束し、乱れ舞う二匹の鬼を除い

て世界の全ては死に尽くす。あらゆる『存在』そのものが否定されるその光景、常人ならば息を飲む間もなく死に飲み込まれる空気、異常であるからこそ持ち得る幽玄の美しさ。

対峙するどちらもヒトを超越した歪な鏡面存在。恐らく、互いに残す言葉はただ一言。それは引き金であり、発せられた瞬間に撃鉄が落ちて炸裂する。

すう、と小さく息を吸い込む音が夜に響き渡った。

「月が堕ちぬ間に終わらせよう――」

少年の声が闇を切り裂き――

「思い知れ――」

少女の声が月を穿つ。

「「――これがモノを殺すってことだ」」

此処に……決して語られる事はないだろう、ひとつの『神話』が幕を開けた。

第九話　リメイク版彼岸雨　ｖｅｒ．ＳＳ　月姫×空の境界（後書き）

あんなに素晴らしい物に比べたら、ミジンコ以下の駄文ですね。

あぁ……あちらこちらで批判の嵐が巻き起こっているのを感じる……。

第十話　リメイク版　鶴翼ニ秘メシ想イ　Ｆａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔ（前書

初めて二次創作として書いた文章を後にリメイクしたもの。

アーチャーが己の象徴となるまで二刀一対の黒白夫婦剣を使い続けた理由を考えてみた。

世界の裏側、『ヒト』が『人間』として生きていくため強固に織り上げた常識が及ばぬ暗闇に包まれた部分がある。そこでは異形が跋扈し、神秘は『神秘』としての瑞々しさを保ち、『人間』であることを捨てた『魔術師』が横行する。

そこではある概念が確固たる『魔術的』な知識と理論をもって学ばれている。それは『平行世界』と呼ばれ、あらゆる可能性が無数に分岐して存在する世界のカタチ。

普通は知識としてそれを知るのが精一杯だが、時として『普通』の枠を超越する人外が現れる。例えば『魔道元帥』と恐れられ、平行世界を自由に行き来する宝石翁キシュア・ゼルレッチ・シュバインオーグ。

例えばシュバインオーグの系譜に名を連ね、その有り余る才能を極限まで磨き上げた果てに平行世界への扉『第二魔法』へと至った現代の魔女、遠坂凛。

平行世界を観測する手段を有する彼や彼女だからこそ知り得る事実がある。人間には……いや、人間に限らずありとあらゆる事象には無限の可能性が秘められており、ひとつとして完全に『同一』となる世界など存在しないということ。

そして、極めて稀ではあるが秘められた可能性がひどく限定された『モノ』が存在することを。

まるで世界が『そうあるべき』と定めているように、『何か』が明

確な意図をもって手を加えたように、それらが持つ過程と結末の可能性は決められてしまっている。どうしようもないほどに、決定されつくしてしまっている。

その最たる例を挙げるとするならば、ある一人の人間が歩む生涯がいいだろう。

その少年、あるいは青年、あるいは壮年の男は『衛宮士郎』と呼ばれる。

彼の始まりはいつも紅蓮の業火の中。救いを求める声、絶望の叫び、怨嗟の呻きが渦巻き、煉獄と化した瓦礫の中で心身がガランドウの抜け殻と化す所から始まる。そして灰色に染まる雨空の下、後悔と絶望に塗れた『正義の味方』の残骸に救われ、ガランドウの心に愚かしくも尊い理想を宿すことになる。

絶対悪など存在せず、絶対正義もまた存在しない。弱者と強者、加害者と被害者が止まることなく入れ替わる世界の中で衛宮士郎は『正義の味方』を目指していく。近付くほどに遠ざかる陽炎を捕まえようと走る子供のように、ただ愚直に衛宮士郎は理想を追いかけ続ける。

身体に刻まれる傷も、流れる血も、衛宮士郎の側に居たいと願う人々も、『貴方は立ち止まってもいいんだ』とかけられた声も、何もかもを置き去りにして走り続けていく。

『救いたい』と願う自身の想いが欠片も無いままに、ただ『救わなければならない』という機械的ですらある衝動のままに、自分以外の『誰か』を救うために彼は幾度となく命を懸けた。

その果てに彼は現代では辿り着く者すら稀となった『英雄』と呼ばれる存在にまで登りつめることになる。

同時に決して抜けることができない輪廻から外れた『英霊』という名の無間地獄に囚われる。

過程を経る間に様々な差異やイレギュラーが発生する場合もあるが、ほとんどの場合は衛宮士郎が歩む生涯は苦難に満ちたものになってしまう。

衛宮士郎が持つ可能性が表出するどの平行世界でも、誰もが言葉を失い、あるいは涙を零すであろう彼の生涯ではあるが、どの世界でも共通して彼の生き様に深く関わるモノがある。

ひとつは幾星霜の時を越えて邂逅した美しい剣のような少女。

そして、もうひとつは歴史に名前だけが伝えられていた二刀一対の剣。

少女は少年の心をどこまでも深く、決して忘れることが無いほどに強く捉え、剣は少年が抱き続けた永遠に別離した少女への想いを映す象徴となった。

「投影――開始」

鍵となる言葉を紡ぎ、魔術回路を起動させる。回路を通して目的にふさわしい性質へと精錬された魔力を錬鉄、この身に刻まれた『剣』

の属性を槌と炎としてある双剣を打ち上げる。青白い火花を上げ、両手の中へ生み出されたそれは古の時代、稀代の刀工が自らの妻を捧げ鍛え上げた夫婦剣。遙か遠い高みを目指す。ただ、その一心で創り上げた剣。

銘はそれぞれ『陽剣　干将』　『陰剣　莫耶』

刀工自身の名と、その妻の名がそのまま刻まれている。自らの理想のために命を捧げた妻への想いがそうさせるのか……たとえ片方が失われようとも、残る片方に引き寄せられ再び対となる名剣。

大切な者を犠牲にして高みを、己が追い求める理想をカタチにした刀工の信念が秘められている。

何処にあろうとも引き合い、どれほどの時間や距離があっても必ず共に在り続けるようにと夫婦剣に込められた創造理念。

類似というにはあまりにも自身と重なりすぎる歴史を持つからこそ、衛宮士郎はこの二刀一対の名剣に惹かれた。

限りある矮小な力しか持たない人間が望むには大きすぎるユメ、誰もが一度は心に浮かべるだろう愚かしくも尊い願い、まるで雲霞のように揺らめく遙か遠き理想。

叶えられぬ遠すぎる願いと知ってなお追い続けると決めたその想い。

「問おう――貴方が私のマスターか――？」

「シロウ――貴方を愛している――」

例え地獄に堕ちることになろうと永遠に忘れぬと誓い、黄金色の光に包まれて永遠に別離した美しく誇り高い少女への想い。

そして、衛宮士郎の象徴となった黒白の双剣にその生き様、心を言霊として刻み込んだ。

――鶴翼欠落不――
――心技至泰山――
――心技渡黄河――
――唯名納別天――
――両雄倶別命――

鶴翼は重ならず、ただ各々が道を進むのみ。命運は別たれ、別々の天に還ることになる。されど、心に刻んだ想いと信念が欠落することは無い。

いつしか『錬鉄の英雄』と呼ばれるモノへと成り果て、摩耗し壊れかけた残骸となっても、その手には変わらず夫婦剣が握られ続けた。

紅の弓兵と邂逅した少年の両手にも、未来の自分を打倒し乗り越えた少年にも、理想を捨てて違う道を歩むと決めた少年の両手にも夫婦剣は握られた。

そして恐らく、語られることは無い別の平行世界の衛宮士郎の両手にも、何らかのカタチで黒白で彩られた二刀一対の名剣は握られるのだろう。

愚かしくも純粋な理想と変わらない深い愛情が秘められた双剣は、『衛宮士郎』と共にあり続ける。

第十話　リメイク版　鶴翼ニ秘メシ想イ　Ｆａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔ（後書

当たらずとも遠からずではないかと自負している。

えっ？勘違い？

サーセンｗｗ

第十一話　リメイク版　LAST PROMISE Fate／stayni

アインツベルンと戦う士郎くんが書きたいなーと妄想し、ついでに切嗣さんやバーサーカーも絡めたいなーと妄想し、イリヤちゃんのために戦わせたいなーと妄想した結果、整合性も何もなく、ただ突っ走った文章になってしまったもの。

第十一話　リメイク版　LAST PROMISE Fate／stayni

深い山奥、常冬に閉ざされた墓標を彷彿とさせる古城がそびえ立つ。
　そこは千年の永きに渡り、第三魔法に至るべく全てを費やしてきた一族が住まう場所である。その名をアインツベルン一族、通常の理など欠片も存在せず、妄執と狂気が渦巻く人外の魔窟。

そこから1キロほど離れた場所に生えた巨木の枝に乗り、鋭い目つきで古城を見つめる人影があった。純白に染まる森に挑みかかるような深紅の外套を纏い、感情の欠片を見つけ出すことすら困難に思える無機質な表情の青年。ただ、その瞳には壮絶な覚悟と決意が秘められている。

『正義の味方』を志し絶望の内に破れた男の理想を受け継ぎ、『衛宮』の名を冠する青年。聖杯の少女と交わした誓いを背負い、闘争の渦中へと身を投じ続ける彼の名は衛宮士郎。その振るう異能に対する畏怖から『魔弾の射手』『剣製者』の二つ名を持ち、外道へ堕ちた者達の間で脅威の存在とみなされている。

傍らに置いていたケースを開き、『魔術師殺し』と恐れられた衛宮切嗣がかつて使用していた武装を取り出す。拳銃より一回り大きい程度でありながら５０発の弾丸を装填できる鋼の凶器、キャレコＭ９５０を左脚に付けたガンホルダーへ固定する。人体に致命傷を与えるためだけに特化した形状のコンバットナイフ、投擲用ナイフ、僅かに触れるだけで肉まで切り裂けるほどに研ぎ澄まされた鋼線を次々と身に付ける。

最後に残る封印紋様が刻まれた黒檀のケースを開く。柔らかなビロードに包まれ、重厚な威圧感と完成された美しさを併せ持った銃が姿を現す。最高級の樫材、精錬を重ねた堅牢な鋼に何重にも魔術強化を加え、緻密な計算の元で削り出した部品で組み上げられた芸術品のような凶器。『トンプソン・コンテンダー』と呼ばれる大型拳銃である。衛宮切嗣を『魔術殺し』たらしめていた最大の切り札にして魔術礼装。装弾数はただの一発、その代わり通常では大型ライフルなどでしか使えない大口径、装薬量の多い強力な弾丸を使用できる。

中折れ式の銃身を開放し、装甲車の鉄板すら軽々と撃ち抜ける０３－０５スプリングフィールド弾を装填する。がちり、と弾丸を内に収め、命を吹き込まれたように輝きを増した銃を左脇に下げた専用のガンホルダーへ収めた。懐に備えられたスペースに予備弾丸を差し込んでいき、最後に空いた部分には漆黒の小箱を入れる。

戦闘準備を済ませ、膝をついた体勢から立ち上がる。『剣』のような雰囲気とは不釣り合いな美しい銀糸と極上の宝石を織り交ぜて作られた首飾り、左手首に嵌めたブレスレットが揺れる。それぞれを慈しむようにそっと撫で、静かに瞳を閉じて闘争の口火を切るための言葉を紡いだ。

「同調、開始」

小さく唱えた詠唱とともに魔力が通るべき回路を巡り、成すべき魔術を成立させる。筋力、瞬発力、反射神経が強化されヒトに許された範囲を超え、最も魔力の通りが良い両目は元々の高視力を大きく強化され、高精度の双眼鏡や狙撃用スコープをも凌駕する能力を発揮する。『鷹の目』と称される瞳が古城の細部を映し出す。

「投影、開始」

続けて口にする詠唱は同じ響き。しかし……そこに込められた意味は全く異なる。これは『剣製者』として世界の理を歪める異能を発現させるための鍵。まるで虚空から滲み出すように、織り上げられるように左手の中に現われた漆黒の洋弓。常人ではまともに引くことすら不可能なこの強弓は…かつて邂逅した『衛宮士郎』の未来の姿、紅き弓兵が武装の一つ。

「投影、開始――――投影、重装――」

心象世界に存在する無数の剣から『硬き稲妻』の銘を刻まれた剣を具現化させる。それは遥か彼方にある三つの小丘の先端を斬り落とした名剣。続けて発動させたオリジナルスペルをもって『剣』としての在り方を歪め、『矢』としての属性を付加させて特化。

術の成立と同時に放った瞬間どこまでも疾駆し、あらゆるモノを貫き穿つ螺旋剣が完成する。桁外れの想像力と理解力、衛宮士郎が持つ唯一の属性、この身に宿した魔の術により、カタチは変われど神代の名剣はかつての力を再び振るう。弓に番え　静かに、そしてあらん限りの力をもって弓を引き絞り、同時に練り上げた魔力を込めていく。

「――――”偽・螺旋剣”」

真名解放を引き金として、破壊の矢を放った。

自らに迫る脅威の存在を知ることなく、城に住む者たちは彼らの日常を過ごす。『魔術の研究』という名の下に繰り返される凄惨極まる行い。阿鼻叫喚と吐き気を催すような光景の中で、彼らは己の力を過信しすぎていた。生粋の魔術の名家を狙う勢力が存在するなど考えず、魔術の粋を凝らした結界や仕掛けに守られた古城を……たった一人の人間が破壊するなど想像できる筈が無かった。神を嘲笑うかのような光景は突如として圧倒的な破壊と閃光に塗り潰される。

古城との間に横たわる距離を一瞬で踏破した『矢』は護りと迎撃の結界を根こそぎ突破、堅牢な外壁を易々と貫き内部を粉砕し尽くす。

「Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ―我が骨子は捻じれ狂う―」

モノの存在を崩壊させ、内包された神秘を純粋な破壊力へと強制的に変換させる言霊に反応し、『壊れた幻想』と化した螺旋剣は内包された神秘を巨大な爆発へと変え、廃墟と化した古城の一部を完全に消し飛ばす。

「――――投影、開始」

再び唱えた詠唱で創り出すのは無銘の長剣を元に作成した『剣矢』。投影魔術の応用による加工を加えやすい何の変哲も無い長剣、それを強力な『矢』として使用するために調節、投影した物である。途切れる間もなく生み出す剣矢を弓に番え、嵐の如く城へ向けて撃ち出していく。一息に六連――容赦なく降り注ぐ剣矢の雨。わずか数分足らずで放った剣矢は百を超えるだろう。一片の慈悲もなく放っ

た『矢』は致死の魔弾。先の一撃から生き残った者、死に切れなかった者、異変を察知して飛び出してきた者を容赦なく貫いた。

古城は未だ三分の二が健在…これより俺は城へ向けて進撃を開始する。ただ一人なれど――この身に宿るは無限の剣、無数の剣群。今は亡き純白の少女の願いを抱き、俺は征く。

強化された身体で出せる最大速度で森を抜け、混乱の最中にありながら迎撃の準備を始めた城内に斬り込んでいく。

「――――投影、開始ッ！！」

発動鍵の言葉を発すると同時に両手へ現れた黒白の夫婦剣『干将獏耶』。身体の一部であるようにしっくりと馴染む愛剣を閃かせ、瞬く間に三人を斬り伏せる。疾走の勢いを回転運動へ変え、全方向へ斬撃を繰り出しながら突っ込む。

「はっ――あっ！！」

襲いかかる刺突、斬撃、魔術行使。いなし、受け止め、回避し、返す刃で生命活動を停止させる。一瞬たりとも止まる事はない。

魔力を込め投擲した双剣が美しい鶴翼を描いて首を刈り取る。右手に創り上げた大剣は凄まじい冷気を振り撒き、向かい来る者を氷柩に閉じ込めながら両断する。左手に握る深紅の魔槍は大気を縦横無尽に駆け巡り、心臓を貫き、開放した死の棘をもって全身を肉塊に変える。古今東西、伝説や伝承に名を残す名剣、魔剣、聖剣、ありとあらゆる武具が乱舞し、その名に違わぬ力を発揮していく。

「ぐっ――投影、開始ッ――――！！」

死角からの不意打ちで右足を射抜かれ、生じた隙に殺到する魔術掃射。

「Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ―”熾天覆う七つの円環”―」

花開く七つの花弁。あらゆる投擲武器を受け止め、無効化する絶対の盾が展開される。それは確実にこの命を絶つはずだった攻撃を完全に防ぎ、反撃の機会をもたらす。

左脇のガンホルダーから抜き出した鈍い輝き。引き金を引くと同時に撃鉄が落ち、右手の先に構えたコンテンダーが轟音を響かせ大口径の弾丸を吐き出した。大きな反動と共に飛翔した弾丸は魔術師の生命維持に必要な器官を全て吹き飛ばし、回復の間すら与えず死へと叩き込む。

次に現れた一団に向かって広げた左手を向ける。絶え間ない酷使により悲鳴を上げる魔術回路。

「がっ……ごふっ……」

回路そのものが神経と融合している俺にとって、その反動は耐え難い痛みとなって襲ってくる。傷ついた内臓から込み上げる血を飲み下す。吐血などで余計な体力を消費することはできない。飲みきれなかった血が口端から朱線を引く。

「はぁっ……はっ……」

回路発動のイメージである撃鉄を次々と上げ、限界を超えた速度で限界を超えた数の設計図を脳裏に走らせる。魔術発動の詠唱を思い浮かべ――

”投影開始――工程完了。――全投影、待機――”

「停止、解凍――全投影連続層写ッ！！」

成立と同時に内界より顕現し、左手の先から放つ投影宝具の一斉射撃。数え切れない宝具の群れは無慈悲な牙と化し、目前まで迫った敵の群れを完膚なきまでに噛み砕いた。

「がっ！？――ぎっ……」

激しい損傷を受けた回路が断線をはじめ、行き場をなくした魔力が暴走する。　反動はただの痛みを超え、体の剣化へと移行し始めた。　負った傷が内側から『剣』で塞がれ、肉と鋼鉄が鬩ぎ合いぎちぎちと軋む体内。

「まだだ……まだ、終わっていない――！」

苦痛を噛み殺し、流れ落ちる血を拭い消す。コンテンダーの空薬莢を排出して新たな弾丸を装填、周囲を確認する。　これ以上向かってくる姿はない。　古城の奥へと走る。　全ての元凶となった聖杯一族が当主の居る場所へ。

物量に任せて突撃を繰り返す敵勢を斬り伏せ、穿ち、撃ち抜く。減り続ける魔力を温存するためキャレコとコンテンダーを両手に携え、強化した腕力に任せて撃ち続ける。

「ぜっ、はぁ……げほっげほっ！！」

底を尽いたヘリカルマガジンを投げ捨て、キャレコに新たなマガジンを嵌め込む。連射によって加熱された銃身を開放し、コンテンダーも再装填を済ませる。眼前に現れた巨大な扉を押し開け、豪奢な装飾を施された玉座へと進んでいく。

「貴様が……アインツベルン一族の当主、ユーブスタクハイト・フォン・アインツベルンだな」

玉座に座り、絶対的な力を誇示するように睥睨する男。魔術を用いて老化を遅らせ、未だに壮年の外見と能力を保っている。

「ふん……下賤なモノが私の名を口にするなど反吐が出る！！」

襲撃者に自らの名を呼ばれたのが不快だったのだろう。鬼のような形相で吼え、その怒声が響き渡ると同時に次々と武装したホムンクルスや魔術師が姿を現す。

「貴様の目的が何かは知らんが……この行いの代償、一度や二度死ぬ程度で贖えると思うな……何度死のうと、蘇生させて殺してやる……！」

俺へ向けて収束していく殺意。　奴らが動き出せば一瞬でバラバラにされ、殺されると確信できる。包囲され、絶対的に不利な死地に立たされているにも関わらず、僅かばかりの恐怖も感じない。

あるのはただ……イリヤが、血を分けずとも確かに俺の妹で、そして姉だった少女が最期に残した俺への願い。

”シロウ……お願い。もう、聖杯戦争が起きないように……私みたいな存在が生み出されないようにアインツベルンを滅ぼして。”

”ごめんね……シロウには傷付かない、危険の無い生き方をしてほしいのに。最後の最後で、身勝手な願いをするなんて……こんな私を、許して……”

「目的……か。俺に、目的なんか存在しない……」

”イリヤの願い、必ず叶えるよ……約束する。泣くなよ、イリヤ。これは……俺の選んだ道だから。大丈夫……アイツと同じにはならない。俺は俺のまま、走り抜けてみせる”

あの時の誓いと約束をここで果たす。

「大切な、俺の姉さんの願いだから……そして、俺が『俺』だからお前達を滅ぼす」

「貴様、何を……言っている……？」

まるで狂人を見ているかのような目を向けてくる。それでいい……おかげで、決定的な隙を見つけ出せた。袖口から滑り落とした遠隔装置を左手に握る。

状況を打開するための投影魔術は完璧な精度を以て準備してある。

あとは……発動のため、詠唱を待つのみ。

「俺の名前は衛宮士郎。衛宮切嗣の息子、『エミヤ』を継ぐ者。イリヤの兄、イリヤスフィール姉さんの弟。そして……”正義の味方

”だよ」

言い放つと同時に装置を作動させ、仕掛けておいた爆薬を一斉に炸裂させる。激しい爆音が響き、立っていられないほどの振動が起こる。扉や壁を砕いて爆炎が溢れ出し、周囲を薙ぎ払う。生じた混乱に乗じて発動した投影宝具掃射で包囲網を斬り裂く。

状況把握できず、玉座で呆然とする当主の首を確実に刎ね飛ばすため、干将莫耶を投影して接敵する。

しかし、潜んでいたさらなる伏兵に阻まれ、包囲攻撃を受ける。焼かれ、砕かれ、切り裂かれる身体。　明滅する視界、激痛に灼熱する脳髄を捻じ伏せ、抜き出したキャレコとコンテンダーを振るう。銃火が閃き、的確に急所を撃ち砕かれた死体の山ができる。

「はぁ、げほっ……ユーブス、タクハイト――！！」

伏兵が盾になっている隙に退避したのだろう。すでに男の姿はない。

「あ――がぁ、ぎっ―」

ぎちりぎちりと鉄に貫かれ、裂かれていく筋肉と内臓。焼け付いた魔術回路と共に断絶していく神経。狂気的とも言える痛みが衛宮士郎の全てを壊していく。がちがちと震える腕で遠坂とルヴィアに頼み込んで作製された魔術薬を取り出す。痛覚を完全に麻痺させ、高濃度の魔力を補充し、身体能力のリミッターを強制的に外させる劇薬。

ごくり、と一息で飲み下す。極寒のように冷え切っていた体内で熱が広がり、傷の痛みも、体を書き換えていく剣化の痛みも消えてい

く。　補充された魔力が走り始め、スクラップ寸前の回路が猛り吼える。

アンプルを投げ捨て、懐に収めていた漆黒の小箱を取り出す。中に鎮座するのは一発の弾丸、衛宮切嗣が自らの肋骨から削り出し創造した『起源弾』と呼ばれる特殊な弾丸である。どれほど強大な力を持っていようと『魔術師』である限り、確実に、絶対的な死を以て葬り去る正真の魔弾。

過去の自分を象徴する魔術礼装と最後の魔弾を視界に収める度、彼は何度も深い絶望と後悔を反芻しただろう。それでも、捨て去ることなく手元に置き続けたのはきっと――

「安心しろよ、じいさん……あんたが出来なかったこと、俺が必ず果たしてみせる」

最後の起源弾を装填し、銃身を固定して撃鉄を上げる。そして……脳裏に浮かべる回路を呼び起こすための二十七の撃鉄と一つの宝具設計図。

「同調――開始」

壁に右手を当て、魔力を通して古城全体の構造を把握する。脳内に浮かぶ設計図から読み取った情報によるとこの先に逃げ道はない。奴が迎撃準備を整えた工房が存在するだけ。防御する必要はない……全ての力を攻撃へ回し、確実に、俺の全能力を以て絶殺する――！！

白銀の髪、灼けた赤銅の肌、鋼鉄の固さを孕んだ瞳。命を保ち続けているのが不思議なほど全身に傷が刻まれ、それでもなお揺らぐことを知らぬ背中。

聖骸布で織り上げられた真紅の長衣を翻し、右手に受け継いだ魔銃、ぼんやりと青白い光を纏う左手に鋼の凶器を構える姿。それは……『衛宮士郎』の果てにある錬鉄の英雄の相似形であり、衛宮切嗣の写し身。世界の不条理に戦いを挑み、勝利は出来ぬと思い知り、それでも足掻き続ける一人の尊い愚か者の姿。

だが、彼らとは決定的な差異がある。

全ては救えぬ、どれほど望んでも取り零す命がある。その叫びは心を抉り続け、進み続ける両脚を止める呪縛となる。されど……『正義の味方』としての生き様に間違いはないと青年は知っている。

救えなかった命は戻らずとも、その手で救った命が確かに存在する事を知っている。誰よりも衛宮士郎を理解し、深く愛した少女がそれを教えてくれたから。

故に、その姿は彼らと似ていようとも同一ではない。『衛宮士郎』として、何一つ恥ずべき所の無い、誇り高き唯一無二の姿。

「――投影、開始ッ！！」

疾走を開始すると同時に投影した古めかしい仕掛け短刀から経験技術を読み込み、いけすかない殺人貴が使う暗殺者の歩法を再現する。体勢を低く保ち、重力を物ともしない高速の三次元移動を以て敵を

幻惑する絶技。

身体能力や骨格の違いなどから本来の冴えを出せずとも、次々と襲いかかる致死の罠や迎撃専用の設置型魔術を躱すには充分。赤い弾丸と化して通路を疾駆する。そして、残った命を激しく燃やしながら切り札を発動させる。

火花を上げ落ちていく撃鉄、際限なく回転数を増していく魔術回路。ずたぼろに壊れかけ、あれほど痛みをもたらしていた回路が好調に唸りを上げる。

これより再現するは鈍色の大英雄が誇った最強の一撃、最期の一瞬まで己が主である純白の少女を守り続けた彼の持つ究極の一。

「――投影、装填――」

かつて弓兵が放った言葉が蘇る。

『――忘れるな。イメージするものは常に最強の自分だ。外敵など要らぬ。お前にとって戦う相手とは、自身のイメージに他ならない』

「……ああ、そうだな。俺達の、衛宮士郎の戦いは、いつだって――」

『自分』との戦いなのだから。

単なる武器の『投影』を超え、それに秘められた経験や技術を根こそぎ引き出し、この身体を以て完全再現する。これは衛宮士郎だからこそ到達し得る領域。

身に過ぎた魔術行使の負荷に耐え切れず、ブレーカーが落ちていくように次々と機能を止めていく身体。構うことなく、より精度を上げて工程を続ける。

創造の理念を鑑定し
基本となる骨子を想定し

古の大英雄が抱いた少女への想いを。

構成された材質を複製し
製作に及ぶ技術を模倣し

切嗣が抱いていたはずの少女への想いを。

成長に至る経験に共感し
蓄積された年月を再現し

泣き出しそうな顔で、それでも俺に協力してくれた二人の女の想いを。

あらゆる工程を凌駕し尽くし
ここに幻想を結び剣と成す――。

そして……少女自身から託された最期の願いを。

この身が抱え、背負った全てを込めてこの一撃を叩き込む。

急激な速度で侵食した剣化により、腕が脚が胸が肩が背中が、『内側』から串刺しにされた。飛び散る血液もそのままに走り続ける。

正面に見える固く閉ざされた扉に向かいキャレコの弾倉に詰められた全弾を叩き込み、弾切れになった銃を投げ捨てる。左手に具現化させた斧剣に疾駆の速度を乗せ、錠と蝶番を破壊された扉ごと結界を突破する。

「万策尽きて突撃か！愚か者が、死ね！！」

扉が突破された時に発動するよう仕掛けられた罠、ユーブスタクハイト自身が放った魔術が身体を貫く。

「がっ――ぁぁぁあああああ！！！！」

男へと照準を合わせ、右手に握った魔銃を開放する。撃ち出された最後の起源弾がユーブスタクハイトの生命を狩り取るべく、その心臓に向けて牙を剥く。

しかし、読まれていた射撃は完璧な強度を以て展開された障壁により阻まれる。

瞬間――

「ぎっ……あがっ！？」

切嗣が作成した起源弾が「魔弾」と称される真価を発揮する。彼がその身に宿していた二つの属性、「切断」と「結合」を着弾者に発現させる。その結果……奴の魔術回路は完全に変質し、完膚無きま

でに破壊し尽くされた。

障壁も消え、迎撃のために編み上げていた魔術も無効化され、回路と共に神経をずたずたにされた男に残るのは……どうしようもなく無力に立ち尽くす身体だけ。

――全工程投影完了――

身体に残る魔力が完全に底を尽いた瞬間、魔力が込められたイリヤの髪と宝石で作り上げた首飾りとブレスレットから高純度の魔力が注ぎ込まれる。

「消えろぉぉおおおおお！！！！」

――是、射殺す百頭――

イリヤが最期に残した魔力を対価にして神々や化物、あらゆる神秘が趨勢を誇った時代……あらゆる武勲と称号と伝説を欲しいままにし、幾星霜を経てなお語り継がれる大英雄ヘラクレスの神技が蘇った。

凄絶無比の斬撃が九閃。　酸素原子すら斬り裂くような剣閃は欠片一つの残存すら許さず、聖杯に取り憑かれた一族の当主ユーブスタクハイトを文字通り滅殺した。

さらにその威力は止まらず、効果範囲にあった全てを粉々に爆砕する。

ざらり、と斧剣が形を失って虚空へと溶け消えていく。身体から力が抜けていき、意識を失って瓦礫の上に崩れ落ちた。

「ぎっ……あっ、ああああ……」

目を覚まして最初に感じたのは圧倒的な冷たさ。　気を失っていたのはそう長い時間ではないようだが、薬の効果が切れ始めている。麻痺していた痛覚が戻るはずなのに、何も感じず、ただ凍えるような冷たさだけ感じる。

「そう、か」

状態を解析せずとも分かってしまった。　俺は、死に始めている。内蔵の半分以上が「剣化」によって潰され、神経のほとんどが破断。嗅覚、味覚が完全に壊れ、触覚と聴覚が半壊。左目は何も映さず、かろうじて右目が機能しているだけ。

「ルヴィアに、助け……られたな」

『シェロに死なれては執事にする野望が叶いませんから』と泣きそうな顔で笑った彼女が施してくれた身体改造のおかげで、ギリギリの所で瀬戸際で命を繋ぎ止めていられる。

決着はついた……このまま大人しくしていれば、僅かばかりでも生き長らえることができるだろう。だが、まだ後始末が残っている…。

「はっ……げほっ、はあっ……ぐっ、遠坂に、頼んで……もう一本作っておいて、正解だった…」

もはや痛みも感じず、鼓動すら止まる寸前の体を動かすべく……最

後のアンプルを取り出し、魔術薬を飲み下す。崩れ落ちそうになる膝を無理矢理立たせ、絶えようとする命に楔を打ち込み、ぎちぎちと軋む身体をひきずりながら歩き出す。

所々に空いた穴を通り、最短の距離で外まで辿り着く。

「さぁ、これで、最後だ……二人のとっておき、使わせてもらう。イリヤも、協力してくれ…」

腰に装着してあったタクティカルポーチの中から大粒の宝石を二つ取り出す。共に極上の質を誇り、封入された魔力も規格外の量である。それらを左手に握り込み、封印を開放。

さらに首飾りとブレスレットの残存魔力も開放する。

溢れ出した魔力を回路に流し込み、崩壊しかかった内部を、完全に壊しながら最大の禁呪を紡ぎだす。

「――Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ――」

我が身は剣となるべく生まれ落ちた。

「――Ｓｔｅｅｌ　ｉｓ　ｍｙ　ｂｏｄｙ　ａｎｄ　ｆｉｒｅ　ｉｓ　ｍｙ　ｂｌｏｏｄ――」

この身体は鋼鉄であり、流れる血潮は灼熱の焔。

「――Ｉ ｈａｖｅ ｃｒｅａｔｅｄ ｏｖｅｒ ａ ｔｈｏｕｓａｎｄ ｂｌａｄｅｓ――」

心身を剣として鍛え上げ、内なる世界に幾千もの刃を宿した。

「――Ｕｎａｗａｒｅ ｏｆ ｌｏｓｓ――」

敗北を知る事は無く

「――Ｎｏｒ ａｗａｒｅ ｏｆ ｇａｉｎ――」

勝利もまた知る事は無い。

「――Ｗｉｔｈ ｓｔｏｏｄ ｐａｉｎ ｔｏ ｃｒｅａｔｅ ｍａｎｙ ｗｅａｐｏｎｓ――」

されど……痛みに耐え、ただ刃を宿して戦い続ける。

「――Ｗａｉｔｉｎｇ ｆｏｒ ｏｎｅｓ ａｒｒｉｖａｌ――」

何者かの救いになれると確信するが故。

「――Ｉ ｈａｖｅ ｎｏ ｒｅｇｒｅｔｓ Ｔｈｉｓ ｉｓ ｔｈｅ ｏｎｌｙ ｐａｔｈ――」

後悔など存在せず、ただこの道を進み続ける。

「――Ｍｙ ｗｈｏｌｅ ｌｉｆｅ ｗａｓ Ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ

ｂｌａｄｅ　ｗｏｒｋｓ――」

我が命は無限の剣、我が生涯は全て、無尽の救済へと捧ぐ。

朗々と紡いだ詠唱の言葉が終わると同時に炎線が疾走し、境界を作り出す。膨大な魔力によって編まれた領域は俺の心を映し出し、世界を完璧に塗り替える。

黎明に似た赤い空と、果てなく続く大地。　何千、何万と乱立する剣は……墓標のようでありながら、全てが誇らしげな輝きを纏っている。

この世界に付けられた名は固有結界『無限の剣製』

衛宮士郎が持つ心のカタチであり、全てがあり、そして何も存在しない空虚な場所。

佇む俺の前には、二振りの剣が突き刺さっている。

人の高き理想に鍛えられ、星が生み出した、人の身では創り得ないだろう美しさを持つ剣。　銘はそれぞれ『約束された勝利の剣』と『勝利すべき黄金の剣』

今なお俺の心に刻み込まれ、燦然と輝きを放ち続ける『彼女』の心そのもの。

「俺に、力を貸してくれるのか――？」

応えるように二振りの剣が黄金色に輝く。そっと手を添え、ゆっくりと引き抜くと…身体の一部であるようにしっくりと馴染む。

いつかの森の中、『彼女』と共に剣を振った時の感覚が蘇る。あの時と同じように、身体に寄り添う温もりを感じた。目には見えずとも、『彼女』が一緒に剣を握っている。

「――あぁ、終わりにしよう。これで全てが終わる」

いくつもの破壊の痕が刻まれ、半壊しても威容を失わない古城を視界に収める。それが合図だったように、周囲の剣が中空へと浮かび上がり標的へと切っ先を向ける。

「貫け」

命令と共に殺到する宝具の嵐。絶対的な破壊の前に何もかもが穿たれ、撃ち崩され、形を失い、消えていく。

「――“約束された勝利の剣”」

「“勝利すべき黄金の剣”――」

真名を解放し、黄金の極光と化した二振りの聖剣。全てを薙ぎ払うように振り抜き、その軌跡に沿って放たれた光が千年に渡り存在し続けてきた妄執を消滅させた。

真っ白になった視界の中に走馬灯なのか、幻影なのか……今まで出会ってきた人の顔が浮かんでは消えていく。故郷を捨て、『正義の味方』として戦う日々に埋もれてしまっていた懐かしい顔もいる。

その誰もが優しい表情で俺を見つめる。

予感ではなく、確信した。俺は……確実に、この場所で死ぬ。

だが、何も後悔はしていない。イリヤの願いを果たし、切嗣が残しただろう悔いも果たした。自分が望み、誓いを立てた生き方に反することなく、真っ直ぐに走り抜いた。

もう二度と冬木で、あの屋敷で過ごした日々には戻れない。だけど、どうか、俺の死を悼んで泣かないでほしい……俺は、やり遂げたのだから。

ふと、柔らかな気配を感じた。　あらゆる感覚が壊れ、何も感じることはできないが自分が倒れ込んでいることだけは何とか理解できた。

誰かに抱き起こされ、その腕に抱えられながら頬を撫でられている。そんな気がしてきちんと言葉になっているか、声となって届いているか不安になりながら声帯を震わせてみる。

「だれ、か……そこに、いるのか？」

「――シロウ」

「お兄ちゃん――」

ほとんど聞こえなくなっているはずの耳にもはっきりと届いた声。それは、もう二度と聞くことが出来ないはずの二人の声だった。

「はっ……ははっ、こんな時に、二人と逢えるなんて……思わなかった」

『なぜ？』なんて問わない。　幻影でも、夢でも構わない。何が起こっているかなんて分からないが……きっと望むべくもない上等過ぎる最期だ。

「イリヤ……俺、お前との約束、ちゃんと果たせたか？」

「セイ、バー……俺は、お前に誇れる道を、真っ直ぐに走り抜けてこられたよな……？」

優しさに満ちた温かい声が聞こえる……涙に曇っても、透き通った響きが。壊れた感覚が戻ったのか……頬に落ちる、熱い雫を感じ取ることができた。その温度が鋼に覆われ、悲しみと絶望に耐え抜くために冷え切らせた心を癒していく。

「ええ、シロウ……貴方は――立派に戦い抜きました」

「ありがとう、お兄ちゃん……本当に、お疲れ、さま……」

その言葉は衛宮士郎の生涯を肯定する言葉。　この身に受けた傷も、飲み込んだ嘆きも、刻まれた絶望も、背負い込んだ悲しみも、抱き続けた理想も、ここに……全ては報われた。

一筋の涙が零れ、頬を流れ落ちていく。深く、穏やかな感情が身体を満たす。

「そうか……だから、あの時にじいさんは――満足そうに笑って逝ったんだ…」

「――――――ああ、安心した――――」

想像を絶する大規模な破壊の痕を癒すように、静かに雪が降り積もる。汚れない純白の柔らかな雪原に横たわる青年の亡骸。

全身に幾つもの深い傷、そこから無数に剣の刀身が突き出す。身に付けた紅の長衣は見る影もなくぼろぼろになり、流れ出た血に塗れている。

凄惨な死に様にも関わらず……血で汚れ、肌の所々が『鋼』に変化してしまったその顔には、見る者の心を打つ穏やかな微笑みが浮かんでいた。

静かに輝く銀糸の飾りと墓標のように突き立った拳銃だけが、今は亡き青年を見守る。

第十一話　リメイク版　ＬＡＳＴ　ＰＲＯＭＩＳＥ　Ｆａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇ

きちんと長編連載として書き直せば化けそうな文章……だと思う。

シリアスな死にネタが書きたい時期だったんです。

だって、そういうのだと士郎くん輝くんだもん…。

第十二話　リメイク版　狂乱のランサーズヘヴン　Ｆａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔ

ホロウのランサーズヘヴンを読み、妄想が加速した末に書いた過去の文章を気が向いたので書き直してみた。

ランサーの楽園は戻らず、今日も冬木の港はお祭り騒ぎです。

第十二話　リメイク版　狂乱のランサーズヘヴン　Ｆａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔ

「ああ……今日も、空が蒼いな…」

頭上に広がる蒼穹は雲ひとつなく澄み渡り、降り注ぐ陽光は心地良い柔らかさ。鼓膜を揺らす潮騒は安らぎを与え、肌を撫でていく海風はどこか優しげですらある。穏やかな昼下がり、静かに時が流れて行くはずの冬木の港は……盆暮れ正月魑魅魍魎、聖者の誕生日から全人類それぞれの誕生日、世界中のありとあらゆる祝祭日に宇宙創世の大爆発、天地開闢の瞬間までいっぺんに訪れたかのような混沌のお祭り騒ぎとなっていた。

「難しいはずがない。不可能なことでもない。なぜならこの装備は――あらゆる魚を釣り上げるために投影した釣り具装備ッ！！フィッシュフィッシュフィッシュフィィィィィッシュ！！！！！！！！」

キラキラと輝く素敵笑顔のまま頭の沸いたことを叫び、凄まじい勢いで魚を釣りまくる男。白髪に真紅のキャップを被り、黒や赤で染められた最高級品の釣り道具の数々を身に纏っている。あーもう、アレは何だろう……正直に言って理解できないし、理解したくもない。まして、アレが未来における『衛宮士郎』の可能性の一つであるだなんて…考えるだけで心が折れ砕けそうだ。

前回の装備ですら高級品、高性能な代物ばかりだった釣り道具が、今回はさらに次元が上のバカ高い物になっている。ちなみに、言うまでもないが全て投影魔術で作り上げた紛い物だ。どこで解析してきたのかほとんど市場に出回らず、コストや製作にかかる手間からお蔵入りになった変態的な釣り具品ばかり……しかも、その全てを

伝説、神話級の宝具を完全再現できるだけの精度で投影していやがる。

世界の守護者である英霊の誇りや威厳も消え去り、かつて『錬鉄の英霊』『鷹の瞳を持つ紅の弓兵』と呼ばれた男、アーチャーは……今や、ただ一人のアングラー。

「くくく……はーっはっはっはっ！！！！見よ、この完璧な装備の数々！世界の全てを手中に収めた英雄王たる我の財宝に不備など存在せん！！」

仲良しの子供たちに囲まれ、紅い釣りバカの変態最高級釣り竿にも負けない……いや、さらに神々しく輝く釣り竿を大量に展開して高らかに笑う男。彼の真名はギルガメッシュ。世界の全てを手に入れ、その力の大きさから英雄王と称されていた男である。陣取っている場所には数々の漫画、お菓子、食べ物や料理、これまた最高級の椅子やテーブル、ソファーにクッション、屋外用のバッテリー式テレビなどを置いている。そして、その頭上には…ふわふわと大きな絨毯が数枚浮かんでおり、降り注ぐ日差しを遮る屋根代わりとなっていた。

魔術を使って解析してみると、並べられた釣り竿は伝説や逸話に登場するような歴史ある代物だし、浮かんでいる絨毯は…あの有名な空飛ぶ絨毯とかの元になった物のようだ。あの金ぴか王…本当に、貴重な財宝となれば見境なく集めてたんだな…。というか、なんて使い方してるんだよ…。

「海風が寒くはないか？キャスター」

「はい。こうしていれば、むしろ暖かいくらいです…」

アーチャーやギルガメッシュのような派手さは無いものの、巌のような無表情で竿を握って淡々と釣り続けている細身の男。我らが穂群原学園の教諭、葛木宗一郎。その隣にぴったりと寄り添い、横顔を見つめて頬を赤らめるキャスター……いや、新妻キャス子と呼ぶべきか。

「これをこうして……こう投げればいいの？よーし……えいっ！！あれ？あんまり飛んでかない」

「イリヤ、貸してみて。ていっ」

「あはははっ！！すごーい！あんなに遠くまで飛んでった！！」

興味津津で釣り竿を握り、あれこれと楽しげに試行錯誤するイリヤ。妙に手慣れた様子で竿を操り、その膂力も有効に使って遥か遠くまで仕掛けを飛ばすリーゼリット。そんな二人の様子を心配そうに見つめつつ、自分もやってみたくて仕方がないといった様子のセラ。

「この魚は刺身に……こちらは塩焼きにした方が良さそうですね……むっ、こちらは照り焼きでしょうか…『つみれ』と言う物も素晴らしい味でしたが……どれが合うか……」

釣り上げられた魚を見つめ、どの魚をどんな調理法で食べようか品定めに余念がないセイバー。斬り合いの最中のような表情ではあるが…決して彼女が調理をするわけではないので、あまり褒められたものではない。

「これは……このようにすれば…ああっ！？」

握っている時に力を入れ過ぎたんだろう。『折れた』とか生易しいものではなく、粉々になった釣り竿だった物を前にオロオロするダメット……じゃなくてバゼット。

「アレは存在しない。私には何も見えない。だって今日はこんなにも良い天気なんですもの。おかしな光景なんて見えるはずがない」

『フィィィィッシュ！！』なんて再び叫ぶ紅い背中から必死に目を逸らし、あんなモノは存在していないと自己暗示をかけるのは遠坂。暗示をかけるのは結構なのだが、せめて手に握った宝石をしまってからの方が良いと思う。

「これはまた凄まじい光景ですね……」

「本当……すごいね、ライダー…。そのうち、冬木市以外の人とかも集まってきそう」

眼前に広がる混沌とした光景を見つめ、非常に珍しい唖然とした表情のライダー。同じく唖然とした表情を浮かべ、何やら不穏な言葉を呟く桜。頼むからそんなことを迂闊に言わないでくれ……実現しそうですごく怖い。

「もう、どうにでもしろよ…。金ぴかと赤バカが来んのは仕方なかったかもしれんが……なぜ、関係の無かったヤツらまで増えんだ…」

定位置だった場所すら奪い取られ、隅っこでうなだれながら竿を握るランサー。鮮やかな色彩だったはずのアロハシャツも、心なしか煤けて見えた。口から零れ落ちる言葉と共に、潮風に散っていった僅かな雫のことは見なかったことにしようと思う。

その哀れなランサーの様子を見つめ、幸せそうに……本当に幸せそうに穏やかな微笑みを浮かべる銀髪のシスター。いや、シスターと呼ぶにはあまりにも禍々しいオーラを纏ったぎんのまおう。その名をカレン、カレン・オルテンシア。『本当、哀れな背中よね……まるで弱り切った野良犬みたい。いえ、駄犬ね』なんて小さく呟かれた言葉は、聞かなかった。うん、俺は何も聞こえなかった。

このように、現在の冬木の港では……聖杯戦争に関わった者たちが一堂に会して賑やかに釣りを楽しんでいるのだ。壮観と言えなくもないが、混沌としていると表現した方がより適切であると俺……衛宮士郎は考える。失われたランサーの楽園が戻る気配は欠片もなく、むしろ時を追うごとに騒がしくなっていく。

「うわー、すげーなギル！！このチョコすんげーうまい！もっと食べてもいいか！？」

「ギルー。このイスさーふかふかで気持ちいいね！うちのイスとは全然ちがうよ。めっちゃ金ぴかで豪華だしさ」

「また釣れたよ、ぎるぎるー。これで五匹目かな？すごいっしょー」

「なぁ早く読んでくれよーギル。マンガの続き読めねぇじゃん」

「ぎるっち、これお母さんがいつもお世話になってるお礼だってさー」

「はーっはっはっは！！相変わらず騒々しい雑種どもだ。そこらでわさわさ蠢いているミジンコの群れに迷惑であろう。楽しいのは分

かるが、少しは落ち着け。ジロウ、この逸品に目をつけて味が分かるとは…貴様も少しは出来るようになったな。鼻血を出しては事だ、加減して食べるがよい。イマヒサ、我が座るべき玉座に触れるのは不敬の極みだが、その言葉に免じて許してやる。ポテチの油で汚さぬよう座っておれ。ミミ、その働きは我の賞賛に値するぞ。我が財宝の担い手にふさわしい、存分に釣り続けるがよい。カンタ、我がまだ読んでおらんのだ……今しばらく待っていろ。今週号のジャ○プは読んでおいたからそっちで我慢しておけ。コウタの母からか……うむ、献上を許そう。王の舌に合うとは思えぬが、貰っておいてやろう。そうだな…後で、我が見繕った食材セットを送ってやる。そう言えば、包丁が古くなって切れないと言っていたな…そちらも我の審美眼に適った物を送るか」

金ぴか組は相変わらず仲良いなぁ……というか、あんなに道具を揃えてここに住むつもりなんだろうか…？しかも、いつの間にか家族にまで認知されてやがる。子ギルならまだしも、あの状態で会ってるとは…お前は一体、どこに向かっているんだ英雄王…。

「ふっ…通算４８匹目フィッシュだ。どうした？英雄王。いたいけな子供たちを動員し、それだけの財宝を展開しなくては勝負もできんか？前回は引き分けたが、その幸運…何度も続くと思うのは慢心にも程があるぞ」

あの憎々しいしたり顔で挑発するアングラーエミヤ。人のこと言える立場かよ……その変態装備の数々、どうせ英霊の特性を活用しまくって不法侵入を繰り返し、解析しまくったんだろうが…。夜な夜な、アーチャーが家を抜け出してどっかに行ってると遠坂も言ってたし。

「ほぅ…フェイカーの分際で再び我に勝負を挑むか？贋作とは言えそれなりの物を用意しているようだな……よかろう、今度こそ完全に叩き潰してくれる」

「相も変わらず、救いようのない慢心だな……これ以上、言葉は必要ない。ありったけの財宝を出してこい、その全てを超えてやる。あー、あー、あー……うむ。いくぞ英雄王――――釣果の貯蔵は充分か」

「はっ、思い上がったな…雑種ぅ！！！！！」

「ちょっと待てぇぇぇぇ！！！！それは俺の台詞だぁぁぁ！！！！！」

俺の叫びは誰の反応も得られることなく虚空へと消えていき、後に残ったのは最高潮に盛り上がる二人の釣りバカ。もう……好きにしてくれ…。

あぁ……青空には腹立たしいほど素敵な笑顔で『楽しそうで羨ましいよ士郎！！僕も女の子に囲まれて右往左往してみたい！』なんて言ってやがる切嗣の顔が浮かんでるな。おまけに紐みたいなビキニパンツを着用し、イイ笑顔と暑苦しい筋肉を振りまいて泳ぐ言峰綺礼の姿も見える。幻と分かってるけど、この状況に疲れた俺の脳が生み出した幻と分かっているけど……それでも、精神的なダメージが大きい…。

「あぁ、宗一郎様……その凛々しい御姿、例え地獄に堕ちようとも忘れはしません…」

「お前だけを行かせはしない。お前が地獄に堕ちる時は、私も共に

堕ちよう」

「宗一郎様……」

「キャスター」

「あっ、宗一郎様……引いてるようですよ」

「構わん。今は、お前との話のほうが大切だ」

折れた心をさらに幻で痛めつけられながら空を眺めていると、聞こえてくるのは良い歳した二人の甘い囁き。個室で二人っきりなら、そのまま夫婦の営みにでも突入しそうな雰囲気だ。いや……開き直ってこのまま突入しかねないから恐ろしい。倫理の鬼と恐れられた葛木教諭はどこに消えてしまったんだろう…。あーもう、聞いてるこっちの頭が溶けていきそうな会話だ。

キャス子に葛木先生……幸せなのは分かるが、せめて家に帰るまで我慢してもらえないだろうか…。そもそも、なぜこんな所まで来てるんだ…。

「そりゃ」

「また釣れたよリズ！今度のも大きいね！」

「イリヤは釣れた？」

「んー、ちっちゃいのは釣れたけど…なんか、かわいそうになって逃がしちゃった。リズが釣ってるのを見てるだけで充分よ」

「イリヤは優しい。セラは釣らないの？」

「私は興味ありませんから。お嬢様がお怪我などされないか心配で付き添っているだけです」

「ふぅん……その割には興味深そうに釣り竿を触ってたみたいだけど？本当はセラも一緒にやりたいんでしょー。もう、本当に素直じゃないんだから」

「見てたんですか！？」

なんて健康的な仲の良さを見せているイリヤ、セラ、リズの三人娘。確かに、イリヤとリズが仕掛けを放り投げて遊んでいた時、誰も使っていない釣り竿を握って瞳を輝かせてたな。そーっと伸ばし、ゆらゆらと揺らしてはこらえ切れない笑みを浮かべている姿は…毅然とした印象の強い普段と違って可愛らしかった。

生温かい気持ちのまま賑やかに騒ぐ三人を眺めていると、その視線に気付いたセラが顔を真っ赤にしてこちらに近付いてくる。

「エミヤ様」

「ん？どうしたのさ？」

「お嬢様とリズに気付かれ、見られたのは百歩譲って良しとしましょう。しかし……貴方は論外です。『貴方は、何も、見なかった』そうですね？」

「ああ。セラが子供みたいに微笑みながら釣り竿をいじってた姿なんて見ていないぞ」

「誰かに言いましたら……分かっていますね？」

「了解だ」

本当なら、いつもやり込められている分のお返しをしたかったんだが…濃厚な殺意の宿った禍々しい光を放つ目で睨まれたら、大人しく降伏するしかないと思う。俺だって、命は惜しい。

大きな魚屋にも匹敵するんじゃないかと思うほど多種多様な魚の積み上がる場所。次から次へと釣り上げられる魚に釘付けの腹ぺこ王……ってセイバー、よだれ。よだれが垂れてるってば。魚ばかりを見つめていたその翡翠色の瞳が俺にも向けられ、視線が忙しなく行き来する。

魚、シロウ、魚、シロウ、魚、魚、シロウ、魚……そわそわとした姿、仕草から察するにどうやら空腹が限界に近付いてるみたいだ。あぁ…セイバーの心の声がはっきりと聞こえてくる…。

『シロウ、新鮮な魚があんなにもたくさん……いえ、決してお腹が空いたというわけではないです！！あの鮮度が失われないうちに美味しく調理すべきではないかと思っただけで……あと、その…シロウの料理が恋しくなってしまって…』

なんて声なき声が！！はむはむこくこくする姿、『美味しいです』と微笑む顔が見たくて仕方ない。うずうずと衝動が湧き上がってきた…。

「あの……シロウ…」

「任せてくれ。帰ったら、腕によりをかけて料理を作るからさ。楽しみにしてろよ」

「はい！！期待していますよシロウ！」

ぱぁっと花が咲くような笑顔で返事をしてくれるセイバー。今までささくれ立っていた心が癒されていく。和んだ気持ちでいると、恐る恐るといった様子でダメ……バゼットが近付いてきた。

「あの…し、士郎くん……その、ちょっと触っていたら釣り竿が折れてしまったんです。士郎くんは手先が器用ですから何とか直せないでしょうか…？」

「なぁ、バゼット。その背後に散らばる釣り竿らしき残骸の数々も、全部壊したのか？」

「ち、ちがっ、違いますっ！私が壊してしまったのはこの一本だけです！！」

相変わらず分かりやすい……どう見ても壊れ方が同じだから犯人はバゼットしかいないのに。竿を伸ばしていく途中で折り砕き、縮めていく途中で折り砕き、どのくらいしなるのか試してみて折り砕く。こんな感じで残骸の山を築いたんだろうな…。

「分かった、何とかしてみるから安心してくれ」

「本当ですか！？すみません、よろしくお願いします…」

男装の麗人といった見た目とは正反対のしょんぼり顔を見せるバゼット。そう言えば、いつだったか『本当は臆病で弱虫のくせに…。

無理だけは一人前だからな…あの女は…』とランサーが零していたっけ。最近、仕事をクビになったり、面接にも落ちてしまったようだし…今日くらいは楽しんでも罰は当たらないだろう。

「いいんだよ。困った時はお互い様だろ？あっちの方にランサーが居るから、釣りを教えてもらえばいいじゃないか」

「そっ、それは…！！でも……私は、彼に合わせる顔が…」

「いいから。一人ぼっちで寂しそうだったし、行けば喜ぶと思う」

「しかし……」

「ほらほら、釣り竿の修理に邪魔だから早く行ってくれ」

わたわたと慌てるバゼットの背中を押し、歩き出させる。不安げに、恥ずかしげに、そして、少しだけ嬉しげに歩くその背中を見ているうちに……なぜか、温かい気持ちと共に涙が滲んだ。

ギリギリと妙な音が聞こえてきたので視線を巡らせてみると、深紅の悪魔と化している憧れだった少女を見つけてしまった。空間すら歪んで見える怒気、右手に握り込まれてみしみしと軋む遠坂家魔術礼装たる色とりどりの魔石、貼り付けたような笑みに浮かび上がった血管、服の上からでも燦然とした輝きがうかがえる左腕の魔術刻印。

『ひゃっほう！！ふぃぃぃぃっしゅ！！！！』なんて騒いでる暇はないぞアーチャー……なだめるのは不可能だろうから、一刻も早く逃げるべきだと思う。あの目は本気だ。本気で、英霊を、完膚無きまでに殺すつもりだ。でも……遠坂にやられるなら、お前は本望だ

ろうな。散々、調子に乗って楽しい思いをしたんだからここらでお仕置きされちまえ。

「えーっと、こっちはお刺身にして…こっちは照り焼き…あっ、味噌煮も良さそう。ライダーはどう思う？」

「こちらの魚でしたら、すり身にして食べると美味しいらしいです。この前読んだ料理本に書いてありましたから確かな情報かと。」

「さすがライダー。『魚』って感じの料理ばかりだと飽きちゃうし、ハンバーグとかにも出来ないかな…。さすがにこれだけの量があると困っちゃうなぁ…」

「でしたら、ご近所さんに配ってみるのはどうでしょう？ライガの家に持っていって他の食材と交換するのも手だと思いますが」

「それ良い案かも！」

ライダーと桜はこの混沌としたお祭り騒ぎにもすっかり適応し、ライダーの魚知識や閃きを聞きながら献立を考えたり、大量の魚の処遇を話し合っている。こちらはこちらで楽しそうだ。

やり切れなさ、悲しさといった感情のどん底すら突き破り、これ以上ないほどに悲嘆の背中を見せているのはランサー。淀み切った雰囲気に、どう声をかけたら良いのか全く思い付けない。最初の頃よりもどんよりとして見えるのは……とても幸せそうなカレンの仕業か…。

バゼットは一歩遅かったらしく、ランサーの近くでおろおろと右往左往するばかり。いや、このあくまシスターが妨害したと考えるほ

うが自然だな…。

だんだんと陽も沈み始め、ここでの楽しい時間はお開きの頃合いだろう。続きは、家に帰って夕飯を食べながらということになるかな。空腹に耐え切れなくなったセイバーに暴れられても困るし。

最後にもう一度、夕焼けの下で賑やかに騒ぐ面々を見回す。誰も彼もが笑顔を浮かべるこの光景のなんと幸せなことか。どんなことがあっても忘れはしない想い出になるだろう。少しだけ、感傷的になってしまった気持ちを切り替え、大きく息を吸い込む。

「おーーい！！！！そろそろ陽も沈んできたし帰るぞー！！今日の夕飯は豪華にするからみんな期待しててくれ！！」

「先輩！私もお手伝いしますね！！」

「士郎……私も手伝うけど、少し遅くなるわ。あのバカに常識とか色々なカタチで教育し直さなきゃいけないから」

「やるのは一向に構わんが、物は壊さないでくれよ……」

「善処するわ」

楽しげな喧騒は未だ止まず、平穏な喜びに満たされた幸福な日常は巡り回っていく。

―Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ―

『間桐慎二』

魔術師と英霊が入り混じり、混沌としたお祭り騒ぎの港から少し離れた草むら。よっぽどの事情がない限り、めったに人の立ち入らない場所でうずくまる人影。

それは特徴のあるワカメ……ではなく、ウェーブのかかった髪の少年だった。膝を抱え、鼻をすすりながら座り込んでいるヘタレワカメ……立場的には間桐桜の兄となる間桐慎二である。

彼がなぜこんな場所で座り込んでいるのか？理由を知るためには数時間前の出来事を説明しなくてはならないだろう。

冬木の港で再び騒ぎが起きていることを聞きつけ、『主役である自分を差し置いて楽しそうなことするとは何事だ！！』と一通り憤る。その後、遅れて来た自分にかけられるのは歓迎の声、待ちわびた声であると信じて疑わず、意気揚々と港に向かった。しかし……待っていたのは徹底的な無視。

話しかけようと、わざと視界に入ろうと、ことごとく無視。桜ならば力づくで何とかできるだろうと考え、掴みかかろうとすれば全方向から視認不可能な速度で叩き込まれる打撃の嵐。ずたぼろになり、目に見えるほど濃厚な『さっさと帰らないとトドメを刺す』の気配に恐れをなしてここに落ち着いた。

とまぁ、こういう次第である。

「何でだよ……何で、あんなに、あからさまな無視をするんだよぉ……。完全に視界にも入ってたし、声も聞こえないはずないだろう

がぁ……」

声が震え始めている。ぷるぷるしている。ＭＮ５、マジで泣き出す５秒前だ。

士郎たちは撤収し、自宅で大盤振る舞いのドンチャン騒ぎをし、ある者は酔っ払って、ある者は騒ぎ疲れ、ある者は心地よい疲れに誘わるがまま、安らかな眠りに落ちていく。

結局…最後の最後まで誰にも気にかけられることはなく、深夜まで草むらで泣きはらした間桐慎二。後に、『夜な夜な男のすすり泣く声が聞こえる草むら』『泣きわめくワカメのお化けが現れる草むら』と噂され、冬木市の子供たちを恐怖させることになるのだが……それはまた別のお話。

―Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ　ｏｕｔ―

―Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ―

『佐々木小次郎』

夜の帳に包まれ、虫の鳴き声ひとつ聞こえない静寂が広がる柳洞寺の山門。そこに佇み、夜空を淡く照らし出す月を眺める侍装束の美青年。彼の名は佐々木小次郎、アサシンのサーヴァントである。

「――――ふむ、これは珍しい」

軽い足音を響かせ、近付いてきたのは彼のマスターである神代の大魔術師、キャスター。常に涼しげな表情を崩さない小次郎だが、よほど差し迫った事態でもない限りやって来るはずのない来訪に驚き

の表情を見せる。

「我が主殿が、こんな夜更けに何用かな？伴侶の居ない一人の寝床ほど冷たい物はなかろうに」

「うるさいわよアサシン。別に大した用じゃないわ……貴方の月見の肴に、坊やたちから貰ってきた料理とお酒を持ってきただけよ。せっかくの料理を残したままにしちゃ悪いでしょう」

「これはこれは……主殿にしては、ずいぶんと気の利くことだ。近々、矢か槍の雨でも降ってくるのではないだろうな」

「だから、うるさいと言っているでしょう！ここから離れられない貴方のために持ってきたのに気が変わった。そこで一人寂しく月でも見てなさいな」

「くっ、ははは っ！！いや、すまん冗談が過ぎてしまったようだ。このようなことは初めてだったからな…嬉しくてつい、調子に乗ってしまった。この通り、謝るからその差し入れを貰えないだろうか？」

「笑われたのは気に障るけど……今回は特別に咎めないでおくわ。さっさと受け取りなさい」

仲が良いのか悪いのか判断しかねるやり取りを経て、ようやくしかめ面のキャスターから差し入れを受け取る。離れ、小さくなっていく足音を聞きながら玲瓏たる侍は嬉しげに笑った。

「くっくっく、ずいぶんと可愛げが出てきたものだ。さて、思わぬ肴も手に入った。今宵はいつにも増して良い月夜だな」

元の静寂が戻ってきた山門。降り注ぐ月の光は、いつもよりも柔らかく、優しげだった。

―Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ　ｏｕｔ―

―Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ―

『バーサーカー』

目立つし、デカイし、威圧感ありすぎて邪魔！！という意見が多数を占め、少しばかりイリヤが拗ねたものの結局はアインツベルン城でお留守番。

「じゃーねー！！ちゃんと留守番してるんだよバーサーカー！」

「お土産は魚」

「では、城のほうをよろしくお願いします」

「■■■■――――」

こんなやり取りと共に主人と従者たちは出発していったのだが…衛宮家で酔い潰れたり、疲れて眠ったりして帰ってこなかったので、バーサーカーは翌日の夜までぽつんと古城の前で座り込んでいたとかいないとか。

「……」

―Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ　ｏｕｔ―

第十二話　リメイク版　狂乱のランサーズヘヴン　Ｆａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔ

はっちゃけた。

この一言に尽きると思う。

最近、文章を書くことから離れていたので割と苦労しました…。

でも、無事に書き上げられて良かったです。

第十三話　リメイク版　鋼の心、剣の生涯　Ｆａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔ（前

ヘブンズフィール編、鉄の心エンドを読んだあとにアフターストリー的な物を書きたくなって妄想した文章。

心を鉄に変え、剣の道を進み続けた少年は英雄へと成って果てる。

赤、紅、朱。

「――――――――――――」

視界に映る光景は何もかもが紅い。

大地を覆い尽くすのは無数の骸、かつては生命が宿り『ヒト』として生を謳歌していたそれらは、例外なく真っ赤な血に塗れて何重にも折り重なっている。火勢を弱めるどころか、貪欲に酸素を取り込んでさらに強大な火力をもって周囲を焼き尽くす焔。大地を満たしてもなお流れ続ける血に染められたのか、蒼いはずの空も背筋が凍るような朱に色彩を変えて広がる。

ただの肉塊と化した数えきれない骸に幾本も突き刺さり、鮮血を纏って鈍い輝きを放つのは剣。数えることすら馬鹿らしくなる本数、認識の限界を超えるそれらは、正しく『無限の剣』だった。

何度、こんな光景を目にしてきただろう。

何度、こんな光景を生み出してきただろう。

『多数を救うために少数を切り捨てる』

それは正しい『正義の味方』の在り方だった。大切なのは救える命の数、重要なのは冷徹な合理性。救済に感情は必要なく、揺れ続ける天秤のより重い方を選択し続けるだけ。

もうはっきりと思い出すこともできない遠い昔、あの冷たい雨が降りしきる冬の夜に、俺はこの道を選び取った。

全てを救い上げ、悪と不幸を駆逐して、分け隔てなく平等に平和と幸福を与える存在。そんなモノを夢見ていては、救えたはずの命を取り零すことになる。そう、思い知らされた。

だからこそ――『父』が最期に浮かべた微笑みに誓ったはずの理想を永遠に捨て去り、守ると決めたはずの少女を殺し、心を鋼に変えた。

役目を果たして薄れていく意識の中で思い出す。

そう――俺は、あの夜、あの瞬間から、終わることが無い罰を受け続けると決めたのだ――――。

■■■を見捨てた。自ら望んだわけではない過酷でおぞましい運命に翻弄され、その果てに深い闇へと堕ちた少女を俺は切り捨てた。大多数の誰かと、本当は守り抜きたかった一人……二つを天秤にかけ、心を殺してより多く救える命を選択した。

あの選択は間違っていなかった。理想と感傷に拘泥して取り返しのつかない過ちを犯す、それを良しとしなかった選択に後悔はない。納得はできずとも、幼い頃から心の何処かで認めていた『正義の味方』の在り方、それを選んだだけの話。

だと言うのに……心が裂け、体が折れる。正しい道を選び取ったはずなのに……切り捨てた■■■の存在、裏切った自身の理想がこん

なにも重い。

切嗣もこの思いを抱えて戦い続けていたのだろうか。戦う度に重さを増していく十字架を抱えて、死んでしまいたくなる心を奮い立たせて、ただひたすらに。

きっと、切嗣は俺に自分と同じ道を歩んでほしくなかった。だけど、俺が『正義の味方』のユメを受け継ぐと決め、切嗣もそれを認めた時は、目指すべき理想を見失うことなく進んでほしいと願っていたと思う。

それも、今や二度と取り戻せなくなった。どれほどの絶望を抱えようと、どれほどの悲嘆を刻まれようと、崩れ落ちて止まる事などできない。いや、許される筈がない。

漏れる弱音を噛み砕け。挫けるなら生身の体は必要無い。　より硬く、より強く。

そう……『体は剣で出来ている』

ふと浮かんだ一節。それは、まるで嵌まるべき場所を見つけたパズルのピースのように、機械仕掛けが動き出すための歯車がぴたりと噛み合うように、心へ刻み込まれた。そして、何処か遠くの方で、がちり、と撃鉄の上がる音が聞こえた気がした。

容易に裂けてしまう脆弱な心は、曇ることなく、何にも染まることがない硝子に変えろ。より多くの命を守るため、切り捨てた命の重さに血潮が冷えてしまうなら……初めから温度など持たぬ鉄に。

個人としての『衛宮士郎』など必要ない。そんなモノに囚われて道を間違えてしまうなら、それには何の存在価値も無いのだから。個

人であることを捨て、カラになったこの身体が成すべきことはただ一つ。争いの火を消し、より多く命を救うための自動機構……正義の味方『エミヤシロウ』になることのみ。

燃え盛る火炎の中、煉獄のような世界の中で多くの人を見捨て一人助かった。　望まぬ殺人に手を染め、泣きながら化物へ成り果てた大切な少女を手に掛けた。

償い切れるはずもない大きな罪を背負い、全てを救うと誓った原初の想いすら裏切った俺に……残された唯一の道。

あとは……ただ、ひたすら進むだけ。死ぬまで、そして、恐らくは死んだ後も何処までも進み続ける。

最初の数年は力の研鑽に必死で努めた。　より確実に最速を以て最大の救済を行うために。身体や精神への負担は後回し、高い効率と効果だけを追求した方法で鍛え上げる。

眠ったままの魔術回路を開拓、この身に宿るただ一つの異能を把握、投影魔術の精度上昇と応用、強化魔術の修練、その他、様々な戦闘訓練。

骨が砕け、肉が千切れ、神経が破断し、血が噴き出す日々。それは常人から見れば狂気の沙汰、壊れ切った狂人の行いそのものだろう。

許容範囲を遙かに超えた魔術行使は大きすぎる反動を生み出し、肌が灼けて変色し、髪と瞳の色が抜け落ちて白色へと化す。だが……俺の何を失おうと構いはしない。あらゆる方法を用いて、一切の容

赦なく『エミヤシロウ』としての性能を叩き上げていく。

その頃から……俺は鏡を見ることを止めた。大きく伸びていく身長と共に『アイツ』と瓜二つになっていく自分を見たくなかった。そして、聖杯戦争で邂逅した『アイツ』が平行世界の自分であるとようやく気付いたから。

自分の手の届く範囲で施せる研鑽や手段の限界が見えてきた頃……俺は、『正義の味方』として闘争の中に飛び込むと決めた。

幾度となく俺を止めようとし、時には涙まで流したルビーのような輝きを放つ少女。それでも止まらなかった俺を見限ったはずの彼女が、出発の直前にやって来たのには少しだけ驚いたが。

何もかもを押し殺した無表情のまま、無言で手渡された箱に入っていた物。防御力よりも、魔術的な守りと機動性に重きを置いた漆黒の革鎧。そして、それと対になるように魔術耐性を高めるマルティーンの聖骸布で仕立てられた長衣。紅の弓兵が纏っていた戦装束と全く同じ魔術礼装。

何も言葉を交わすことなく、彼女に、故郷の人々に、そして穏やかな日常に背を向けた。

――誰かを救え――死に瀕する人々を救え――苦しみに嘆く人々を救え――救え、救え、救え――

それは崇高な理想だった。誰もが祈る尊き願いだった。しかし、後悔や絶望に追われ、ただ強迫的に救済を続ける様は『異形』と呼ぶ

にふさわしい。愚かで、無様で、救いようのない化物の姿。

「投影、開始」

陰陽が刻まれた夫婦剣を創り出し、死を運ぶ存在を切り裂いた。命を救った礼をされ、別の人間には『人殺し』と蔑まれた。

「全投影連続層写」

無数の投影宝具を用いて苦しみをもたらす存在を貫いた。たくさんの人々の命を救った礼をされ、もっと多くの人間から『化物』と恐れられた。

「―Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ―　（我が骨子は捻れ狂う）」

歪み捻じれた螺旋剣を『矢』として悪と呼ばれる存在を撃ち抜いた。そこに感謝など微塵も無く、容赦なく排斥された。時には裏切られ、『味方』だったはずの人々に襲われた。

いつしか、俺に浴びせられるのはありとあらゆる悪意だけになり、それでも俺は戦場に向かい続けた。深紅の聖骸布を翻し、無限の剣を伴い、傷と絶望に塗れ、ただひたすら救うため闘争の中に身を置く。だが、それでも構わなかった。これが、此処だけが、■■■を殺した俺の存在できる場所であり、消えることは決して許されない。

――体は剣で出来ている――

この身体全ては救済のための道具であり、武器。目的が達成される

ならばどれほど傷つこうと関係は無い。腕が千切れ飛んで義手に変え、脚が斬り落とされたから義足を付けた。重傷を負っても動けるように身体のほとんどに魔術による改造を施した。

――血潮は鉄で、心は硝子――

『ヒト』としての機能をほとんど失い、戦闘機械としての機能だけに特化していく。そんな醜悪な姿に成り果てても、歪みきった理想を貫くしか道は無い。

――幾たびの戦場を越えて不敗――

何度となく戦場に身を投じた。絶望的な戦力差、圧倒的な虐殺、地獄のような光景の中でひとつでも多く命を拾い上げるために戦う。

――ただ一度の敗走はなく――

俺の背後に存在する命のため、俺が倒れることは許されない。どれほどの苦痛を与えられようとも不動のまま立ち塞がり続ける

――ただ一度の理解もされない――

誰に理解されずとも良い。重要なのは一つでも多く命を救うことだけ。

――彼の者は常に独り――

孤独を纏い、必要とされずとも救済の呼び声があればそこに駆ける。

――剣の丘で勝利に酔う――

幾つもの亡骸が転がり、無数の剣が突き立ち並ぶ戦場跡。自分以外の命が絶え果てた場所で報われない勝利を重ねた。

――故に、その生涯に意味はなく――

精神も身体も磨耗し、跡形も無く壊れ切っても戦う。生涯に意味を求めることなく、ただ『誰か』のために剣を握り続ける。

――その体はきっと剣で出来ていた――

重すぎる十字架を背負った俺に……歩める道はこれだけだから。

何重にも塗り重ねられた血の色、そんな濁りきった紅に染まる虚空。ぎちり、ぎちりと不気味に軋みながら、それでも止まることなく回る鈍色の歯車。

どこまでも広がるのは荒涼とした赤黒い大地、そこに突き刺さり、連なる無数の剣。どの剣も歴史に名を残し、宝具として強大な力を誇る物ばかり。

生命の息吹など欠片も存在せず、人間らしさなど塵芥も介在しない虚ろなる錬鉄場。

固有結界”無限の剣製”

『エミヤシロウ』に備えられた最大にして、たった一つの武装。術者の心象風景で世界を侵食し、新たな『世界』へと染め変える異能。心をカタチにして矛と為す力。

創造者の意思に従って無限の剣群は救済の障害を何もかも破壊する。
慈悲も容赦も断末摩を上げることすらも許さず、徹底的に消し飛ばす。

やがて……『エミヤシロウ』は歴史に名を残す英雄と讃えられ、最悪最低の悪魔と蔑まれる。

そして、最期の戦場。大きな、本当に大きな災厄が起こり、誰も彼もが死ぬ運命だった。そこに居合わせた命ある存在は、例外なく死に尽くす筈だった。

左腕として稼働していた義手は跡形もなく吹き飛び、右腕はずたずたに引き裂かれて機能しない。義足の右脚は壊れ、左膝から下の機能を果たしていた義足は砕かれた。胴体や背中には複数の凶器が突き刺さり、流れ出す血は止め処ない。左眼は潰れ、涙のように血を零す。額からの流血が入ったのか、残された右眼もぼんやりと霞んでいる。

分かってる、分かってるさ。俺には……死後の自由すら存在しない。何度も、何度も、数え切れないほどに重ねてきた罪は、こんなものじゃ贖えない。

第三者が居るならば、まるで跪いているように見えるだろう姿で空を仰ぐ。重苦しく曇った空が、原初の記憶にある風景と重なる。これは決定された終末にして始まり。

引き金となる言葉を紡ぐ。

「契約しよう。我が死後を預ける。その報酬を、ここに貰い受けた

い」

大罪を犯し続けた愚か者は輪廻の輪から外れ、『英霊』という名の鎖に繋がれた。

死ぬことも、消えることも無い存在として、俺は、永遠に地獄を見続ける――。

第十三話　リメイク版　鋼の心、剣の生涯　Ｆａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔ（後

にゃりにゃりのシリアス短編です。

書き始めた頃の短編を書き直した文章なので、割と思い出深い。

第十四話　リメイク版　剣と宝石　Ｆａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔ（前書き）

士郎くんと凛ちゃんを主軸に置いたシリアス物を書きたくなり、３０分くらい考えて練ったストーリーを文章にしてみたのが原文。

それがあまりにもボロボロだったので数ヵ月後、持てる力を振り絞ってリメイクしたのが今回の文章。

第十四話　リメイク版　剣と宝石　Ｆａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔ

「いつまで、かくれんぼをしているつもりなのかしら？」

凛、と女性の声が静まり返った廃墟の街の空気を揺らした。その声を何かに例えるとしたなら、『宝石のよう』と言うのが最もふさわしい、そんな硬くも優美な声だった。

「こそこそするのは性に合わないし、時間の無駄だからこうやって堂々と立っててあげてるのに……仕掛けてもこないで覗き見とは、化物の割には随分と慎ましいのね。あぁ……普通に暮らしている人間が相手じゃないと、御自慢の力を振るえないということ？」

水面を揺らす細波のように、緩やかなウェーブのかかった艶やかな黒髪が風に靡く。腕と背中、胸部のみを覆って鳩尾から腰にかけて大きく開いた上半身と、腰の部分の金具で留められ脚の動きを阻害しないよう背部のみ膝下辺りまで布が垂らされた下半身、少し特殊な意匠が施された真紅の装束を纏っている。その下は黒のミニスカートと二―ソックス、胴体と脛だけに当てられた白で複雑な紋様が刻まれた漆黒の軽金装甲。どれもが身体のラインにぴたりと沿う仕立てになっており、勇壮でありながらどこか煽情的な印象を与える。

「同じ『裏側』に属していると分かれば、女一人を相手にするのも慎重に慎重を重ねるというわけ？武器も持たない無手の状態なのに、随分と高く買ってくれてるのね。その情けないお眼鏡に適ったとは、光栄すぎて泣けてくるわ」

嘲笑の表情を浮かべ、姿の見えない敵を挑発し続けるその姿の中で一際異質な物があった。それは、女性の右腕全体を覆う剣の刀身を

幾重にも重ね合わせたような異形の手甲。傍から見れば、右腕そのものが一振りの剣のようにも見ることが出来るだろう。

「さぁ……かかってきなさいな、『不死』なんてくだらない代物に魅せられた哀れな愚か者。数少ないけど、生き残りの救助に間に合ったのは喜ばしいわ……だけどね、久々に、我慢ができないくらい、頭にきてんのよ。アンタが、あの時と似たような奴だからかもね」

その言葉が引き金であったかのように、憤怒に顔を歪ませながらヒトにあらざる姿となった化物が飛び出す。長剣をも遙かに超える長さの鉤爪を出し、カタチも残らぬほどに切り刻もうとする殺意を漲らせて、女性に向けて疾駆する。人間ならばどんなに速くとも数秒はかかるだろう距離を瞬く間にゼロへ近付ける姿、視認することさえ困難な速度を、女性は、確実に捉えていた。

「――『投影、開始』――」

紡がれた声音に呼応して手甲は青白い火花を上げ、それが女性の周囲を奔った瞬間、虚空から滲み出すように一振りの剣が現れ、右手の中に収まる。それは、何をもってしてもその輝きを曇らせる事は敵わない黄金と紺碧に彩られた聖なる剣。歴史の中に名を残し、今なお人々の心に高き理想の具現として在り続ける至高の武器。刻み込まれた銘は『約束された勝利の剣』。数々の雄々しい伝説を打ち立て、誇り高き騎士王として名を馳せた英雄の象徴。数えきれぬほどの重責と後悔を一身に背負い、それでも戦い抜いた、ある少女の気高き理想（ユメ）の象徴。

「Ｖｅｒｐｉｓｓ　Ｄｉｃｈ」

化物の疾駆を遙かに超える速度で放たれた一筋の斬撃。黎明の光を

反射して煌めいた一撃は、文字通りの閃光となってその身体を両断した。絶命して吹き飛ぶ化物。凄まじい剣速
によって生み出された大気の乱れが遠雷のような音を響かせ、戦いの終わりを告げる。血臭に淀んだ空気を吹き払うかのように風が強くなった。

「――――そう言えば、士郎が逝った日もこんな朝焼けだったわね。」

鮮血の紅にも似た朝焼けが空と瓦礫の山と化した街を染め、その中央に佇む。風に真紅の戦装束と長い黒髪を揺らし、小さく呟きながら遠い記憶を辿るように女性は目を細めた。

「ほら、しっかりしなさい！！アンタはこんなとこで死ぬ奴じゃないでしょう――！！」

ずたずたに切り裂かれ、所々が焼け焦げた赤いコートを羽織る妙齢の女性が叫ぶ。流れ落ちた自身の血や返り血に汚れ、それでもなお失われない金剛石の強さと輝きを持つ美貌。

「――っぐ、ごほっ――とおさか」

その細い肩に支えられ血を吐きながら歩く銀髪の青年。身体の至る所に深い傷が刻まれ、一歩ごとに鮮血が零れ続ける。流れた血は彼が纏う真紅の衣装に吸い込まれ、その色彩を不吉な深紅へと染め変えていった。

左手で押さえる腹部からの出血がとりわけ酷く、刻々と白さを増していく顔にはくっきりと死相が浮かんでいる。

「『俺を置いて先に行け』なんて言ったら私がこの手で殺してやるからね！！いいから黙ってなさい！！」

背中に触れる男の胸が言葉を放つために息を吸い込もうと動いたのを感じ、雰囲気からその口が何を語ろうとしているのかを察知して、女は声を張り上げてそれを遮った。そして、少しでも距離を稼ぐために必死で昏い森の中を走り続ける。

その時、月明かりさえ届かない暗闇を裂いて数本の銀閃がその背中を貫こうと撃ち込まれた。

「――っち！！」

女の左手から振り向き様に放たれたガンドの散弾でそれらを弾落するが、さらに倍以上の銀閃が飛来する。激しく交錯する漆黒と銀の弾幕だが、ひとつに内包された威力が勝る銀色の弾丸が均衡を崩し、二人の全身を貫こうと襲いかかる。

「――――投影、開始」

確実に二人の命を奪うはずだった凶器の雨は……鋼の声と共に生み出された流麗な太刀筋によってことごとく弾き落とされた。

その太刀筋を生み出したのは女に抱えられていた、瀕死の重傷を負った男。

口端からどす黒い血を流し、血色を失っても瞳はなお強く硬い意志の光を宿している。虚空から創り出された双剣を握り、不動の構えを取るその姿はまさに一振りの剣。

「ほう、それほどの手傷を負ってそこまで動けるのか。それに、君の魔術は非常に興味深い。死徒となり時間も充分にある……私の求めるモノとは関係ないが、戯れに研究してみるのも良い」

「――――――」

「後ろの女は稀に見る玉石……たっぷりと楽しめそうだな。くくっ、研究材料に玩具がまとめて手に入るとは今宵の私は運が良い」

圧倒的な上位者である化物は優越感と嗜虐心、欲望をむき出しに怖気を振るわせる声で嗤う。

「――凛」

血に濡れ、死に瀕してもなお折れない鋼の背中から優しい声が響く。ただ一言で女は知った――目前の男は、命を燃やし尽くして自分を守り通すつもりなのだと。

「し――ろう――」

「五秒でいい、時間を稼いでくれ」

その言葉が引き金となり、頷く間もなく女は『魔弾』を放つ『銃』となる。懐や袖口、腰や足に巻かれたベルトから次々と宝石を抜き放ち、それらに内包された魔力を解放して夜闇を消し飛ばす極光を

生み出す。

どれもが想像を絶する破壊力を発揮し、周囲を荒れ地へと変えていくが――

「はっ、ははははは！！！！何処を狙っている！？もっとよく狙わないと当たらねば意味が無いだろう？さぁ、悪あがきが尽きた瞬間が幕引きだ」

化物はそのことごとくを避けていく。直撃と余波を避けるため反撃には移れないが、化物と化した男は感付いていた。そう、女の攻撃には先が無いと。

『銃』を撃つには『弾丸』が必要である。これは覆しようのない常識であり、自明の理だと言える。ならば、逆もまた然りだろう。どのような『弾丸』もいずれ尽き、放つモノがなければ『銃』は意味を為さなくなる。

女が『銃』であり、破壊を生み出す『魔弾』が有限の宝石ならば――

「――っく」

急激な魔力消費で蒼白になった顔に苦渋を滲ませる。無情にも、身体中に仕込んでおいた女の攻撃の手段である宝石が尽きたのだ。

「どうやら持っているカードを出し尽くしてしまったようだね？ふむ、そろそろ夜明けが近い……楽しい遊びもこれまでにしようか」

荒い呼吸を繰り返し、少しずつ絶望に染まっていく女の顔を眺め化物の笑みが深くなる。粘つくような声はさらに愉快げに響き、仰々

しい仕草で女へ向けて歩を進める。

「確かに……『私』は持っているカードを出し尽くしたわ。だけど――『私たち』の切り札ならまだ残ってるッ！！」

その激しい声に応えるよう何本もの『剣』が虚空を切り裂き、化物の身体を貫いた。

「がっ――あああぁぁぁぁああ！？」

「こういう言葉を聞いたことはないか？『切り札は最後まで取っておくものだ』ってやつなんだが」

混乱と激痛から発せられる悲鳴を塗りつぶすように、皮肉と嘲笑が入り混じった声が響き……さらなる神秘を纏った四本の剣が化物の四肢を地面ごと撃ち抜く。

己を地面に縫い止める宝具、別の『世界』へと切り替わろうとする周囲の気配、それらの異常に痛みと驚愕にかろうじて人間としてのカタチを残していた顔が凍りついていく。

瞬間――紅炎が『世界』を燃やし尽くし、男のための『世界』を創造した。

―Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ―

「し――ろう――」

最期になるだろう彼女の声を耳に宿し、目を閉ざして己の内に埋没

する。遠坂が『ヤツ』を寄せ付けず、時間を稼げるのはどんなに長くても五秒が限界だろう。

時間を稼ぐために遠坂は手持ちの宝石を全て使うだろう。満身創痍の俺たちに残された唯一の切り札は、俺の持つ固有結界『無限の剣製』のみ。

しかし、発動のためには長い詠唱と大きな魔力が必要である。遠坂が作り出す時間と、俺に残された魔力ではとてもじゃないが間に合わない。足止めに全力を注いでいる状態の遠坂じゃ、俺へのバックアップに回す魔力も残っていない。

だが、全ての手段が潰えているかと言われれば、それに対しては『否』と答えることが出来る。『足りないならば必要な分を違う所から持ってくる』のが魔術師の基本であるならば――

「投影――暴走（トレース・オーバーロード）」

発動の後に俺の命を身体が完全に壊れることを是とするならば、どんなに疲弊した状態、詠唱時間も確保できない状況でも『無限の剣製』を一瞬で発動させることが出来るオリジナルスペル。文字通り、衛宮士郎に残された最後の手段。

肉体と神経の全てを回路に、生命維持に必要な全てを魔力に変えて『世界』を染め変える異能を顕現させる。魔術を使うために俺の身体に備わっていた回路は全部で二十七……だが、本来、俺に許されていた『心をカタチにする』ことだけに全力を注ぐなら、この血肉全てが『道』となる。

「ぎっ――――あ、があああぁぁぁぁああああああ！！！！！

！！！」

本来通るべきではない場所を魔力が引き裂き、『回路』としていく。本来削ってはいけない場所を強制的に魔力へと変換する。その凄絶な激痛が心を壊す。

神経を引き抜き金鑢で削られ、肉の繊維を一本ずつ剥がされていくような絶望の痛みが一瞬の時間を永遠へと引き延ばす。

僅か一秒が永劫に続く責め苦にも等しく、舌を噛み切って楽になろうとする精神を必死に捻じ伏せる。

そして――踏むべき過程の全てを取り払い、内面世界と現実が繋がった。

―Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ　ｏｕｔ―

純粋であるがゆえに、見る者に虚ろな印象を与える紅い空。

惑わせるモノが一切なく、ただ寂寥とした広大な荒れ地がどこまでも続く。

そして……そこに突き立ち、地平の彼方まで整然と並ぶ数え切れない剣の群れ。

中心に佇むのはこの『世界』の主である尊い理想を掲げた英雄。

女はこの光景を何度か目にしてきた。

その度に涙を零し、男に『もう戦わなくても良い』と告げる。

だが、男はただ優しく『これが俺のやりたい事で、望んだ生き方なのだから』と笑って、死ぬ運命を背負った人々を救うために戦い続けた。

そして今、彼は自分を守るために命を懸ける。

全身に刻み込まれていた深い傷は『内側』から飛び出した『剣』によって塞がれ、僅かに残っていた無傷の場所は同じ『剣』で串刺しになっている。それは二目と見られぬ悲惨な有様……恐らく、この戦いが終われば永遠に失われる姿。

しかし、女は涙を流しながらその背中を記憶に焼きつける。

悲しすぎる鋼の生涯を送り、死後もけっして安らぐことはない錬鉄の弓兵……かつて共に戦ったあの男の背中と生き様を見届けたように。

ただ……『彼』の時とは違い、この背中はこれまで共に生き、戦い続けてきた背中。自分の愛した唯一の男、愛する者のために死のうとする男の姿。

「――――――っ」

何かを告げようと開いた口は声を発することはなく、力尽きるように閉じられた。溢れ出る涙に視界を奪われ、目を閉じた瞬間に響く声。

「凛」

そっと、その頬に触れる指は冷たい鋼の温度。幾度となく触れ合ってきた元の温かく、優しい温度を取り戻すことは決して無い。

「目を――開いてくれないか？」

促す声に瞼を開くと、血だらけになってはいるが今でも心の底から愛している男の顔が目前にある。そこに浮かぶのは穏やかな笑み。朝焼けに消えていった弓兵と同じ、満ち足りた優しい笑顔。

「大丈夫だよ、遠坂――お前は必ず守り抜く。待っててくれ、すぐに戻ってくる」

ぎしり、と鋼の擦れ合う音を響かせて、男は女の唇に自分の唇を重ねる。

「――――ばか士郎。こんな時に――本当にアンタってやつは――――！！」

泣き顔を真っ赤にする女の顔を視界に収め、男は歩き始めた。

「あんな最悪の嗜好してるヤツなんか欠片も残さず消し飛ばしてきちゃいなさい！！そして、そして――ちゃんと私の所に戻ってきなさいよ！！」

その背中に叩き付けるような言葉が放たれる。

「――あぁ、任せてくれ。それじゃ……行ってくる」

心底嬉しそうに男は笑い、傍らに刺さっていた剣を両手に握って引

き抜く。

振り返ったその横顔に笑みは無く、誇り高き理想の体現者『正義の味方』としての表情だけが残った。

その顔は――女がまだ『少女』であった頃、『少年』だった彼に理由もなく惹かれた、いつかの夕焼けに染まる横顔と似ていた。

人間の身体から聞こえるはずのない金属の擦れ合う音を響かせ、深紅の聖骸布を翻して男は走りだす。その疾駆に追随するのは古今東西の伝説、神話、伝承に描かれる最高純度の神秘を纏った『剣』の群れ。

男の魔力と想像によって生み出された『贋作』である――しかし、創造に至る全ての過程を再現しつくされ、威風堂々と輝きを放つあの『剣』たちを誰が『贋作』と笑えよう。

「もっと一緒に居たかったんだけどな――――最期にあんな事されて、あんな顔されちゃ――未練しか残らないじゃない――――」

空気を震わせる剣戟の余波も、炸裂する魔力の暴風も女に届くことはない。

『何があっても守り抜く』と決めた男の心がそうしたのか……彼女の周囲は幾重にも『剣』によって囲まれ、一種の結界と化していた。

「こんなことまでしちゃって――本当にバカなんだから」

―Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ２―

「行けッ！！」

自ら四肢を切断して脱出、復元呪詛をもって完全な状態を取り戻そうとしている『ヤツ』に向かって一斉射撃を加える。

「固有結界に宝具……何なのだ貴様は――ッ！？」

全能力を回避に費やし宝具の直撃を避け続ける。いくら強力な死徒であろうとこれだけの宝具を当てられれば再生の暇もなく四散は免れない。

『衛宮士郎』の世界である此処に存在する剣群は俺の意思で自由に動かせる。四方八方から射撃を加え、防御と回避に気を取られたその間隙を利用すれば――

「ぐぶっ！？」

左腕を斬り飛ばし、胴体を切断するほどに深く薙ぎ払いを食らわせる事も可能になる。

並みの死徒なら数度殺しても有り余る攻撃をヤツは耐え抜く。魔剣や聖剣の効果もあり、その再生速度は格段に低下しているが――それでも俺に反撃を加えてくる。

「しゃあああああ！！！！！！」

「――っぐ」

剣戟の隙間を縫うように放たれた連撃を剣でいなし、鋼と化した右

腕も使って防ぎきった。

「はあああぁぁぁぁあああ！！！！」

右脚を貫く代わりに俺の右腕が砕かれる。左脚を斬り落とし、鋼となった胴体をぶち抜かれた。腹部を貫通しているヤツの腕を叩き斬り、上空で待機させていた宝具の掃射で磔にする。

「きさっ――わた、しをコロせるとでも――」

ぎちぎちと再生を続け剣山から抜け出ようとしたその首を両断し、さらに呼び出した剣で穿つ。

「欠片ひとつ残さずに消し飛ばせば再生もできまい――“壊れた幻想”」

そして……神秘を崩壊させ、炸裂へと導く最後の言霊を紡いだ。

化物を何重にも貫いていた全ての宝具が罅割れ、爆発に爆発を重ねて壮絶な破壊をもたらす。

それは俺の放った言葉通りにヤツを完全に消し去り、半ば消えかかっていた固有結界も宝具の炸裂の余波で消えていく。

あらゆる感覚を無くなり、自分が立っているのか、倒れているのかもよく分からなくなる。視界の大部分が真っ白に染まってほとんど見えなくなった目に、いつか見た黄金色の黎明と似た空と、走り寄ってくる遠坂の姿が見えた気がした。

―Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ２　ｏｕｔ―

あらゆるものが消えて無くなってしまったんじゃないかと錯覚するような極光が収まり、世界を侵食していた男の『世界』が消える。

深い森であった戦場は荒野へと姿を変え、その中心に佇む男と傍らに立つ女を朝焼けが照らす。

「遠坂――そこに居るんだな？ちゃんと、勝って戻ってきたぞ？」

ぼんやりと焦点の合わない瞳で男は笑いかける。

「アンタ、その目が……。そうね……へっぽこ郎にしちゃ、よくやったと褒めてあげるわ」

声が涙で曇らないよう、必死に女は軽い調子で話し続ける。

「はっ――ははっ、遠坂に褒められるとは――明日は――雪でも降る――か」

糸を切られた操り人形のように唐突に男は倒れ伏す。

「士郎ッ！？」

慌ててその身体を抱き上げようと女が手を触れた瞬間、至る所が硝子のように割れ砕け、砂のように零れ落ちる。

「すま――ない、そろそろ……げんかい――みたいだ」

「士郎！大丈夫だから！！聖杯戦争の時みたいに私が何とかしてみせ――」

男は『肉体』として僅かに残っている左腕を持ち上げ、優しく彼女の頬を拭いそっと唇に触れる。

その動作でさらに砕けていく範囲が広くなるが……意に介さず、ただ温もりを確かめるように触れ続ける。

「悔いは……残っていない。遠坂と一緒に、『正義の味方』を張り続けられたから――それに、好きなやつを護るために戦って……その顔を見ながら死ねる」

「そんなこと言って……あたしを残して死のうなんて――生意気すぎよ、ばか」

「こんな時だ――少しくらい、格好つけさせてくれ」

「いい女を泣かせるような奴は格好も何もないんだけどね……まぁ、今回だけは特別に許してあげるわ」

自分の頬に触れる男の手を握り締め、戦いへ赴く前、彼がしたように女は優しく唇を重ねる。

「「――――――」」

「――士郎。先に行って、イリヤや切嗣さんと仲良くしてなさい。私も少しだけ生きてから、そっちに行く。言っとくけど……浮気したら承知しないからね」

「――――あぁ、みんなで――――まって――る――――――」

涙に濡れ、なお美しく微笑むその顔がどれほど男を救ったのか――
――見る者の心を打つ穏やかな表情で彼はその生涯を終えた。
身体のほとんどは正常なカタチで残らず、左腕と胸から上だけが辛うじて残るだけ。
纏う者が居なくなった深紅の衣装にそれらを包み、女は慈しむように抱き締める。
「――お疲れ様。ありがとう。そして――――愛してるわ、士郎」
強く吹き抜ける風の中を女は歩き始め、その風に散った雫が陽光を受けて宝石のように煌めいた。
夜から朝へと変わりゆく狭間として、淡い色彩で揺らめいた黎明が終わりを告げる。

「士郎、ちゃんと元気でやってるんでしょうね？あの時に言った『浮気は許さない』って言葉、しっかり守っておきなさいよ。私がそっちに行ったら、真っ先に確かめてやるんだから」
完全に朝日が姿を現す瞬間――
『俺は、元気でやってる。遠坂も、元気そうで安心した。絶対に浮気なんかしないから、無茶ばかりして早くこっちに来ようなんてするんじゃないぞ？そんなことしたら、イリヤ達と俺と勢揃いで説教してやる』

そんな懐かしい声が聞こえた気がした。

「偉そうなこと言って……士郎のくせに生意気よ。まぁ、私もあの頃に比べたらさらに余裕のある大人の女だし、ガンド十発くらいで勘弁してあげるわ。運が良いのか悪いのか、もうしばらく生きていられそうだからね……精々、首を洗って待ってなさい。それじゃあね、士郎」

笑みを浮かべて、女性は歩み去る。

再会の約束は今も此処に、宝石の輝きを纏って彼女は生きていく。いつの日か、胸を張って愛しい彼の元へ辿り着くために。

第十四話　リメイク版　剣と宝石　Ｆａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔ（後書き）

強く、気高く、美しく、優しい。

知らぬ者なしのミス・パーフェクト遠坂凛の大活躍短編です。

そして士郎くんほど誰かを護って散るのが似合う男もいないなーと思う。

セイバーと士郎もベストカップルだが、セイバーと士郎もベストカップルだと思っている虎です。

第十五話　リメイク版　ある狼と商人の物語　狼と香辛料（前書き）

狼と香辛料を読み、ホロとロレンスの関係に悶え、こんな結末を迎えられたら良いのになーと妄想した結果書き出された文章。

幾星霜を孤独に生きるはずだった狼が見つけたもの。

それは、儚くも連綿と受け継がれていく人間との絆。

第十五話　リメイク版　ある狼と商人の物語　狼と香辛料

陽光に優しく包まれた部屋で寝台に横たわる老人。白銀の髪と髭、深く刻まれた皺が生きた年月を如実に表している。

家具や調度品の数々は華美な物ではないが、どれも使い勝手の良さを第一に考えて作られた質の高い物ばかり。持ち主である彼の人柄を表すように質素で温かみに溢れ、穏やかな空気を醸し出す。

静かに目を閉じたままの老人の傍ら、寝台の横に置かれた椅子に腰かける少女。紅玉の瞳を優しげに細め、華奢な中に強い芯を感じさせる美貌を誇っている。

きめ細かい雪原のような肌、繊細な工芸品を思わせる亜麻色の髪が光に照らされ、より一層の美しさを見せている。

「――もう一度、お前と逢える日が来るとはな。ははっ……長生きはしてみるもんだ」

ゆっくりと目を開きながら楽しそうに老人が話し、在りし日を懐かしむように少女を見つめる。

「馬鹿者……そんな様で何を言っておる……。いいから大人しく寝ておれ。年ばかり取りおって……主は何も変わっておらん」

唐突に紡がれた彼の言葉に少女は呆気に取られたような表情をするが、すぐさま悪戯っぽい口調で切り返す。

「そっちこそ相変わらず口が減らない。離れてる間に少しは可愛げ

が出てくると思ったが……」

「わっちゃあ元々が可愛いからの。それに……何があっても、ずーっとわっちを好いとる雄が居るから、可愛げを磨かずとも良いのだ」

口調こそ呆れ返った響きを含んでいるが、彼の表情から見て取れる楽しそうな様子は何も変わっていない。その言葉を受け、少女は胸を張って誇らしげに返す。自分の言葉で照れてしまったのか、僅かに頬が赤みを増した。

「ほぅ、それは奇矯な男が居る。ぜひ顔を合わせて話をしたい」

「ふふっ、ならば鏡を見ると良い。わっちを心底愛し、好いとる雄。わっちが心の底から深く、深く愛している雄と対面できることだろうよ」

照れ隠しのつもりなのか他人事のように老人は言うが……にんまり、という表現が似合う顔で、部屋の片隅に置かれた姿身を指さす少女の言葉に赤面する。

悪戯っ子のような光を瞳に宿し、彼と彼女は言葉を交わす。懐かしむように、慈しむように、幸せそうな笑みを浮かべて話し続ける。まるで若い男女が互いの想いを探り合うために行う駆け引きのような会話。

「――あぁ、本当に変わっていないな……愛する我が妻、愛する恋人、幾星霜を生きる賢狼ホロ」

「――主は、見た目だけ貫禄が付くようになった。わっちの最愛の夫、可愛い想い人クラフト・ロレンス」

思い出を引き出すような応酬のあと、溢れるような愛情を込めて互いの名を呼び合った。

馬車に乗り、各地を旅する行商人だったロレンス。故郷を見失い、とある村から出ることが出来なくなっていた賢狼ホロ。二人が出会ったのは本当に気まぐれと偶然の産物。幾多の危機を乗り越え、衝突を繰り返しながら二人は引かれ合い、あらゆる障害を受け入れた上で結ばれたのだった。

「引き留める主の元を離れ、旅に出てから随分と経つが……立派になった」

部屋を見回し、窓から働く人々を眺めてホロは呟く。思い出すのは数十年前、賢狼と人間という立場を超えて結ばれ、二人の店を持ち、行商人から街の商人へとなった時のこと。

それからの日々は本当に幸せで、毎日が満たされていた。店を守るため、大きくするために二人で力を合わせて働き、長い間忘れていた深い愛情を交わし合う。時にはぶつかり合いながら、それすらも幸せだと言える時間を過ごした。

時が経つにつれてロレンスは年を取る。人間である以上、避けられない運命である。どんな想いも劣化していく。しかし、かつては恐れてたその変化すらも二人は受け入れ、幸福へと変えた。

想いが劣化するなら、それを土壌にして新たな想いを育めばいい。老いていくなら、その先にある魅力を見つけ出せばいい。視点を僅かに変えただけだが、ホロとロレンスにはそれだけで充分だった。

「お前に笑われたくなかったからな。必死で働いたんだよ」

苦笑いと共に老人……ロレンスが声をかけ、ふと回想する。

しかし、そんな幸福の日々も終わりを告げる。どれだけ時を重ねても、賢狼は老いを知らない。二人の絆を引き裂くことはできなくとも、周囲の人間が理解を示してくれるはずが無かった。数少ない事情を知る人物や、協力してくれる者の尽力も空しく、ホロはロレンスと家族を守るために街を去った。

築き上げた全てを捨てて共に行こうとしたロレンスを押し止め、『また戻ってくる』と気丈な微笑みを残して去って行ったのだった。

「それに……お前と建てた大切な店だ。絶対に潰したくなかった」

「ぬぅ……そんなに真面目な顔で言うでない。照れ……いや、からかい甲斐が無くなる」

頬を染め、僅かにふくらませつつ少女は被ったままのフードを外し、羽織っていた外套を脱ぎ去る。ここの使用人たちは二人の事情を知った上で働く者ばかりであるし、想い人の全てを感じ取るためにはたった一枚の布ですら煩わしかった。

頭頂部でぴこぴこと動く狼の耳と、左右に振られる毛並みの良い尻尾が露わになる。

「本当の事だからな。からかわずに聞いてくれ。それと……言葉は素直じゃないが、喜んでいるのが丸分かりだ。素直で、毛並みの良い耳と尻尾だな」

「むっ、むぅ……し、仕方なかろう！！耳と尻尾が素直なんじゃ！言葉まで素直にするとバカ正直も良い所になってしまう……じゃろうが……」

微笑みながらロレンスが言った真面目な言葉が嬉しかったのだろう。耳がふるふると震え、尻尾がぱたぱたと大きく左右に揺れる。言い返す言葉は尻すぼみになり、頬を真っ赤に染めながら目を伏せて俯いてしまった。

「……ホロ。こんな爺様になった俺だが、こっちに来てくれるか？」

その様子を優しく見つめ、ロレンスは少女に向けて手を伸ばす。その節くれ立った手を愛おしむように握り、ホロはそっと寝台の中へと身体を潜り込ませた。

「全く……賢狼たるわっちを困らせると罰が当たるぞ？」

「あぁ、よく知ってる。しかし、このやり取りも久しぶりで楽しくてな」

ぴったりと寄り添い、温もりを互いに伝え合う。どんなに離れても心は常に共にあったが……こうして体温を共有することだけは叶わなかった。望まなかった空白の期間を埋めるように、全身に染み渡らせるようにゆっくりと過ごす。幸福に満ちる空気の中に唐突に紡いだホロの言葉が響いた。

「のぅ、ロレンス……長く、ないのか……？」

それは辛く、重い問いかけ。

「さすがに分かるか。あぁ……長くはないな」

「……そうか。覚悟はしておったが……やはり、辛い……」

ロレンスの胸元に顔を押し付け、消え入るように囁く。細い肩が小刻みに震え、寝間着の生地を濡らしていく雫の温かさが伝わっていく。

生ある物はいずれ死ぬ。遅い、早いの違いはあれど抗いようのない自然の摂理がロレンスにも近付いていた。

「そうだな……。俺も覚悟は決めていたつもりだったが、いざとなると怖くて辛い。だけど、不思議なことにどこか穏やかな気分でもある」

「えっ？」

優しく亜麻色の髪を撫で、その細い身体を力強く抱き締めながらロレンスは言う。

「できるだけ後悔を残さないように精一杯生き抜いたのもあるが……こうして最後にお前と逢えたのが大きい。ちゃんと約束を守ってくれてありがとう、感謝している」

そう言って潤む琥珀色の瞳を見つめ、満たされた笑顔を浮かべ――

「主には……そんな殊勝な言葉は似合わん。似合わんぞ」

涙に濡れた顔で、精一杯笑う少女の姿は何よりも美しかった。

「じゃが……また、わっちは一人きりになるのか……」

浮かべた笑顔も遠からず伴侶を亡くすという事実の前で崩れ去り、悲嘆に暮れる言葉が溢れ出てしまう。

「ホロ……今の言葉を早く撤回しないと、本気で怒るぞ。短い俺の余命を縮める気か？それに、俺よりも怒るヤツが２人居るのを忘れるな」

「えっ？」

その言葉を聞いた瞬間、僅かに怒気を滲ませてロレンスが言い放つ。そして、示し合わせたように部屋の中へと２つの人影が入り込んでくる。

亜麻色と僅かに銀色が混じった髪、琥珀を溶かし込んだように光る紅玉の瞳。

性別は男女それぞれ違えど、それぞれが他と一線を画す美麗な容姿をしている。

「母さんが父さんを深く想っているのは知ってますけど……だからと言って、僕たちのことを無かったことにしてもらっては困りますよ。久しぶりですね、困った母さん」

「全くです。事情があっての事で私たちと過ごす時間は短かったかもしれません。父様と過ごした時間の方が長かったでしょう。だからって忘れてもいいかと問われれば、それはまた別のお話になります。まったくもう……お久しぶりです、母様」

目を瞠るような美しさでありながら頼りなさを全く感じさせない精悍な面持ち、もう青年の域に届こうかという少年は優しく笑う。美しさ故の近寄りがたい雰囲気は微塵もなく、誰もが穏やかな気持ちになるだろう柔らかく、春の陽光にも似た容姿。少女は僅かに垂れ目がちな瞳を細めて溜息を吐いた。

「そういうことだ。まさか……腹を痛めて産んだ我が子を、俺達の幸福に満たされて生きた証である子供たちを忘れたわけじゃあるまい？」

悪戯を成功させた少年のように笑い、誇らしく我が子を見つめながらロレンスが問いかける。

「本当にあの子達……なのかや？そうか…大きく、立派になった……。よく、ここまで育って……」

少女の瞳から止め処なく涙が流れる。家を出る日…涙を一杯に溜めても決して泣かず、『帰りをずっと待ってる』と言ってくれた二人の幼子。その二人が見違えるように立派になり、そばに居て『母親』としての役目を全うできなかった自分を『母』と呼んでくれている。それが何よりも嬉しくて、申し訳なくて、ただ泣きじゃくるしかできない。

「でも、こん…なっ、わっちは……母親として何もッ！！なのに……」

「僕たちは知ってます。父さんと母さんが悩み抜いて、それでも僕と妹をこの世に送り出してくれたと。希望と愛情を注ぎ、育んでくれた人を『母』と呼ばずに誰を呼ぶんですか？」

「言いたいことは兄様に言われてしまったので私からは特に。でも、2つだけ言わせてもらいますね……月並みですが、私たちを生んでくれてありがとう。そして、母様のことを心から愛してます」

顔を覆っていた両手を二人がそれぞれ握り、そっと母としては小さく華奢な身体を抱き締める。

「わっちは、一人ぼっちでは……ないの……じゃな……」

「ええ、母さんはこの先も一人ぼっちになんかなりませんよ。父さんが居なくなっても僕達が」

「私達が居なくなっても、私達の子供が。ずっと母様と一緒です」

「まだ死んでないんだから勝手なことを言うな。ホロが戻ってきたんだ、あと十年は生きてみせるさ」

再び家族が集い、空白期間を埋めるような温かな会話に自然と涙が溢れていく。それは賢狼の少女だけではなく、伴侶の老人、賢狼と人の血を引く二人の子供たちも同じ。誰もが拭うこともせず、ただ幾筋も涙を零しながら微笑み合う。

幾星霜を生きる宿命を背負いながら『賢狼』としての同胞を失った。それから数え切れぬ時を孤独に過ごした彼女だが……儚くも連綿と続く『人』の絆が確かにそこにあった。

時間は止まることなく流れ続け、いつしか時代は移り変わり、人も世代が変わっていく。森羅万象は変化することから逃れられない。だが、そんな中でも変わることなく伝えられていく想いやモノは確かに存在する。

とある街に代々続く家がある。狼と麦の穂をあしらったエンブレムを掲げ、香辛料を中心に手広く商売を手掛け、生業にしている家系。名を『クラフト家』と呼び、創始者はクラフト・ロレンスとその妻ホロ。行商人から一代で身を起こし、街中でも有数の大商人となった男。だが彼は決して驕り高ぶることなく、生涯変わらず妻を愛し、子供たちを慈しみ、家族ともども人々から慕われて生涯を終えた。

家を継ぐ者、継がずに違う道を進む者、その誰もが商才と容姿に恵まれ、不思議と人を惹き付ける魅力を持つ争い事の無い稀有な一族である。

「おかあさま、あのおはなししてー」

暖炉の明かりが優しく部屋を照らし出す。揺り椅子に腰かけた妙齢の女性の膝元に走り寄り、目を輝かせながら幼い少女が昔話をねだる。

「また？ふふっ、あなたも好きね。でも、私も母様によくねだったわ……。素敵なお話ですものね」

「うん！わたし、だいすきだよ！！」

琥珀に銀を溶かし込んだように不思議な色合いの髪を揺らし、女性は少女を抱き上げ脚の上に乗せる。さらに柔らかく、艶のある少女の髪をそっと梳きながら息を吸う。

「それじゃ始めるわよ？」

「このお話はたった一人で旅をする行商人の若者と、美しい狼の少女が出逢ったことから始まる物語――」

冴え冴えと虚空に浮かぶ満月の夜。その光は夜の闇を柔らかいビロードへと変え、窓越しに優しく流れる語り声は温もりを伝える。遠い昔の話、されど未だ宝石のように輝きを放つ幸福な思い出。穏やかな顔つきで目を閉じ、静かに耳を傾ける大きく美しい狼の姿がそこに――。

第十五話　リメイク版　ある狼と商人の物語　狼と香辛料（後書き）

ホロとロレンス。

不器用にぶつかり合ったり、時には傷つけ合ったり、それでも共に生き続ける二人に願わくば幸福な未来が訪れますよう。

第十六話　リメイク版　雪の聖女　Ｆａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔ（前書き）

ヘブンズフィールの終盤、イリヤと士郎の会話が溢れる涙で見えなかった虎が、イリヤ視点で何か書けないかと思って妄想した文章。

たぶん……泣ける。

たぶんね。

保証はできないよ？うん。

第十六話　リメイク版　雪の聖女　Ｆａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔ

英霊となり、永劫の刻に囚われて戦い続ける宿命を背負った紅の弓兵。彼が持ち得た錬鉄の記憶全てが宿っているだろう左腕を移植され、己が異物に侵食されていく恐怖を乗り越え、伝説の大英雄すら凌駕した少年は最期の戦いへと赴く。

正常な思考回路は崩壊を始め、記憶は握った砂のように零れ落ちているだろう。秒刻みで死に近付いている身体と心で、たった一人の愛する少女を救うために、何もかも投げ捨てて彼は戦おうとしている。こんな事を言えばきっと、彼は『そんなことはない』と怒るだろうけど、それでも私は言葉にしたい。その姿は何よりも尊く、大きな背中は彼が目指す遠き理想『正義の味方』そのものだと。彼は、私の愛する弟であり兄は、衛宮士郎は、ヒトの身でありながら優しく強い本当の英雄へと成ったのだ。

「――――――――セラ、リズ」

「「御前に」」

短い呼びかけにも関わらず、忠実な心優しき二人の従者が音も無く姿を現す。

「『天の杯』を用意して。黒き聖杯……いえ、サクラはきっと二人が助け出す。でも、大聖杯そのものを止めることは出来ない。アレを完全に閉じないと、また同じような戦争が繰り返される。私が、この身を以て、大聖杯を閉じるわ」

「――――本当に……良いの、ですか？」

「ええ、もちろん。頑固で手のかかる困ったシロウ、互いに気を遣いすぎる不器用なリンとサクラに未来を贈ってあげるんだから。ふふっ、イリヤお姉さんからの素敵な贈り物よ」

「それに、ね。元々、こんな事を始めたのはアインツベルン一族。私にもその血が流れてる。始めた人が後始末をする、それが当たり前でしょ？」

「――御心の、ままに」

今にも零れそうなほど涙を湛え、それが零れてしまわないように必死でこらえるセラの顔に、うっかり私も泣いてしまいそうになる。死ぬのは怖くない、怖くないはずだった。此処に来て、シロウ達と出逢って、『生きる』ことの楽しさを知ってしまったから……少しだけ、弱くなってしまったのかもしれない。でも、だからこそ、その喜びを守るために私は死ねる。

「イリヤの言う通り。さ、セラ、準備しよ」

「お嬢様ッ！！」

「えっ！？」

リズにそっと掴まれた手を振り切って、セラは私を強く抱き締める。ずっと、従者としての立場を守り続けた彼女が、感情を露わにする。

「お嬢様……いえ、イリヤ。貴女に仕えることができて、本当に幸せです。作られた命、初めから役目が決定された存在ですが、この

瞬間を生きる純粋な私の想いです。貴女と生きた日々を決して忘れません。どうか――ご武運を」

震える声と熱く沁みてくる雫の感触、記憶の彼方に埋もれていた母の抱擁を思い出す優しい温もり。堪え切れなかった涙が、頬を伝い落ちていく。一度流れ始めた涙は止め処なかった。

「ごめん、セラ……もう少し、このままで…」

「むー、イリヤとセラは泣き虫だな。よし、私の胸を貸してやる」

少しだけ頬を膨らませ、拗ねた仕草をした後にむん！と胸を張って、私とセラを抱き寄せるリズ。

「そんなリズだって、泣いちゃってるじゃん」

「泣いてない。これは、あれ、鼻水だよ」

「鼻水って…ぷっ、あはははは！！もう、リズのせいで雰囲気壊れちゃったじゃん」

「ふっ、ふふっ……あははっ」

悲壮感ばかりが満ちていた空間に笑顔が戻る。涙に塗れた笑顔でも、とても温かくて幸せな時間。でも、それは瞬きのような短い時間に過ぎなかった。

「そろそろ準備しなきゃ。私は衛宮切嗣の、『正義の味方』の娘。大切な人達がピンチの時だもん、ばっちり助けに行くんだから」

まるで胎動しているような生々しい気配を孕んで、さらに夜が深まっていく。その中を歩き、枯れた林を抜け、柳洞寺の裏に隠された洞窟の入り口へと辿り着く。
どこまでも暗く、昏い暗黒に満たされたその中を眺め、『イリヤスフィール』としての記憶を越えた遙か彼方の別の記憶を思い浮かべる。

かつて『冬の聖女』と呼ばれ、アインツベルンの歴史において最高の魔術師にであり、その当主、そし全ての発端となった大聖杯の礎となった女性。

ユスティーツァ・リズライヒ・フォン・アインツベルン。『私』や母、その前に連なる聖杯としての機能を持たされた全てのホムンクルスの基礎となった存在。二百年前、始まりのために彼女が歩いた道を、私は終わらせるために歩いていく。

その皮肉な因果に内心苦笑しつつ、大聖杯へと続く深い洞窟へと踏み入る。まるで地獄へと堕ちていくような錯覚を覚える道を進んでいく。この先に、ヒトの身では容易に辿り着けぬ『根源』へと繋がる道を敷くため、魔術の名家、三つの血筋が創り出した願望機がある。

『この世の悪を一掃する』誰もが願うだろう理想を実現するために、魔法を求める男。その理想を叶えるため、また一族の悲願である第三魔法へと至るために礎となることを是とした女。ただ魔術師としての本懐を遂げるため『根源』を目指した男。

彼らの想いの結晶は今や、血で血を洗う闘争の火種となり、愚かな

決断から『この世全ての悪』に汚染され、あらゆる願いをヒトを殺す災厄で成就させる呪詛の塊に堕ち果てた。

これを皮肉と呼ばずに何と呼べば良いのだろう。悪を一掃する願いを汲み取るはずだった聖なる杯が、かつてない巨大な悪を産み出すための母体となっているのだから。

「イリヤ、スフィールですか？」

「ええ。どうにか存在できてるみたいね、ライダー」

狭い道を抜けた先に広がる広場のような空間に横たわり、魔眼封印のマスク越しにぼんやりと岩壁を眺めていた美しき騎乗兵に声をかける。『天の衣』を纏った私に驚いたのか、ぽかんと口を開けるライダーに思わず笑みが零れてしまう。

「ふふっ、ちゃんとそんな表情も出来るじゃない。こんな時なのに良いもの見れちゃった」

「あぅ。そっ、それよりもその格好は一体？魔術回路……と似たような感じを受けるんですが…」

照れたのか僅かに頬を赤く染めるが、さすがにサーヴァントだけある。一目でこの衣装の本質を見抜いたらしい。

「私が聖杯となるための外付け魔術回路『天の杯』よ。これを使えば、私の意思で大聖杯を閉じることができるわ。大聖杯を直接壊すのも有効だけど……それだけの宝具を再現できるのはシロウだけ。けど、そのシロウは、とっくに限界を超えてる」

「――――死ぬ、気ですか」

「そんな悲壮感たっぷりにならなくていいわ。単純な話よ。こんなくだらない事を始めた年寄り達の亡霊を、完全に消してやるだけ。そうして、大好きな人達の幸せな未来を守りたいのよ」

「イリヤスフィール……」

私の言葉で遙か過去の、メデューサとしての記憶を思い出したのだろう。ひどく悲しそうな、泣き出す寸前の顔になる。

「みんなが呼ぶみたいに『イリヤ』でいいのに。ねぇ、ライダー……シロウやリンやサクラのこと、よろしくお願いね。みんな、本当は優しいくせに不器用で頑固なんだから」

「私だけは荷が重いですから、貴女にも手伝って欲しいですね。『イリヤ』……どんなカタチでも良いです。必ず、戻ってきなさい」

「――――うん、ありがとう。必ず、シロウを助けて一緒に帰るから。その、いってきます」

「ええ、いってらっしゃい」

動けるようになり、最深部へ向けて走り出したライダーを見送り、私も歩き出す。洞窟を揺らす轟音と地響きが一際大きくなり、戦いが終末へ向けてさらに加速していることを告げてくる。

最深部、大聖杯が溢れだす魔力が満ち満ちる巨大な空洞へと踏み入る。そこで人間のカタチを保つことすら出来ず、蟲の塊と化して蠢いていたマキリ臓硯と僅かに言葉を交わす。ひどく醜悪で、それ以

上に哀れな姿だった。私と交わした言葉で何かを取り戻したのか、憑き物が落ちたようにあっけなく最期を迎えた。

五百年の時を生きる中で、かつての理想を失った。なぜ、死にたくないのか。なぜ、生き続けているのか。それすらも忘れ、堕ちて腐りきった妄念と妄執に囚われたマキリ臓硯は滅び去る。

生まれ落ちようと胎動を繰り返す大聖杯を見つめ、歩みを再開する。第三魔法を得るために全てを費やしてきたアインツベルンの悲願は此処に潰えるだろう。冬木ほど『根源』に近い大聖杯は存在しない。つまり、かれらの妄念とも呼べる望みを叶える機会は永遠に近く失われることになる。だが、何も後悔は無い。

ただ、心残りがあるとすれば……血は繋がっていなくとも、確かに兄妹であった一人の少年。　私の『兄』であり、そして『弟』である愚直で不器用で、誰よりも優しい少年のこと。

あの絶対悪を孕んだ杯の中心で、この瞬間も消えかけた命を必死に燃やして戦い続けている衛宮士郎のこと。

自らの手が届く全ての人を救いたい、幸福であって欲しいと願った己の理想を裏切り、たった一人の愛する少女を守るために彼は戦っている。

ついに大聖杯へと辿り着き、『この世全ての悪』が産まれようとするその真下に佇む人影を視認する。それは、目を覆いたくなるような凄惨な姿でありながら、一幅の絵画のような強く美しい姿だった。

いくつも刻み込まれ、その全てが致命の深さに達する傷。

その傷を塞ぐように体内から突き出た無数の剣。

全身が血に染まり、崩れ落ちようとする身体を必死の思いで立たせる姿。

もはや何も映っていないだろう瞳にも関わらず、ひたすら真っ直ぐに前を見据え、『左腕』の封印である聖骸布を解放するため肩口に右手を置いている。

闇に染まり堕ちた大英雄を絶殺し、かつての従者であり半身である黒き騎士王を葬り、絶対悪に囚われた愛する少女を救い出し、異形の精神を宿した黒幕たる神父すら打倒した。

壊れゆく精神と生命を瀬戸際で繋ぎ止め、全身を剣に貫かせながら、それでも彼は此処まで辿り着いた。

「――――シロウ」

悲しみ、愛しさ、そして形容しがたい様々な感情が溢れだして心を満たし、決して長いとは言えないシロウと過ごした時間と光景が駆け巡る。

強大な武器であり、同時に確実な死をもたらす致死毒である『左腕』を解放する。その恐怖を抑えつけ、『大丈夫だ』と気丈に笑った顔。

八つ当たりにも似た感情で命を奪おうとした私を何の抵抗もなく受け入れ、血の繋がりも無いのに『妹』と呼んでくれた声。

諦観に甘んじることを良しとせず、私を守るために絶対的不利な状況ですら突破してみせた姿。

思い出す。射し込んだ白い陽光に照らされ、強く吹き抜けた風に真紅の聖骸布を翻させ、揺らぐことを知らない強く尊い背中を。悲しき生涯を駆け抜けた『彼』と似た、一人の英雄の背中。

次々と零れ落ちていく涙をそのままにシロウの側に近付いていく。兄は妹を守るものだとシロウは言ってくれた。ならば、弟を守るのは姉である私の役目だろう。紡いで伝えた言葉は僅かでも、それでも、まるで繋がっているようにシロウの想いが分かる。

大聖杯を閉じるためには『内側』に入り、『扉』を閉じなくてはならない。それはつまり、正当なる聖杯としての機能を備えられた私だけが成し得ることであり、生きて戻ることは出来ないということ。

この身命を捧げて、私は全ての原因となったモノを閉じる。士郎と、士郎の大切な人達の未来に邪魔になる存在を永遠に封印する。

でも、私を失って士郎はきっと悲しむだろう。『自分が何とかできたはず』と、『自分の責任だ』と苦しむと思う。

「本当に、迷惑と心配ばかりかける困ったシロウなんだから……。でもね、私はシロウを助けるよ」

「シロウが私に『生きて欲しい』と願う気持ちと同じくらい……うう、もっともっと強く、私はシロウに生きて欲しいの」

「泣かないで。嘆かないで。どうか、私の大好きな温かい笑顔を浮かべて、みんなと幸福な未来を穏やかに生きて」

理想を追い求め、摩耗しきった果てに理想に殉じる可能性ではない。

『誰かのため』に在ることを自分に強いた貴方が、初めて抱いた自分の願いの通りに、命懸けで救って守り通した少女との未来を生きて。

「私もその場所で一緒に生きていけたなら、何も言うこと無しなんだけどね。でも、悲しまなくていいの。私は、ずっと、シロウのそばにいる」

もう時間が無い。残りの伝えたい想いは目一杯の微笑みで伝えよう。

ありがとう、シロウに逢えて本当に良かった。それと、あまり無茶しないで自分を大切にしてちょうだい。シロウは、私の大切な弟なんだから。

今まで生きてきた時間の全てより、お兄ちゃんと過ごした時間の方が、何倍も幸せだったよ。本当に、ありがとう。

最後に、もう一つだけ――。

「――ヤ、――――リヤ！――イリヤ！！イリヤァァァァ！！！！」

ゆっくりと閉じていく『扉』から、跪いて涙を流しながら私の名を叫ぶシロウの姿を瞳に焼き付ける。

「――さよなら、私の愛しい人」

そして……ぱたん、と私は聖杯の門を閉じた。

第十六話　リメイク版　雪の聖女　Ｆａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔ（後書き）

ふむ……こうして読み返してみると、今よりもさらに荒いなーと落ち込みますね…。

日々、精進しなくては。

第十七話　リメイク版　紫赤の日々　Ｆａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔ（前書き）

ラブラブしてる士郎くんとライダーさんが書きたくなり、衝動的に書いたのが原文。

これじゃダメダメだろＪＫとなり、全面的に加筆修正したのがこの文章。

もうね、虎妄想が加速しまくり。

第十七話　リメイク版　紫赤の日々　Fate／stay night

極上の繻子織を思わせる滑らかさと艶やかさをもった紫紺の長く美しい髪、ひどく怜悧な輝きを湛えていながらもどこか温かみを秘めた宝玉の瞳、触れることはおろか視界に映すことすら躊躇われる美麗な容姿、豊かな起伏を持ち完璧な均衡で完成された肢体。

今となっては神話として語り継がれるだけの遙かな昔、その美しさのあまり呪いをかけられ悲嘆と絶望の果てに非業の最期を遂げた女神『メデューサ』

『聖杯』を巡る闘争の駒である七騎のサーヴァントの一角、『ライダー』の名を冠して現代に召喚された彼女に衛宮士郎は惹かれ、世間一般の言う『恋人』となった。

これは『ヒト』である少年と現代に呼び出された女神の恋と愛の話。

文字通り命を懸けて駆け抜けた『聖杯戦争』の夜を経て、穏やかな日々を過ごしていたある夜。いつもは賑やかな話し声が尽きないこの家が珍しく静寂に包まれた日のこと。

月光を遮る無粋な雲は欠片もなく、いつにも増して冴え冴えと輝く満月が浮かぶ。じいさん……衛宮切嗣が逝った日と同じような空気に胸が騒ぎ、そっと寝床を出て縁側へと足を向けた。

呼吸の音ですら罅割れてしまうような闇の中を歩き、青白い色彩を纏う庭に面した廊下へと出る。そこに居た人影を認識した瞬間、呼吸は完全に止まり、視線を釘付けにされ、文字通り心奪われた。

彼女は縁側に座り、淡い夢幻のように周囲を照らし出す月明かりを浴びながらぼんやりと遠く彼方を見つめる。何か物思いにふけっているのだろうか、普段の彼女ならすぐに俺の気配に気付いてもおかしくない状況でじっと座り続けている。

冷静沈着な仕草や言動に隠され、陽光の中では決して気付けないだろうその本質。硝子細工のように繊細で、大きく包み込むような慈愛を秘めた彼女の本当の姿がそこにあるように感じた。

「――――――」

声をかけるどころか、声帯を震わせることすらできない。これまでもその美しさに目を奪われ、同じ屋根の下で暮らしていることに心臓を高鳴らせてしまうこともあった。

意識してしまわないように必死に抑えつけてきたものが溢れ返り、思考回路を真っ白に塗り潰してしまう。脳内を駆け巡るのはこの家で彼女と過ごしてきた日々の記憶。

小さく可憐な花が咲くような微笑み、いたずらを思い付いた時に見せたあどけない表情、思い出を振り返る時に見せた優しさと悲しみを等分に秘めた横顔。

そして何よりも衛宮士郎の心に強く焼き付いている光景。

『私のような存在でも、ここで穏やかな時を過ごせている。本来ならば過ぎた幸福なのでしょう。それでも――私はこの世界に呼び出されて良かった。士郎、貴方と出逢えて良かった』

そっと頬を撫でていく風に溶けてしまうような儚い笑みを浮かべたその姿、俺なんかじゃ想像もできないほどの深さを湛えた彼女の心から零れ落ちた言葉を聞いた――あの瞬間、『衛宮士郎』の最も大切な部分に彼女の存在が刻み込まれたんだと思う。

これまでも、そしてこれからも空白であり続けるはずだった部分が埋められ、満たされた瞬間だった。

「――――う？――――ろう？――士郎？」

「――――えっ？うわっ！？」

深く回想に沈み込んでいた意識が引き戻されて我に返った瞬間、すぐ近くにまで近寄っていたライダーの顔を間近に見てしまい声を上げてしまう。

「驚かせてしまったのは申し訳ないんですが……そんな声を上げてまで驚かれると少し傷つきます」

「あっ…・・その、えっと、すまない。眠れなくてこっちまで出てきたんだけど、ライダーの姿を見たら声かけれなくなってさ。とっ、とにかく悪気はなかった」

僅かに瞳を伏せ、しょんぼりと肩を落とすライダーの様子に焦ってしまい、まくしたてるように続けてしゃべりかけてしまう。

「そうですか……私は眠れなかったという理由もありますが……今夜は月がとても綺麗だったのでついこんな時間まで見入ってしまいました。いつもに比べるとずっと静かな夜で雰囲気も良かったですから。ついついお酒も進んでしまって止め時を見失っていた所です」

そう言われてからライダーの傍らに目を向けると、確かに徳利が数本と杯が一つ置いてあった。近くで見ると透き通るように白い彼女の肌も僅かに上気し、酒精が回っているせいだろうか、魔眼殺しの眼鏡越しでも宝玉の瞳が潤んでいるのが分かる。

その妖艶な雰囲気と姿にあてられて否が応にも鼓動が速くなっていく。この後どうするべきか思考がまとまらずに立ち尽くしてしまった。

「あの……士郎、すぐ部屋に戻らないのでしたらご一緒しませんか？」

そんな俺をライダーは月見酒に誘う。

「えっ！？その……いいのか？」

「ええ。こんなに良い月夜を一人きりで過ごすのはもったいないですから」

柔らかい笑顔と共に少しだけ横にずれ、ライダーは俺が座るための空間を設けた。

「それじゃ、お邪魔させてもらうよ」

座ってからそこにまだ彼女の温もりが残っていた事に気づき、さらに鼓動は激しさを増すばかり。すぐ隣にいるライダーにその心音が聞こえてしまいそうなほどに脈打っている。

「士郎も一献いかがです？」

「俺は……いや、うん、もらう……って杯は一つしか無いだろ？探してくるから待っててて――」

「私は構いませんし、回し飲みの方が風情があると思いませんか？」

そう言いながら真っ赤になった俺の反応に彼女は柔らかく瞳を細め、そっと杯を差し出す。

「……分かった。ライダーがそう言うなら遠慮なく」

舞い上がった気持ちを必死に落ち着けながら杯を受け取り、一息に飲み干した。

良い酒なのか角がなく、飲みやすい。

酒精の回るじわりと温かい感触が広がり、自然な落ち着きを取り戻す。

「――ふぅ。そんなに酒は詳しくないけど、これ結構良い物じゃないのか？」

「今晩はとっておきの物を出してきてますから。士郎は運がいい」

「そっか……あ、次はライダーの番だろ」

杯を返し、徳利から酒を注ぐ。

「ふふっ、一人酒も良いですが二人の方が雰囲気が出ますね」

楽しそうに笑いながら夜空に浮かぶ月へと目を向け、彼女も一息で飲み干す。杯を傾けた時に艶めかしい首筋が露わになり、酒を飲み下す動きの色っぽさに心臓が跳ねる。

「――――――」

「――――――――」

月の光を浴び、夜風の響きを聞き、互いの気配を感じながら静かに杯のやり取りを重ねていく。その優しく、穏やかな時間がたまらなく愛おしい。

「ライダー……その、聞いて欲しいことがあるんだ」

「奇遇ですね。私も……士郎に聞いて欲しいことがあるんです」

互いに目線を絡ませることはなく、揃って月を見つめたまま。

すう、と小さく息を吸い込む音が聞こえ――彼女が語り始める。

「士郎……貴方ならば私の、メデューサの伝説を多少なりとも知っていると思います。」

「私には二人の姉がいました。私は……かけがえのない家族として、姉様たちを愛していたんです。私は二人をあらゆる災厄から守りたかった。私のために……なんの躊躇いもなく辛い道を選んだ姉様たちを、三人で過ごす幸せな日々を守りたかった。私にできることなんて……そんな事しかなかったから」

「――――だけど、守ろうとするほどに私の手は血で染まっていった……。そんな姿を見せたくなくて、姉様たちと会うことが辛くなるばかりでした。私たちは静かに暮らせればそれで良かったのに……『英雄』を名乗る人間は後を絶たず、姉様たちを守るために殺戮を続けた私は……いつしか血を求めるだけの化物へと堕落し、愛する人を手にかけた」

『ステンノ』

『アウリュアレ』

女神の嫉妬により呪いをかけられ孤独となった妹のため、自ら進んで彼女のそばに居続ける道を選び取った美しく愛らしい姿をした二人の姉。

誰よりもメデューサを愛し、慈しみ、深く想っていた二人の姉。

そんな二人を自らの手で殺めた……その記憶は、どれほどの時が流れようと薄れはしないのだろう。

「私は『愛しい者を自らの手で殺す』という呪いとも言える可能性を抱えている……。それはこうして英霊となり、ここで過ごしていても決して変わることはありません」

「士郎――前にも少しだけ言いましたが、私はこの世界が好きです。ここに呼ばれ、貴方やサクラ、リン達と過ごす日々はとても幸福です」

「だからこそ……私はもう消えるべきかもしれません。いつか、自分の手でこの幸福を壊してしまわないうちに」

深い悲しみと諦念を覆い隠すように精一杯の笑顔を浮かべ、穏やかに言葉を紡ぐその姿に感情が揺さぶられる。湧き上がるのは今まで感じてきた『救わねばならない』という思いとは全く違うもの。

目前で抱え切れないほどの重荷を背負ってただ一人で在り続けようとする女を全霊をもって支え、この身全てをもって守り抜きたいと望む強い感情、切ないほどに、苦しいほどに溢れる彼女への愛情。

ふたつが混ざり合い、衛宮士郎の心と身体を満たしていく。

「貴方を――この手で殺めてしまわないうちに――」

微笑みを浮かべたまま月光を閉じ込めた宝石のような雫を一筋だけ零し、こんなことを言い放った瞬間……完全に壊れてしまった。

「少し……話し過ぎましたね。すみません、私は部屋に――！？」

立ち上がろうとしたライダーの手を掴んで自分の方へと引き寄せる。あっけなくバランスを崩し、倒れかかる彼女の身体をしっかりと抱き留めた。

ふわり、と甘い薫りが鼻腔をくすぐる。揺りかごに抱かれているような安心感を持たせるどこか懐かしい薫り。

「えっ、士郎！？はっ……離して……！！」

「俺も聞いて欲しい話があるって言っただろ！！こんなことされて嫌だろうけど、止めるわけにはいかない！！」

慌てて腕の中から逃げようとするライダーをさらに強く抱き締め、叩きつけるように叫ぶ。

「メデューサの伝説なら知ってる……だけど、それがどうしたってんだ！！お前が望んでる幸せを壊してしまう自分が居るなら、そんなヤツ徹底的に叩きのめして矯正させればいい！お前だけで抑えられないなら俺や遠坂や桜も居る！！」

「そんな理由で消えようなんて許さないからな！簡単に消えさせてたまるかよ！！お前が居ないと……ダメなんだよ……」

胸がつまり、叫びは懇願にも似た響きへと変わって虚空へ吸い込まれていった。視界が曇り、顔を伝い落ちる熱い感触でようやく自分が泣いているんだと気付いた。

腕の中で黙ったままのライダーの身体が震えている。服を通して浸みてくる温かい感触はきっと涙、俺に悟られないように声を抑えて彼女も泣いているんだろう。

少しだけ身体を離し、顔を伏せ長い髪に隠したままの彼女の頬に手を添える。

導かれるように顔を上げた彼女の濡れた瞳を見据え、衛宮士郎の想いを全て込めた言葉を紡ぐ。

「ライダー、俺はお前が好きだ。英霊だからとか、化物だからとか関係ない。俺の目の前で、ここに存在しているライダーが好きなんだ」

「お前が愛する人を守るために化物に堕ちたのなら、守る必要がな

い安全な場所で生きていこう。それが無理ならお前を守れるくらいに強くなるから」

「もしも……本当にもしも、お前が自分を抑えられなくなった時には……俺が、命を懸けてお前を止める。だけど絶対に死なせない……必ず、生きて連れ戻してみせる」

ライダーの反応も、返答の言葉も待たず目蓋を閉じ、彼女の唇に自分の唇を重ねる。

これは誓いの証。

衛宮士郎が彼女に変わらぬ愛を捧げる証。

「「――――――」」

どれだけ口づけを交わしていたのか……どちらからとなく唇を離す。

「士郎の想いは分かりました……本当に、嬉しい。でも――」

何かを言いかけたライダーの口をもう一度唇で塞ぐ。

「『でも』なんて言葉はいらない。ただ頷いて、『はい』と言ってくれ」

真っ赤な顔のまま呆然とするライダーに笑いかけ、照れくさい気持ちを抑えて言う。

「士郎――――貴方は本当に……どうしようもない人ですね。貴方の周りには素晴らしい女性が居るのに……私なんかを選ぶなんて」

赤くなったままの顔を見合わせ、自然と溢れる笑顔と嬉し涙を零しあう。

「ばか、ライダーだから好きになったんだ。だから……そんなことを言わなくてもいい」

蒼月に照らされた静夜の中、神代の女神と人間の少年は再び唇を重ねた。

「――んっ、ふぅ……っあ……しろう……」

ふるふると身体を震わせながら口づけに応えるその仕草があまりにも可愛らしくて、唇を離して抱き締めてしまう。熱に浮かされたように熱いその身体を抱き、さらに甘さを増した彼女の薫りで鼻腔を満たした。

「士郎の……匂いがします。それに心臓の音も、体温もこんなに強く……」

まるで親猫に甘える子猫のようにライダーは俺の首筋に顔をこすりつける。

「風呂に入ってから結構経つし、汗臭くないか？」

「いえ……このくらいじゃないと寂しい。もっと強くても良いくらいです。それに、士郎から感じる全てが愛しくて落ち着きます」

心から安らいだ表情を浮かべ、俺に身体を委ねてくれる彼女が愛しくて、腰に回した両腕に少しだけ力を込めた。

「少し、冷えてきたな。そろそろ部屋にもどろうか」
「そうですね。でも……あの、士郎」
「ん？」
「その……私と士郎は、晴れて『恋人』になったんですよね？」
徳利と杯を片付けるためにと立ち上がろうとすると、ライダーは真っ赤な顔で問いかけてくる。改めて言葉にされると恥ずかしさが凄まじい。
「そっ、そういうことだけど……いきなりどうしたのさ？」
「いえ、嬉しくてつい確認してしまっただけですからお気にせず」
反則級の照れ笑いと共にこんなことを言われてしまい、動揺して徳利を落とし、卓袱台に足を強打する。
一通り片付けを終え、ライダーを部屋まで送っていく。勝手知った る家の中ではあるが気分的に送っていきたかったし、ライダーが物足りなそうな雰囲気だったので。
「それじゃ、おやすみだな。また明日……って日をまたいでるから朝飯の時にな」
「あっ、士郎……その、ひとつお願いしたいことがあるんですが」
「どうかしたか？俺にできることなら聞くぞ？」

「あの……今夜は一緒に寝てほしいんですけど……」

「――――――はい？」

「だめ……でしょうか……？」

いつもよりずっと幸福で温かな夜はもう少しだけ続き、夜が明ければすぐ隣に寄り添ってくれる女神と共に過ごす日々が始まる。

第十七話　リメイク版　紫赤の日々　Ｆａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔ（後書き）

うーむ、やりたい放題ですね。

これも長編化してみたい文章。

っつーか、長編化したい文章ばっかじゃね？

第十八話　ヘルシングネタ。旦那×セラス　十八禁表現多数。要注意！！（前書

注意！！

今回はえっちな内容です。

閲覧、非常に非常に注意です。

読む場合は本当に覚悟を決めた上で、先に進んで下さい。

第十八話　ヘルシングネタ。旦那×セラス　十八禁表現多数。要注意！！

見る者の心をざわめかせ、狂気的な衝動を煽り立てるような紅月。まるで、鮮血に塗れて脈動を続ける心臓のよう。こうして眺めていれば、かぐわしい香りに満ちた極上の血が滴り落ちてきそうだ。釘付けになっていた視線を外し、歩みを再開する。目的の部屋に辿り着き、ノックに作法を無視して扉を開いた。

「あっ、珍しいですね。マスターが私の部屋を訪れるなんて」

傭兵部隊を率いていた男ベルナドットの血を吸い、ついに、夜闇を統べる不死の王（ノーライフキング）が血脈に名を連ねた女がにこりと笑って私を迎え入れる。女の名はセラス、セラス・ヴィクトリア。ただ使役し、使役されるだけの関係であった以前とは違い、今のセラスは己の意思で夜を歩くただ一人の吸血の鬼。主従関係と呼ぶのは少し違っているのだが、未だに『マスター』と呼ぶ癖が抜けていない。

「どうしたんですか？私に用があれば、念話で呼びかけてくれれば良かったのに」

そう言いながら、無防備に近づいてくる。暗い紅に染められた服の上からでもはっきりと分かる起伏に富んだ身体のライン。男ならば獣欲を掻き立てられ、女ですら欲望の火を燃え上がらせるだろう。鼻腔に届くのは、甘美で艶やかな妖花のごときセラスの香り。そして、絡み付くような鉄錆の匂い。血の、匂い。ざわざわと焼けるような熱が身の内で騒ぎだす。

「マスター？黙ったままなんて一体どうし……あぐっ！？」

きょとんとした表情のまま、私の顔を覗き込んできたセラスの襟元を何も言わずに掴み上げた。軽く、柔らかい。このまま、握り潰したらどれほどの愉悦を得られるだろうか。苦しげに歪んだ唇、顰められた眉、窒息して僅かに紅色に染まった頬にひどく、ひどく情欲を煽られ、凶悪な感情の暴れるままさらに力を込める。

「がっ、かはっ…」

「セラス……セラス・ヴィクトリア。私の、私だけの、愛しい、女」

服に指をかけ、下着もまとめて一気に引き裂いた。白い、白い肌が露わになる。衝撃の余韻でふるふると揺れる豊かな乳房、引き締まった横腹から腰の線、触れたら弾けてしまいそうなほど瑞々しく張りつめた脚、恐ろしく妖艶でありながら、完成された一個の美術品にも似た美しさ。薄紅の月明かりに浮かび上がるその裸体は、退廃的でありながら、どこか清純さすら感じさせる。

「げほっ、ごほっ、ごほっ！！なにするんですかマスタ……あうっ！？」

「騒ぐな、セラス。静かに、していろ」

セラスを掴み上げていた手を離し、その両手を掴んで壁に押し付ける。耳元で命令を囁き、呼吸を取り戻し、上げようとした抗議の声を封殺した。露わになった首筋に残る二つの小さな穴、私が血を吸い、彼女を吸血鬼へと変えた証。そっと、唇を触れさせ、舌で舐め上げる。唾液を舌に乗せて傷痕の中に流し込み、啜り出す。

「ますっ！？あっ、ひっ、んっんんん！！」

びくびくと身体を震わせてセラスが喘ぐ。その声、その様のなんと甘美なことか。その二度と温もりが戻らぬ冷たい身体に、冷たい情欲の焔が灯ったのが分かった。鼓動を刻むことがない心臓が激しく、壊れるように拍動しているような気がする。完全に脱力してかたかたと震える両脚は内股気味になり、その間を銀色に輝く雫が幾筋も線を引いて流れ落ちていく。その短いスカートに隠された下着は、とうの昔に役目を成さなくなっているのだろう。繊細な鎖骨を指先で撫でると、浅ましいほどに雫の量が増えた。

「もっと、欲しいか？セラス」

「はっ、はぁ、はぁ…」

私の問いかけに答えず、俯いたまま荒い呼吸を続けるセラスに嗜虐心をそそられ、その細い頤を掴み上げて無理矢理視線を合わせる。欲望と被虐の快楽に濡れ潤んだ瞳に映る、自分の顔。狂信の焔で鍛え上げた身体と精神で戦ったあの神父との、至上の闘争の最中ですら浮かべなかった愉悦の表情。

こんなにも、こんなにも、激しく狂おしく愛おしい。

「欲しいか、と聞いている。答えろ、セラス」

「……ほ、しい…です。ます、たー…おねが、い、しま……っあああああぁぁぁぁぁああああっ！！！！」

息も絶え絶えに呟かれた小さな言葉を聞き、渇きかけた傷痕をぬらりと一舐めして、我が眷属へと変えた時のように再び牙を突き立てた。溢れてくる血液を容赦なく吸い出し、飲み込む。

「そんなっ、吸っちゃ…だっ、め…んんんっ、ひぃっあああ〝あ〝っ！！！」

吸血鬼の血を吸ったとて、存在を繋ぎ止めるための糧とはならない。だが、その行為は性交にも勝る快楽をもたらす。甘く、豊潤な血が喉を通っていく度に、激しく欲望の焔が燃え盛った。初めて経験するセラスは、いっそ発狂した方が楽と思えるほどの快感に苛まれているだろう。

「……っ、はぁ」

「ひっ…あ〝っ、あぅ…」

ゆっくりと牙を抜き、首筋から口を離す。血と唾液が混じり合った紅色の橋がかかり、月光を反射して輝いた。ぐったりと力が抜け、掴まれた両手だけでかろうじて倒れずにすんでいる姿は、十字架に磔にされたどこぞの聖者と同じ構図。

「……っ！……！！」

手を離したことで支えを無くし、へたり込んだまま荒い息を吐くセラスを見た。僅かに残った吸血の余韻だけで絶頂に達しているのだろう。無言のままでひくり、ひくりと震えている。

人差し指を口に含んでぶつりと皮膚だけを噛みちぎり、中指も同じようにして、滴り落ちる血をセラスの顔にかけた。廃人のように焦点の合わないままだったセラスの瞳に僅かな光が戻り、血の源泉である私の指に向けて顔を近付けてくる。糸を引きながら垂れ落ちる唾液もそのままに、桃色の舌を伸ばす。

「くっ、くくっ……発情した浅ましい牝犬のようだなセラス。牝犬にはこう命令すべきか……『待て』だ。私が良いと言うまで、そのままでいろ」

四つん這いになって涎を流し、呼吸を乱す『牝犬』の顔に血を垂らし、その艶やかな唇に触れて紅を引く。口の中で物欲しげに蠢く舌が一際大きく震えた。

「はっ、ふっ、ふうっ……ますた…おねがい、します…いじわる、しないでください……」

「……よし、いいぞ。ただし、舐めるだけだ。さぁ、綺麗に舐め取れ」

「は、い……失礼、します…。んっ、ちゅぷ…はぁ、はっ、はむ…ちゅる」

両膝をつき、両手も床についたまま涙を流して指を舐めしゃぶる姿は例えようもなく獣欲を掻き立てた。溢れ出る血を唾液に溶かし込み、飲み、こくりこくりと喉が動くたびにセラスの身体が震え、小さな絶頂に至っているのが分かる。

「くちゅ…ちゅ……ぷはっ、だめ、ぜんぜん足りない…ますた、もっと…」

「そう慌てるな。……こういう、趣向はどうだ？」

ねっとりとした唾液に塗れた指を持ち上げ、塞がりかけた傷を再び噛みちぎる。自らの血で、セラスにしたように唇に紅を引いた。

「マスター……もしかして…」

「どうした…？口づけを、許すと言っている」

「……はいぃ…嬉しい、です…。はっ、はぁ…失礼、します…んっ」

『ちゅ、ちゅく……はっ、ちゅう…ぴちゃ、ふぅ…んふっ……んくっ…』

体液の甘さ、血液の苦さ、粘膜同士が擦れ合う柔らかく鋭い快楽の嵐。必死に縋りついてくるその身体を、折り砕いてしまうように強く抱き寄せた。

「はふっ……あっ…！？ます、たー？」

唇を離し、備え付けのベッドへとセラスを抱きかかえていく。吸血の噛み痕、噛み切った指から滴り落ちた血が真っ白なセラスの裸体とシーツに点々と紅い花が咲かせた。うっすらと血の残滓を纏い、色の濃さを増した唇から頤、首、仰向けになっても豊かな盛り上がりを失わない乳房の間、細く締まった腹部、小さく慎ましい臍と中指だけでなぞっていく。

「んっ、んぅ……はぁ……ひぃ、くぅん！？」

最後に辿り着いたのは薄布に覆われたふっくらと盛り上がる『女』であることを否が応にも主張する場所。爪を擦り合わせ、薄布を引き裂いた。粘度の高い雫をたっぷりと吸い込んで湿ったそれを取り去り、床へと投げ捨てる。余計なものなど一切なく、つやつやと輝く女丘は妖艶であり、また清純でもあった。ゆっくりと撫で、その

下にある童女のようにぴたりと閉じたままの割れ目へと指を滑り込ませる。

「ますた……はずかしっ、ああっ！」

潤う、というよりも止め処なく溢れ、零れ出す愛液がにちゃりと指に絡み付いた。動かすたびに、粘着質な音が響き渡る。『ずいぶんと、猥雑な音を奏でるのだな。お前の身体は』とでも口にしようかと思ったが、涙で潤んだセラスの瞳を見つめて、視線だけで伝えてやる。蒼白い肌に朱が走り、盛り上がった涙がついに流れ出す。

「いつまで脚を閉じているつもりだ？どうすればいいのか、お前なら分かるだろう？」

「は……い、マイ、マスター」

震えながら両脚を開き、己の秘裂を露わにする。その拍子に少しだけ綻び、こぷりと音を立ててさらに雫を垂れ流した。ねっとりと濡れた指を体内へと続く中心にあてがい、侵入させる。

「くっ、ひっ……！！！？」

ぴくぴくと小刻みに痙攣しながら、柔肉が指を締め付ける。もっと奥へ、奥へと誘うように蠢き、引き抜こうとすれば名残惜しそうに絡み付く。吸血鬼ゆえ、どれほど身体を破壊しようと心臓を潰すか、首を跳ね飛ばされなければ死なない。最初は、衝動の赴くままに壊し犯そうとした。だが、どうだ。かつて、私が血を吸い、吸われた彼女の時のように、愛する者同士がするように、身体を重ねようとしている。

「セラス……セラス・ヴィクトリア……」

―セラス視点―

「セラス……セラス・ヴィクトリア」

吸血の激しい絶頂、じりじりと火で炙られているような羞恥と快楽、初めて誰かの侵入を許した膣内から……マスターの指が伝えてくる未知の感覚。まともな働きをとうに失った頭の中に低く滲み込む声。『婦警』ではなく、私の名前を呼んでいる。初めて聞くその声は、哀しさと愛しさが等分に入り混じった優しい響き。その声が揺らした空気の波が、この身体に当たっていると夢想するだけで、ぞくぞくと震えてしまう。

マスターがおもむろに身体を起こす。次の瞬間、唐突に発生した黒い霧に全身が包まれ、霧がゆっくりと消えていくと、そこには初めて目の当たりにする一糸纏わぬマスターの身体。女性でも嫉妬するような滑らかで、透き通るような白い肌。暴虐とも言える圧倒的な力を振るう身体は細く、繊細な印象すら受ける。中性的な美しさだからこそ際立つ、荒々しく屹立する『男』。ずっと、嫌悪、憎悪の対象であった『それ』を初めて、大きな期待と僅かな不安の中で見つめた。

「舐めろ。お前の口で奉仕しろ」

「はい……」

要求は簡潔。ちゅぷんと音を立てて私の中から指が引き抜かれた。

全身に走る甘い痺れに震えながら両手、両膝をベッドの上につき、四つん這いのままマスターの『男』に顔を近付ける。その先端、透明な雫が浮かぶ場所にそっと唇を当てた。その熱さ、唇を離す時に糸を引いた雫の感触に腹部の奥で燃える焔がざわりと揺らめく。こぷっ、と私だけに聞こえる音と共に、内股を温かい液体が伝い落ちた。

「……ちゅっ、ちゅ……ぴちゃ、ふぅ、ふむっ……ちゅる」

啄ばむように何度も唇を当て、薄く湿り気を帯びた場所から順番に舌で舐める。ひくり、ひくりと脈動するたびに先端から雫が溢れ、剛直に沿って流れていく。一滴も無駄にしてしまわぬように舌の上に乗せ、飲み下す。私が快楽で激しく濡れてしまったように、マスターも、きっと同じなのだ。

「ちゅく、ちゅ、ぴちゃ、はぁ、んっ……えっ？」

夢中で奉仕を続けていると、そっと頭を掴んで引き離されてしまった。何か失敗をしてしまったのかと戸惑っていると、柔らかく髪を撫でられる感触。耳元に顔を寄せたマスターが告げる。

―セラス視点終了―

「仰向けになって、もう一度脚を開け」

鮮やかな金髪の中に隠れた真っ白な耳に向け、吐息混じりで呟いてやる。はっきりと分かるほどに全身が震え、無言で頷いて身体を動かした。息を大きく荒げる口元を両手で隠し、前髪の隙間からのぞ

く微かな怖れを孕んで揺らぐ瞳。広げられたセラスの両脚の間に身体を割り込ませ、白く濁った愛液を零し続ける秘花へこれ以上ないほどに昂った剛直をあてがう。

「……はっ、はっ、はぁっ……ます、た……」

「這入るぞ、セラス」

「は、い……きて、ください……ますた、っあ、ああっ、ひぃ、あああぁぁぁあああっ！！！！？」

初めて男を受け入れるとは思えない貪欲さ、柔らかさで膣壁が剛直に絡み付き、包み込んでくる。小刻みに震えながら締め、最奥へと誘いながらねっとりとした奉仕を続けるその様は『嬉しい、ようやく来てくれた』と言わんばかり。自ら動くまでもなく、極上の快楽をもたらしてきた。

「どうだ？初めて、男を咥え込んだ感想は」

「あつ、くて……ひぃん！？ますた、うごいちゃ、だめぇ！？」

「くっ、くくっ、私は動いていない。そら、自分の目で確かめてみろ」

「ふっ、う……えっ？」

壊れたように涙を流し続けるセラスの瞳が動き、繋がった下半身へと向けられる。逃がすまいとするように私の腰をがっちりと固定する両脚。動こうとしない私へと抗議するように、『動いてほしい』とねだるように蠢く腰。セラスが感じた快楽は、全て自分の身体が

動いた結果もたらされたもの。その事実を目の当たりにして深い羞恥の色が瞳に浮かんだ。

「さぁ、どうして欲しい？」

「――――――っ、ぁ」

「うん？」

「――――動いて、ください……マスターの好きなように、私を、使って、ください……壊れてしまうまで、抱いて……ください」

そう言って、セラスは、そっと唇を重ねてきた。私から与えられるだろう全てを許容すると誓う、そんな口づけ。おもむろに唇の重なりを解き、私の首元に顔を埋めるようにしてセラスが抱きつく。

「――セラス」

滑らかな感触を伝えてくるセラスの背中へと腕を回し、華奢でありながら豊かな肉感を持つ身体を強く抱き締める。『愛しい愛しい私の、私だけの僕』と言葉にはしなかったが、確かに伝わっただろう。一呼吸置いてからぎりぎりまで剛直を引き抜き、一気に奥まで叩き付けた。

「っ、あ゛っ、うんっ！？～～～っ、～～！！！？」

絶息したまま声なき嬌声を上げ続ける。あらん限りの力を振り絞ってしがみ付き、がくがくと痙攣を続ける。たったの一往復で絶頂へと達し、そのまま降りて来られないでいるのだろう。間断なく甘い刺激を伝えてくる剛直をさらに動かし、絡み、締め付けてくる膣内

を責め立てる。

「くぅ、あっ、んんっ！！？～～っ、～～！？あああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！ひぃっ、あああ〝ああ〝っ！！！！」

あっという間に込み上げてきた射精への欲求を押さえ付け、動き続ける。これほどまでに昂ったことが今まであっただろうか。我が主インテグラ、インテグラル・ファルブルケ・ウィンゲーツ・ヘルシングを前にする時よりも、闘争の鉄火の渦中に身を置く時よりも、唯一この私が心の底から欲した女……ミナ・ハーカーと共にあった一瞬よりも、震え昂る。不死の王へと成って果てた時、永久に失った熱が蘇るようだ。燃え滾り、何もかもを焼き尽くすような灼熱。

「――っ、――――――セラスッ！！」

ざわざわとした寒気が限界を超え、愛しい僕を名を呼びながらさらに強く抱き締め、子を宿すはずだった宮へと突き入らんばかりに深く、深く這入り込んだ。その瞬間、身の内で渦巻く全ての灼熱が収束する。

「――――――っ！！――――――！！！！？――――――――！！――――っ、あっ、ああ〝あぁぁぁぁあ〝あぁぁぁあああ〝あぁぁあああ！！！！！！！！！！」

魂を削るような凄絶な叫びと共に、セラスは絶頂を超えた絶頂へと至った。激しく震えながらうねり、剛直を搾り上げる膣壁の刺激に耐え切れず、叩き込むような激しい射精を迎える。何度も、何度も脈動しては熱塊を送り続けた。

第十八話　ヘルシングネタ。旦那×セラス　十八禁表現多数。要注意！！（後書

カッとなって書いた。

反省はあまりしていない。

セラス可愛いよセラス。

旦那かっこいいよ旦那。

第十九話　掌編二次創作風味の文章&報告（前書き）

なんかもう、よく分からない内容になってます。

自己満足でも何でもいいから読む人にくすりと笑って欲しいなーとか、明るい気分になってほしいなーとか思って、カッなって書いちまった文章です。

反省も後悔も……まぁ、特にしてない。

活動報告に入れようかと思ったけど、節操の無い内容になっているのでこっちに入れちまうことにしました。

第十九話　掌編二次創作風味の文章&報告

はーい、どうもー、おはようの人、こんにちはの人、こんばんはの人ぉー、茶虎ぁー亜樹でぇーございますぅー。おい、パイ食わねぇか？

「虚空に向かって何をぶつぶつ呟いている。脳の調子がおかしいなら、カラドボルグでちょっとかき回してやろうか？永遠に調子が良くなるぞ？」

久しぶりに登場させてやったというのに……創作者への敬意が足りないぞ、ロリーチャー。相変わらず、ついんてついんてしやがって。

「なんだその造語は……」

元気良くツンテールを動かす萌え娘をやってるな、という意味だ。しかし残念だ……俺はツインテールよりもポニーテール派なんだ……。ロリーチャーは凛ちゃんの下僕だから、ツインテにせざるを得なかったのだよ。

「知らんわ馬鹿者……」

「うぉーいす！アチャ虎ー！！久しぶりだなー、元気でやってたか？」

ああ、ランサーも息災そうで何よりだ。ん？なんか、胸が大きくなってないか？

「おお、そうなんだよ。なんか、こっち来る時に急に膨らんじまっ

てさ。お前、最近、巨乳に強く心を揺り動かされたろ？」

そう言えば……とがめさんとか、オルソラさんとか、神裂さんとか、結構いい感じにときめいてたな……まさか、その影響？

「たぶんな。俺のは成長の伸びしろが残ってたから影響を受けたんだろうぜ。他の連中ももしかしたら幾らか影響されてるかもな」

らんさーさん、自分で持って、たぷたぷ揺らさないで……歩きづらくなるから……。

「くっくっく、精神修行が足りねぇぜ少年」

「……」

あっ、たぶんロリーチャーは影響受けてないと思うぞ。凛ちゃん影響を受けてるからな、そのサイズで固定だ。いくら、ぺたぺた触ったところでもにっとすることは…へぐぁ！！？

「おー、見事に眉間をぶち抜いたな」

「その脂肪の塊を近付けるな……暑苦しい」

「ばっかだなー、これにゃ男の浪漫が詰まってんだぜ？大切にしないと罰が当たんぞ」

「お疲れ様ですー。あれ？ロリーチャーさんとランサーさん、もう来てたんですか」

「おっ、アンリが三番目か。お疲れさん。ふむ……幾らか、成長し

てんな」

「わひゃ！？アチャ虎さんが倒れてます！へっ？成長？あっ、胸のことですか」

「あいつなら、もうちょっとすりゃ復活するから大丈夫だろ。元から立派なモンだが、余計に立派になってんなー」

「あっ、あんまり見ないでください……さっき、ライダーさんに妙な手つきで触られちゃって変な感じがするんです……」

ふっ、ふふふふ……らいだーめ、うらやまけしからん……。はぁ、痛かった……まだ目とか頭の奥のほうがちかちかしてんぜ。おっ、アンリちゃんお疲れ様。

「お疲れ様ですー。もうすぐバサカさんたちも来るらしいので、お知らせしておきますね」

あいよー。

「むっ……早めに来たつもりだけど、先を越されていたみたいだね。久しぶり、アチャ虎。それと、その姿だと久しぶりだねランサー、ロリーチャー」

「相変わらず、騒がしい組み合わせね。お久しぶり」

「アンリ……優しくしてあげていたのに、逃げ出すなんてちょっと傷つきました……」

「……たぷたぷ……ふよふよ……むにむに……ぷにぷに……ふにゅ

ふにゅ……はっ、はは、あはははは……私は、私は、どうして……いえ、大きさは関係な……あれ？この雫は一体……私は、泣いているわけでは……」

おお、キャス子にライダーも幾らかパワーアップしてるな。バサカは……神乳だもんな、成長するわけない。それだけで、完膚無きまでに完成し尽くされてるし。せいば……うん、なんかごめん……。

「セイバー、お前は泣かずともいい。聖剣を引き抜き、鞘の加護を受けた時点でお前は不老なのだから……成長という名の、老化現象と無縁と考えるんだ。私は……凛は……望まずに可能性を失っているのだから……」

ロリーチャーも何だかんだで巨乳になりたかったん…はぐあっ！？

「雑種ぅ！！貴様、胸がきつくて鎧が入らなくなってしまったではないか！！」

ぶふぅ！！（鼻血）ぎっ、ぎる……その格好は……。

「というか、どうして金ぴかが居るんだよ？あと、後ろのネコミミ娘は誰だ？」

「あの赤雑種が血走った目でひたすら資金運用を迫り、悪鬼のようなオーラを放ち始めたから逃げ……こほん、見限ってこちらに来てやったのだ。というか、金ぴかと呼ぶな青タイツめ！！」

「青タイツ！？」

「ギルさんがあんなに怯えるところを見れるとは思わなかったっす

ー」

ぴっちり身体に張り付くアンダーウェア、しかも、ギリギリ下乳まで覆うくらいの短さしかないのにランサーをタイツ呼ばわりすんなよ……どこの痴女だ。というか、綺麗なウエストしてんなーほんと。エルもお疲れ様。

「アチャ虎さんとは初めましてっすね。よろしくっす」

改めてよろしくね。さて、ぎゃーぎゃー騒いでる金ぴかと青槍は置いといて……今回から登場することになったギルガメッシュ、エルの二人だ。みんな、仲良くしてやってくれ。

「遅くなった……と、ああ、話は聞いていた。名は佐々木小次郎、一応アサシンのクラスに当て嵌まっている。こちらは――」

「小次郎さまの、その……伴侶ということになります。ネコと申します。どうぞ、よろしくお願いしますね」

「おおー、ネコさんは真っ黒な猫耳なんすね。綺麗でうらやましいっす！あれ、小次郎さんと同じサイズ？」

「ええ。私は元々、こちらだけ限定の存在ですから。アチャ虎さんのご厚意で小次郎さまと同じ大きさになっているんです。伴侶というのも、こちらだけになりますね。しかし……私は、とても幸せですけど」

さて、自己紹介は各自済ませておいてくれなー。うん、全員揃ったみたいで何より。さーて、と……それじゃ本題に入ろうかねぇ。

「おい、バカ虎」

ん？なんか用か、ロリーチャー？

「あまりにも皆が自然と呼ぶからスルーしてしまっていたが……勝手に浸透させてるんじゃない！！なぜ、バサカたちにまでロリーチャー呼ばわりされねば……」

あー、へこんでいるとこ悪いが、用件は何だよ。

「あれは何だ？」

「あっ、あーちゃー！ちょ、助けてくださ……ああっ、私は食べ物ではない……！！」

「くっ！」

「かっか！」

「ナノー！！」

おお、はるかさんったらセイバーをもにゅもにゅしちゃって。ちひゃーにあふぅも元気そうで何よりだねぇ。

「そうじゃなくて、あの生物（？）は何だと聞いている！！」

んー、よく分からん。ちっこくて可愛い存在としか。まぁ、小さいと言ってもちびサヴァより大きいんだけどなー。はっはっは。

「くっ、くっくっ、くっ、くくっ？」

「む？なんだ？私か？……名前？アーチャーだが」

「ナノ！ナノ！」

「ぬおっ！？なんか見慣れないのが増えてる！！金ぴか、一時停戦だ」

「だから金ぴかと呼ぶな！！む……これは……」

「分かんのか？」

「いや、さっぱり」

「……（旗振り）」

「やー、やっ、やー」

ゆきぽにまこちーも来てくれたんだなー。いや、これは賑やかだぜい。正直、凡人キャパシティはとっくに崩壊してるぞ。

「……（『勇み足』と書かれた専用スケッチブックを見せる）」

たかにゃも来てたのか。まぁ、確かに勇み足だったかもしれんが……楽しいし、賑やかだからやって良かったよ。ありがとうな、ほれ、ラーメンでも食え。

「……（『感謝』）……ずるずるー」

「あれ？ここはどこだ？」

「見たこともない場所ねぇ……家、かしら？」

「ここは一体……私は……？」

「むっ……なっ、あなたは！？」

「「「「とがめ！？右衛門左衛門！？七花！？姫様！？」」」」

「とが……め……お前……嘘だろ……」

「しちか……しち、か……七花！七花ぁぁぁぁ！！！！」

「うわっぷ！？匂いも、あったかさも、とがめ……とがめだ……うっ、あっ、くっ、うううう……とが、め……とがめぇ……」

「バカ者……そんなに強く、抱き締めすぎだ……苦しいではないか。それに、泣くでない……私まで、泣けてくるでは……うっ、うぐっ……うぁあぁぁぁん！！！！ひっ、ひぐっ、ううっ、しちかぁ！！」

「ひめ、さま……」

「……ほら、あんたの仮面よ。その辛気臭い顔は嫌いだと言ったはずよ……さっさと、着けなさい」

「申し訳、ありません」

「何がよ？」

「貴女の許しの言葉を聞くことなく、私は――」

「ばっかじゃないのぉ？あたしは、あんな言葉で感動することもなければ、涙を零すこともなかったわぁ。ほんと、バカよ……まったく、あたしの否定も、まさかこんな事態を引き起こせるとはねぇ……続けてみるもんだわぁ」

「姫様……？」

「こっちに来なさい、右衛門左衛門。特別よ、例外よ、二度とない気まぐれよ……こっちに来て、あたしを抱き締めなさい……」

「……御意」

はぁ……ったく、やっぱ、涙は嬉し涙に限んよな……。目一杯、幸せになりやがれこのやろー。さて、邪魔者は次、次っと。

「より快適な睡眠を提供するべく、書物より調達した知識に基づき、膝枕を実行に移そうと思います、とミサカは小さく独り言を呟きながら近寄ります」

「……すぅ、すぅ……ん、ん……」

「実は、可愛らしい寝顔をしているんですね、とミサカは頬の温度を上げながら凝視します」

「う、ん……すぅ……くぅ……」

「起きてしまうかと焦りましたがずっとずっと穏やかな寝顔になった、とミサカは膝枕の実行を高く評価します。……これが『母性』というものでしょうか、とミサカは穏やかに胸が満たされていく感覚に幸福を感じながら、上条当麻の髪を撫でます」

「さすがに起きるかもしれませんね、とミサカは危険を冒しながら髪から、頬や額を撫でていきます。あっ、くち、びる……」

「唇はまずいですね、とミサカは自制しようとしますが、止められず唇に触れてしまいました……。こんなにも身体や顔が熱くなるものなのか、とミサカは……あっ、ん！？」

「やっ、だめ……ゆび、くわえちゃ……んんっ！？」

「――――――ふぁ、ああ……あー、よく寝たな……。あれ？誰か、居たような気がしたんだけど……ん？気のせい、か？」

「今度は、直接……したい、とミサカは願望を口にしながら、くわえられた人差し指を、自分の唇に当てます……」

はっはー、こっちも幸せになればかやろー。

「――――――――あン？なに、やってやがんですかねェ？てめェは」

「わっ！？起きちゃったの？ってミサカはミサカは焦りを全身で表現してみる！」

「なにやってたんだ？って聞いてんだが……」

「本でね、眠ったままのお姫様を起こすためにはキスをするのが一番って話を見たの。それでミサカが普段からあなたとしたいと思ってたキスと、眠ったアクセラレータを優しく起こしたいって目的が一致した状況だったから実行に移してみた、ってミサカはミサカは正直に思いを告げてみたり！」

「あァ、そうですかい。ったく……」

「あれ？もしかして、すごく不快だった……？ってミサカは、ミサカは、不安いっぱいに……問い掛けてみる……」

「……ばっか。キスなんてもんは、寝てる時にされても嬉しくねェっての……どうせなら！」

「ひゃっ！？」

「お互い、起きてる時に、するもんだろうが」

「あっ、あくせられーた……って、ミサカはミサカは、押し倒されちゃったことに心臓を高鳴らせながら、期待感に胸を膨らませてみたり……」

「いいのかよ？」

「アクセラレータの方からキスしてくれたら、きっと、すごく幸せな気持ちになれる、ってミサカはミサカは、絶対の確信と一緒に肯定の気持ちを伝えてみる……」

「じゃあ、目ェ瞑れ。見られたまんまじゃ、落ち着かねェんだよ」

「うん……んっ！？はっ、はぁ……んくっ……」

「――――――ぷはっ。ったく、離そうとするたびに吸い付いてくんじゃねェよ」

「だって……もっと、してて、欲しかったんだもん……って、ミサカはミサカは、若干の物足りなさをアピールしてみる。アクセラレータは、もう、したくない……？」

「うっ……」

「照れたあなたってすごく可愛い！！って、ミサカはミサカはぎゅーっと抱き締めてみる！！」

くふふ、いいねぇ、いいですねぇ……ニヤニヤしますねぇ、楽しいですねぇ……こういう書き方も悪くないですねぇ。おや、私ですか？虎が休憩しているので代役を仰せつかった真庭喰鮫、鎖縛の喰鮫、鎖に縛ると書いて鎖縛の喰鮫と申します。おや、私の出番はもう終わりですか？残念ですねぇ、寂しいですねぇ、それでは刀語の原作ないしアニメ版の方でまたお会いできる日を楽しみにしていますよ。ああ、本当に寂しいですねぇ。

ただいまーっと。

「おや、アチャトラ。おかえりなさい。どこか、出掛けていたので

すか？」

ああ、セイバーか。すっかり元気を取り戻したみたいだな。ちょっと、色んな人を幸せにしてきたのだよ。とは言っても、大したことは何もしてないけどな……あくまで自己満足、時間浪費の手慰みだよ。

「……？よく分かりませんが、自己満足に過ぎなくても、何か役に立ったり影響を与えることはできると思います」

だと良いんだがね。さて、みんなー、仲良く遊んでいるところ申し訳ないが報告があるから集まってくれー。

「報告……それは、私たちの出演している作品に関することか？前回にも似たような集まりをした時と似ているし」

さすが、バサカは鋭いな。素晴らしい、ご褒美に飴ちゃんをあげよう。

「ナノ！ナノ！！」

はいはい、あふぅにはおにぎりなー。

「くっ、くっ」

ちひゃーには飴ちゃんはたくさんあるから、みんな仲良く分けて回すようにー。うんうん、みんな言わずとも均等に分けているな。えらいえらい。

「……（『らーめん』）」

たかにゃ……そんな激しくアピールしなくても、後で出前を取ってあげるから少し待ってなさい。よし、報告はバサカが言った通りにちびサヴァに関する報告だ。

しばらくお伝えしてない間に、すごいことになってるからな……感謝を伝えるためにもこの場を借りるわけだ。

衛宮さん家のちびサーヴァント騒動

累計アクセス数　１９万４５５１回

累計読者数　２万５６０４人

総合評価　８０９ポイント

文章評価　１２５ポイント

ストーリー評価　１２６ポイント

このように、とんでもない状況になっているのです。嬉しさの余り、素っ裸の賢者モードで転げ回るような状況なのです。よし、今から脱…ぐへぁ！！？

「脱ぐな、バカ者」

「ナイス阻止、アーチャー」

不定期更新、残念な質、やりたい放題な内容、これだけ読まれる理由が何ひとつ無いのに、一体どうしちまったんだろうな……やはり、

お前らちびサヴァのお陰だよなぁ……いや、本当に頭が上がらんよ。

「これはありがたいわ……士郎にも伝えてあげたいけど、こっちには来れないよね」

「仕方ないですね。帰ってから教えてあげましょう。きっと、驚きますよ」

「士郎さんのことですからね、きっとご馳走を作ろう！って張り切るかもしれませんねー！！」

「ご馳走……シロウが腕によりをかけるのならば、さぞ素晴らしい食卓になるのでしょうね……」

いやはや、士郎くんにも直接お礼を伝えに行く機会を設けないといけないなぁ……。開始した当初からずっと頑張ってきてくれてるし、これからも頑張ってもらう予定だし。

「しかし、本当に読者の方々には感謝の念ばかりだな。大切にしなくては」

「小次郎さまの仰る通りですね。私は、本編の方に出られませんが……小次郎さまのご活躍をいつも見守っておりますよ。私のぶんまで、エルさんが頑張ってくれるそうですから」

「うん！ネコさんの分までがんばるっすよー！！」

「我は……あまり、あちらに帰りたくないのだが……あの、赤雑種の面倒を見るのは懲り懲りだ……」

うむ、それぞれ言いたい事はあるだろうが……まずは、お礼を言おうな。

まだまだ未熟であり、荒削りどころか土の中に埋まっているような力量&作品ではありますが……

「「「「「「「「「「「ここまでのご愛顧ありがとうございます！！」」」」」」」」」」」

これからもちび達と共に成長を続けられるよう、精進を続けていきたいと思います。名前は変わりましたが、アチャ虎改め、茶虎亜樹とちびサヴァーズをよろしくお願いします！！

「「「「「「「「「「「よろしくお願いしまーす！！！！」」」」」」」」」」」

第十九話　掌編二次創作風味の文章＆報告（後書き）

とある魔術の禁書目録……アニメしか見てないですが、何か二次創作を書いてみたいですな……打ち止めちゃん可愛いよ打ち止めちゃん。

御坂妹かわいいよ御坂妹。

オルソラ可愛いよオルソラ。

あっ、次に何か書く時はまずオルソラにしよう。

打ち止め＆御坂妹は今回書いたし。

第二十話　無題　刀語二次創作　十八禁要素あり（前書き）

十八禁表現多数あります。

閲覧する場合には充分注意してください。

カップリングは七花×とがめです。

第二十話　無題　刀語二次創作　十八禁要素あり

鮮やかな紅炎で空を染め上げる落陽が消え、周囲が夜に包まれ始めてきた。今夜は野宿をしなければならないかと覚悟を決めた時、ようやく空きのある旅籠を見つける。小さいが、隅々まで手入れの行き届いた旅籠だった。

「なかなか良い旅籠だな。主人の人柄が滲み出ているようだ」

「いらっしゃいませ。ようこそ、おいでくださいました」

素直な評価を口にしていると主人が現れる。温かい、人懐こそうな笑みを浮かべた男で、その口調や仕草から誠実な人間であることが容易に分かった。

「部屋は空いているか？私とこやつ、二人泊まりたいのだが」

「手前勝手ながら、お二方は夫婦とお見受けしますが……お部屋はご一緒でよろしいでしょうか？」

「めおっ！？んっ、こほん……構わん。食事も頼む」

「かしこまりました。では、お部屋はこちらになります」

主人の後に続きながら先ほどの『夫婦』という一言について思いを巡らせる。旅を始めた頃は、旅の連れであると言い続けていた。しかし、いつの頃からか、『旅の連れ』という言葉から感じる距離が気に入らずに言うことを止めていた。この旅は、私の復讐のために続いている。このような想いを抱くことなど、許されるはずもない

のに。全てを、我が駒としなくてはならないのに。

「――――――っ――」

きり、と噛み締めたことによって奥歯が擦れ合った。駒であること、刀であること、それ以上の存在として心を占めていること、何もかもが渦を巻いて私を混乱させる。辛くて、苦しい。身を裂かれるようだ。だが、それを口に出すことも、表情に出すことも、決してしてはならない。部屋に入り、障子が閉じられたのを確認してから、荷物を置いて座り込んだ七花に声をかける。

「――――七花」

「ん？どうしたんだ？」

私の声に振り向き、視線を合わせてくる長身の男。金でもなく、名誉でもなく、愛のために私の刀となることを選んだ無刀の剣士。刀に頼らなければならない剣術を良しとせず、己が体躯を一振りの『刀』として鍛え上げ、無刀をもって有刀を圧倒することに主眼を置いた闇の流派。虚刀流七代目当主、その名は鑢七花。私に惚れることにしたと言い、私だけの刀として、共に幾多の難関を突破してきた男。

「おっ、お前は……その……」

「うん？」

「……おなごに、興味は……ないのか……？」

澱のように身の内へと溜まり、苛んでくる痛みから意識を逸らすた

めに声をかけてしまったので、続ける言葉が無い。不思議そうにこちらを見てくる顔、旅を通して人間味を得るたびに温かみを増していく黒い瞳に、ぼんやりと身体の芯が熱くなっていく。どろどろと、粘りつくように頭を満たしていた痛み、澱が溶け、心地良さすら感じる苦しさを孕んだ熱が、代わりに満ちた。ぼんやりとした頭のまま、これまでずっと口にしなかった七花への問いを言葉にしてしまった。

「女……か？」

「お前はっ！その……今まで、何度となく私の裸を見ても、何とも言わぬ……。汽口慚愧にしても、結局は……その、私の勘違いというか……に過ぎなかった。私と風呂に入る時も、いつも通りときた……くっ、口づけをした時は、反応してくれたが……」

しかし、言葉にしておいて何だが恥ずかしい。それはもう恥ずかしい。初心な年頃などとうに過ぎ、女であることを捨ててきた身だというのに、なぜこんなにも恥ずかしいのか。今に燃え出すのではないかと思えるほど全身が熱く、特に顔が熱い。やっとの思いで、少しだけ視線を上げると――

「……」

「っ！！？」

私を見ないように目を逸らしたまま、真っ赤になっている七花の姿が見えた。その顔に浮かんでいるのは汽口慚愧にも、あの不愉快な女にも、姉である鑢七実にも見せなかった、私が口づけをした時に見せた、私だけが知っているあの表情だった。照れている、恥ずかしがっている、刀ではなく、ただ一人の人間、ただ一人の男として

の顔。どくん、と大きく心臓が鳴ってさらに、さらに身体が熱くなった。

「女に、興味があるかと言われても……よく、分からん……。俺は、とがめに惚れて、とがめの刀になると決めた。とがめのために、戦うと覚悟を決めている。だから、その……とがめ以外の女に興味の持ちようが……うわっ！？」

どうにもならなかった。駒だとか、復讐だとか、利用するためだとか、全てが吹き飛んでしまって、気がつけば七花に飛びかかって押し倒していた。

「何すんだよ、とがめ！」

「ちっ、ちぇりお……」

背中から倒れ込みながらも庇ってくれたのだろう、痛みはほとんど感じなかった。しかし、すっぽりと七花の両腕に包まれ、抱き合う体勢になってしまう。衝動に任せた行動だったので何も言えず、ごまかすためにいつもの言葉を口にするが……余計に恥ずかしさを煽るだけに終わった。

「とがめ……どうしたってんだよ」

「私にも……分からんのだ……」

明確な形にならないままの言葉、思いがぐるぐると渦巻く。口に出そうとするたびに、それが正しいものではないように思えて、結局は閉ざしてしまう。伝えたいのに伝えられない苦しさ、もどかしさを少しでも分かってほしくて、玉鋼のように硬く、しなやかな七花

の背中に回した腕に力を込め、身体を押し付けた。

「七花……問いを、変える……。興味ではなく、その……女を抱きたい、と思うことはないのか……？今、しているようなものではなく……身体を、重ねる。情を交わすという意味で、抱きたいと思わないのか……？」

答えを聞きたいと望むのに、今すぐにでも耳を塞いでしまいたいと思う。高まる期待の裏で、同じだけの大きさで不安が揺れ動いている。僅かな沈黙が恐ろしく長く感じられて『ただの冗談だ』と立ち去ってしまいたくなる。

「とがめの言うような意味で、女を抱きたいと思う感情は……俺にはよく分からん」

「……そう、か……」

あれだけ高まっていた熱が、嘘のように冷えていく。あまりの冷たさに、かたかたと身体が震えてしまいそうになるが、七花に悟られるわけにはいかないので必死に抑えた。

「だけど」

「えっ？」

「だけど……ちょっと前から、とがめを見ているとおかしな感じになる。こう、今みたいに、ぎゅっとしてやりたくなったり、寝顔を見ていると穏やかなのに荒れてくるような妙な気分になる。普段通りにしようと思っていないと、苦しくて、どうしようもなくなるんだ。……他の女を抱きたいとは思わないけど、お前なら……と

がめなら、抱きたい」

「……なぁっ！！？あっ、あああっ、こっ、ここここ、こっちを見るな！！」

七花が言った言葉の意味が、ゆっくりと頭に滲み込んでいき、身体と頭が、冷える前とは比べ物にならないほど熱くなった。燃え盛る火炎そのものになったような気がする。きっと、顔など真っ赤になってしまっているだろう。七花の顔を見るどころか、今の自分を見られないために静止の声を出すのが精一杯。

「わっ、分かった」

着物越しでも伝わってくる七花の体温。外を出歩く時、幾重にも纏う着物を通してもはっきりとした熱が沁み込む。七花の厚い胸板に触れている頬、手からその体温が平常よりも遥かに高いことが分かった。耳に届く鼓動は、時折抱き合って眠る時よりもずっと速く、大きい拍を刻んでいる。

「七花……少しだけ、腕を離してくれ……」

「とがめ？」

「大丈夫だ。ちょっと、身体を起こすだけだから」

ゆっくりと身体から離れていく七花の腕。両脚を開き、七花の鍛え上げられた細い腹を跨ぐようにして体勢を整える。両手は高い熱を伝えてくる胸板の上。倒れた拍子に束ねていた紐が解けたのか、男にしては艶のある黒髪が広がり、僅かに赤らんだ七花の顔が眼下に見える。

「七花……」

「へっ？」

何をされるのか分からず、戸惑いの表情を浮かべるその顔を右手で撫でた。ゆっくりと、指先だけでなぞっていく。愛おしい。ただ、ひたすらに愛おしい。迷いも、痛みも、後悔も、全てが消えていた。あるのは、目前の男に対する深い、深い愛情だけ。どんな罰を受けても構わない。虚刀流も、完成形変体刀も、奇策士も……復讐も関係なく、今、この一時だけ、心の底から鑢七花に惚れる。ただ一人の女として惚れて、ただ一人の女として、全てをこの男に与えよう。

「目を、閉じて……そのままでは、少しだけ、恥ずかしいから……」

目蓋を閉じた仮初の暗闇の中で、重ねた唇から流れ込む七花の熱に震えた。言葉にならない『思い』は抱き合うことで、それでも伝えきれない『想い』は唇と身体を重ねることで、交わして伝える。

「ひっ、ああっ……くっ、ぅん、しち、か……もっ、ゆっく……りぃいいいあああっ！！」

粘つくように蕩けきった嬌声が耳朶を打つ。男の情欲をそそるだろう浅ましい喘ぎ声が自分の口から零れ落ちていることが信じられない。しかし、鋼を束ね上げたような両腕が私の身体を痛いほどに抱き締めるたび、低く激しい呼吸と共に強靭な男の身体が動くたび、私の身の内で荒々しく熱塊が暴れるたびに――

「そん、な、おく、ぃあああっ！？おねが……すこし、やすませ……あっ、んっ、ひっぃ、ふかすぎ……あっ、あああああああっ！！！！？」

私を『私』として縛り付けている全てが粉々に壊され、白く遠いどこかへと吹き飛ばされる。残るのは激しく燃え盛る快楽の焔と、私が身体を与え、私の身体を貪る目の前の男に対する愛情。今だけ、今、この一時だけと自分に言い訳をして、溢れ出した想いを言葉に変えた。

「すきっ、しちかぁ……あっ、くっんんんっ！！？しちかっ、しち、かぁっ！」

燃える。男の名前を呼ぶたびに。私を愛すると言った男の名を、鑢七花の名を呼ぶたびに、魂が燃えて火の粉を散らすようだ。自分の命を削って、燃やして、温もりをこの男に与える。灰すら残らぬように激しく、激しく。そうして命尽きるのならば、それはどんなに幸福な終わり方だろうかと、激しく明滅する頭の中で夢想した。

「はっ、はぁっ……とがめ、とがめっ……！」

耳から滑り込んでくる獣のような息遣いと低い声。名を呼ばれるたびに、まるで身体の芯を握り潰されるような快楽が襲ってきた。それが恐ろしくて愛おしくて、汗に塗れた腕と脚で必死に七花の身体へとしがみつく。

「あっ……はぅ、うっんんっ！？んむっ、ちゅっ……ちゅ、くっ、ふぅんんん！！」

不意に頤を掴まれ、乱暴に顔を上げさせられる。幾筋も、幾筋も、

流れ溢れる涙でぼやけた視界には、切なそうに歪んだ七花の顔。その瞳を見ただけで、何を求めているのか伝わった。言葉を返す代わりに、頷く代わりに、瞳を閉じて、唇を差し出した。間髪いれずに重なってくる七花の唇。少しだけざらついた感触は、私の口から溢れ続ける唾液であっという間に潤う。

もっと重なりたくて、もっと繋がりたくて、少しだけ七花の唇を舌で撫で誘う。戸惑うこともなく、喰い尽すように七花の舌が這入ってきた。受け入れ、絡ませ、七花の中へ私を滲み込ませるように、私の中に七花を刻み付けるように、深い口づけを交わす。だが、その刺激だけでは足りなかったのだろう、唇を重ねたまま七花が再び激しく動き始めた。快楽に導かれるまま上げた絶叫は、唇を塞がれて形へとならない。

「んんっ！？んふぅぅううっ、ぷはっ、あああぁぁあっ！！？しちっ、か、おねがっ……ゆるしてっ……わたっ、しを……こわしてっ、しちかぁっ！！しちかぁぁぁ！！」

速度を上げ、身体の中を貫き通さんばかりに身の内で暴れ狂う七花の『男』。自分でも何を言っているのか分からず、押し出されるように叫びを上げて四肢に力を込めた。限界寸前まで膨れ上がった熱が弾ける予感に、熱病にかかったような激しい痙攣が起こる。忌まわしい過去が、七花との出逢いが、過ごしてきた日々が、浮かんでは消えて真っ白に染まっていった。

「とがめっ……とがめ……っ！！くっ、うっ……いくっ、ぞっ……とがっ、めっ……くっ、あっ、ああっ……！！」

「――――っ、――――――！！――――――っ、あっ……ひっ……ぃいい、ぁぁあああぁぁぁぁぁぁあああああっ！！！！！！」

飛ぶ。消える。白い。黒い。浮く。沈む。断片的な言葉が次々とちらついた。歯の根が合わずにがちがちとぶつかり合う音がひどく遠い。壊れそうなほど力を込めているはずの四肢が、自分のものではないようだった。震える七花の身体、どくん、どくん、と脈動する七花の『男』、身体の中に注ぎ込まれる熱だけが鮮明に感じられる。

「――――っ、はっ、ふっ……ふぅ……」

「――――――はっ、はっ、はぁっ、はぁっ……」

ぐったりと脱力して私の上にのしかかる七花の身体に腕を回し、汗に濡れた背中を撫でる。指を僅かに動かすだけでもふるふると痙攣が起こり、これ以上は、どこも動かせそうになかった。今は、七花の鼓動に耳を傾けて、温もりに包まれて、眠ろう。

『――――七花……愛してる……』

私の首筋に顔を埋めたままの七花に聞こえぬよう、見られぬよう、唇の小さな動きだけで想いを伝えた。

――――もうすぐ、私たちの旅が終わる。

第二十話　無題　刀語二次創作　十八禁要素あり（後書き）

アニメ版を最終話まで見終わり、他の目的で書いたものの使われることなく放置されていた二次創作を加筆修正した文章です。

最終話のとがめさんには泣かされた……。

何とか、幸せになってほしいという願いを込めて書いてみた。

しあわせなおしまい。（前書き）

Ｆａｔｅ二次創作です。

ヘブンズフィール編のバッドエンドを妄想してみた。

堕ちた桜が最後に辿り着いた幸福な終わり。

１８禁です。ここから先はＲ指定だ！です。おまけにグロな描写もあります。

黒桜無双で凛ちゃんが酷い目に遭ってます。

士郎くんもボロボロです。

閲覧する場合は本当に注意してください。

気分が悪くなったり、暗い気分になってしまったら即座に中断して明るい気分になれるものを探してください。

しあわせなおしまい。

悲鳴、絶叫、嗚咽、嬌声、狂笑。

暗闇の中で幾度も反響して混ざり合う甘い甘い協奏曲。良い気分だ。とてもとても、良い気分。こんなにも良い気分になれるのなら、もっと早くに我慢することを止めれば良かった。いや、我慢して我慢して、あんなにも苦しい思いをし続けてきた私だからこそ、こんなに素敵な時間を与えられているんだ。そう、これはご褒美。正当な対価。ただ、思うがままに楽しもう。

「ねえ、そう思うでしょう？姉さん」

返事はない。目の前でぐったりと頭を垂れる少女は、ひたすら荒い呼吸を続けるだけ。ずたずたに破かれた服の残滓が纏わり付く真っ白な裸体。それのなんと綺麗なことか。綺麗なままで、傷がつくこともなく、燦然と輝いているひと。それが今、私の手で、私の意思で、汚されている。ぞくぞくと震えが走った。呼吸のたびに震える乳房、蟲たちの粘液で艶めく肌と黒い髪、見ているだけで子宮が熱く疼いているのが分かる。その熱があまりにも心地よくて、ぶるりと身を震わせると、溢れ出すように身の内から零れた生温い液体がねっとりと内股を伝って流れていった。

「さく、ら……あんた……いいかげんに……めを、さま…ひぃ、あぁあぁぁあああぁぁぁあああ！！！！？」

「私の許しも得ずに勝手に喋るなんて……本当、分かってないですね。此処では、主に絶対服従が基本原則なんです。ほんの少しでも逆らう素振りを見せただけで厳しいお仕置きを受けるんですよ。今、

姉さんがされている性感帯を蟲の毒で犯されるなんて、軽すぎて泣いて感謝しなきゃいけないんです。でも、安心してくださいね？姉さんが簡単に壊れちゃわないように、私なりに優しく段階を踏んであげているだけですから。いずれ、厳しいお仕置きもしてあげます。ふふふっ……卵巣まで蟲に犯されるってどんな気分か、姉さんに知ってもらえる日が来るなんて思わなかった」

身体中のあらゆる性感帯を同時に、くまなく責められて姉さんが泣き叫ぶ。口の端から涎を垂らして、限界まで見開いた目から幾筋も涙を流して、嫌悪感と快感に歪み切った表情で、何度も何度も絶頂に達している。達するたびに驚くほど大量の愛液を滴らせ、知ってか知らずか誘うように腰をくねらせる。

「姉さんたら……こんなにお尻を振って、発情した牝猫みたいですね。蟲を見ただけで泣き叫んでたのに、気持ち良くしてもらったら愛情が湧いたんですか？こんなに濡らして……」

「あっ……ああっ……やっ、やぁ、ゆび……いれちゃ、やっ、あっんんっ！！？」

「んっ、あははっ、嬉しいですか？姉さんの中、私の指にぴったりと絡み付いて、ちゅうちゅうって吸い付いて奥に誘ってますよ？きっと、この子たちも気に入ると思います。たくさん、たくさん、可愛がってもらえますよ、姉さん」

幾重にも重なる襞をかき分けた先にある、柔らかく解れきった処女であることの証明を撫でる。私の時のように、激痛と絶望を与える奪い方をしても良かった。だけど、それじゃあ、強くて綺麗な姉さんは折れない。痛みと絶望を跳ねのけて、きっと立ち上がる。そんなの、楽しくない。蟲に犯されて、よがり狂って、自分はそんな女

なんだと心の底まで刻み付ける。最初から心を折るんじゃなくて、ゆっくりと丁寧に、絶望と快楽の毒で溶かす。壊すのは、それからでも遅くない。

「姉さんが今、どんな顔をしてるか分かりますか？ほら、こんな顔をしてるんですよ……」

ぱちりと指を鳴らし、全身を映せるだけの大きな姿見を顕現させる。激しい快楽に濁り、ぼんやりと虚空を泳いでいた姉さんの瞳が鏡に映る自分の姿を捉える。

「い……や……うそ……こんなの……」

「嘘なんかじゃありませんよ。私が、姉さんに嘘をつくはずないじゃないですか。ふふっ、ほら、姉さんの『ここ』もこんなに潤んでる」

姉さんの身体を縛る蟲たちの触手を動かし、鏡に向かって脚を開く体勢を取らせる。脚の開きに合わせて綻んだ秘唇からとろりと粘性を増した愛液が溢れ、滑らかな曲線を描くお尻のラインに沿って流れた。指を入れ、かき回すたびにぐちゅぐちゅと卑猥な音が響く。

「……姉さん」

豊かな黒髪に隠れた姉さんの耳を出し、そっと唇を寄せる。これが始まりの言葉。そして、おしまいの言葉。

「私は、どれだけ嬲られても、自分から蟲で快楽を貪ろうなんて考えられませんでした。なのに、姉さんは、今もこうして腰を振って蟲を誘ってるんですよ。ぐちゃぐちゃに濡らして、『貫いてほしい』

『犯してほしい』っておねだりしてるんです。私、期待してたんですよ？姉さんなら、きっと私みたいに弱く泣いてばかりじゃなく、どんなに嬲られても毅然としたままだって。なのに……こんな始まりの段階で、牝の顔をして、蟲を誘うなんて……本当、がっかりしちゃいました」

「あっ……ああ……いや……ぁ……こんなの、ちが……っ」

がたがたと震えながら、姉さんが失禁を始めた。ぱちゃぱちゃと音を立てながら、愛液混じりの水溜まりが広がっていく。

「でもね、姉さん。そんな最低の本性を隠していた姉さんでも、見捨てたりしませんから。ずっとずっと、此処で可愛がってあげます。この子たちと一緒に、ね。ああ、そうだ。とても大切な人を紹介するのを忘れてました……すみません、『先輩』」

私の呼びかけに合わせてゆっくりと歩み寄ってくる人影。乾きかけたどす黒い血に染まり、身体のあちこちが『内側』から突き出した剣で貫かれた姿。大好きな、大好きな、私だけの先輩。

「士郎！？いっ、いや！！見ないでぇ！！」

「心配しなくても、姉さんみたいな浅ましい牝を見たりはしませんよ。『先輩』は、私しか見ませんから。姉さんがどんな女なのか、『先輩』にもよく知ってもらおうと思って連れてきたんです。それと、姉さんが蟲たちと楽しんでいる時に私一人だけなのはちょっと寂しいですから……『先輩』と赤ちゃん作ろうかと思って」

分厚い胸板を撫で、たくましい腕の筋肉を指でなぞる。ぼんやりとしたままの瞳が乾きかけていたので、唾液をたっぷりと乗せた舌で

丁寧に舐めた。愛おしい。何もかもが、狂おしいほどに愛おしい。
此処には『先輩』が居て、いずれ『先輩』との可愛い赤ちゃんが生まれて、あんなにも遠くで輝いていた姉さんが堕ち穢れて、私の足元にひれ伏す。今の私の世界は、こんなにも幸福に満ちている。

「いやぁぁぁあああぁぁぁああ！！！！もうやだぁ！！蟲なんか産みたくないぃぃぃ！！」

「あははっ、『先輩』、聞こえますか？姉さんたら、あんなに大きな声出してる。もう、何度も蟲に孕まされて、幼生を産み落としてるのに。あんな風に泣き叫んでるけど、本当は何度も何度もイッてるんですよ？大きなお腹をぶるぶる震わせて、少しだけ大きくなったおっぱいから母乳を噴き出させて、イキ狂ってるんです」

姉さんの悲鳴を聞き、乱れ狂うその姿をじっくり眺めながら『先輩』の上で腰を振る。ぐちゅぐちゅと身体の中がかき回され、甘い快感の痺れが全身を走り抜ける。『先輩』の剛直が奥深くに潜り込んでいくたびに、子宮に宿った愛しい命も嬉しそうに動いた。きっと、女の子だろう。大きくなったお腹を擦り、子守唄を口ずさむ。

「あっ、んっ……『先輩』……イキそうなんですね？いいですよ、中でたくさん出してください……はぁ、あああっ！！！！」

びくびくと震えながら注がれる精液の熱で絶頂に達した。もう少しでこの子が産まれる。きっと先輩に似て優しく、ちょっと気の強い子に育つはずだ。精液の熱に当てられたのか、以前よりも一回り大きくなった胸が疼きだす。

「はぁ、はぁ……『先輩』、ごめんなさい。おっぱい張ってきちゃいました……手伝ってくれますか？」

無言で添えられる両手。節くれ立った指がふくらみに食い込み、ゆっくりと圧力が加えられていく。温かい流れが痛いほどに立ち上がった先端に向かっていき、僅かな解放感と共に真っ白な雫が迸った。一度出始めてしまうと、あとはそれほど力を込めなくてもどんどん溢れる。『先輩』の身体を起こして、その口に乳首を含ませる。私の身体で作られたものを『先輩』に糧として与える大切な行い。強く、優しく、乳房の中に溜まっていた母乳が吸い出され、『先輩』の喉が動いてその身体の中に流れ込んでいるのが分かるたび、大きな悦びが頭と身体を満たす。

「ありがとうございます、『先輩』。ちょっと姉さんの様子を見てくるので、休んでてくださいね」

立ち上がり、どうしても流れ出してしまう『先輩』の大切な精液を指で絡め取り、一滴たりとも無駄にしないように舐めて飲み込む。ぜぇぜぇと息を切らせながら悶え苦しむ姉さんに歩み寄り、俯いたままの顔を上げさせた。

「姉さん？どうしたんですか？いつまでも休んでいないで、早く産まないと。いつまでたっても私が言い付けた数を達成できませんよ？」

「はぁ……はぁ……もう……ちからが、はいらな……ごめんな……さ……」

「この子たちは姉さんの大切な『赤ちゃん』なんですよ？いつまでもお腹の中に残してたら、苦しくて可哀想じゃないですか。仕方な

いですね……また私が手伝ってあげます。その代わり、姉さんが産む蟲の数を倍に増やしますから」

「……！？いや……いやぁ……がんばる……から。ちゃんと……うむからぁ……。んっ、くぅ……ぁぁあああぁぁぁあああっ！！！！」

同性の目から見ても羨ましくなるほどに、閉じ合わさった縦筋の慎ましい姉さんの秘唇がにちゃりと歪に開き、粘っこい水音と共に粘液を纏った蟲の幼生体が何匹も産まれた。出産の苦しみと同時に激しい快楽も襲うのがマキリの蟲たちの特性。絶頂の艶を含んだ叫びが響き渡り、姉さんの身体がびくびくと痙攣する。すっかり癖になってしまったのか、ぶるりと身震いしたあと失禁を繰り返す。あとで厳しく躾けないといけないが、今はねぎらって安心させておく。魔術師として最高クラスの素質を持つ姉さんの身体から産まれた蟲は、どの子も規格外と言ってほど上等な力を宿している。お爺様が存命していたら、さぞかし喜んだことだろう。

「ふふっ、頑張りましたね。これで、目標の数までもう少し。達成できたら、先輩の精液と私の愛液で育てた特別な蟲を貸してあげますから、その子にたくさん可愛がってもらってくださいね。他の子たちに比べてずいぶんと元気が良いですから、たくさん赤ちゃんを孕ませてもらえますよ」

「はぁ……ひっ……ぅ……うぅ……は、い……うれし、い……です……」

嗚咽混じりで聞こえてくる恭順の言葉。これ以上ないほどに理想的な関係。嬉しいのに、楽しいのに、幸せなのに……何かが、どこかが間違っているような気がしてほんの少しだけ胸が痛み、聞き覚え

のある声が幽かに木霊する。それが酷く気に障って、八つ当たりをするように狂宴を再開した。

「『先輩』……今度は、後ろからお願いします。お腹の赤ちゃんならもう大丈夫ですから、たくさん犯してくださいね……。姉さんには、蟲に種付けされてイキ狂うところをじっくり見せてもらいましょうか？興が乗ったら、私のおっぱいを吸わせてあげますよ」

――……そうだ、だからこそ、護らないと。――が犯した罪、――を責める罪、――が思い返す罪、全部から、護るんだ。俺の前でだけ笑えた少女。未来のない身体で、俺を護ると言った彼女が――俺以外の前でも、いつか、強く笑えるように――

――本当はね……私が頑張れば、あの子は『普通』の幸せを手に入れられるって思ってた。私は、自分の意志でこの道を選んだから、後悔なんてないけど……あの子には、――には、真っ当な幸せを感じて生きて欲しかったの。心の底から好きな人と恋に落ちて……その人の赤ちゃんを宿して……子育てをしながら普通に年を取って――新しい家族が増えていく喜びを感じながら、生を終える。そんな、生き方をして欲しかった。バカよね……私ったら、あの子が抱えていた本当の苦しみを分かってあげられずに、そんな空想ばかり……見ていたのよ――

『先輩』に剛直で何度も貫かれながら精液を注がれ、子宮の中で身じろぎする可愛い赤ちゃんの胎動を感じ、汚濁のような快楽にむせび泣きながら私の乳房に吸い付く姉さんの髪を撫でる。満たされつくした激しい絶頂に身を任せ、曖昧に霞んでいく意識。歓喜の涙に混じって、何か別の涙が、一筋だけ流れ落ちていったような気がした。

しあわせなおしまい。（後書き）

やりすぎた。

最近ほのぼの、和み、癒しな文章ばっかりだったから張り切りすぎた。

反省はあまりしていない。

なぜか桜の暗い面は書き易いと感じてしまうw

それと、えっちい内容の創作をする時は女性視点の方が書き易い……理由は分からないけど。

泣きわめく凛ちゃん……とても良いものだー。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4068o/

読み切り二次創作　短編集

2011年8月21日17時04分発行